

樹 守

30th
記念号

KIMORI

2021

No. 30



一般社団法人日本樹木医会北海道支部

道支部の機関誌「樹守」No.30（記念号）を発行して……………	金田 正弘	1
特別寄稿 設立 30 周年を祝して ……………	鈴木 直道	2
特別寄稿 「樹守」創刊 30 周年に寄せて ……………	松本 竹吾	3
一樹木医の回想……………	館 和夫	4
支部の礎を築いた先達……………	鈴木 順策	7
「樹守」第一号の紹介……………	阿部 正太郎	11
「樹守」編集 11 年の思い出 ……………	真田 勝	14
歴史を重ね、これからを想う－「樹守」30 周年記念号に寄せて－…	桜田 通雄	16
全国植樹祭の成功を願って……………	高谷 俊和	18
橋場一行さんを偲んで……………	阿部 正太郎	24

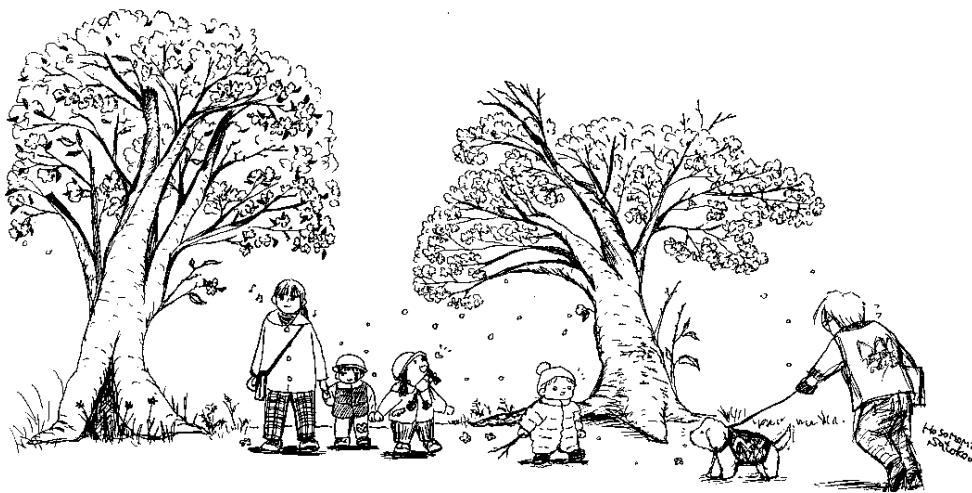


五稜郭のサクラ……………	山上 勝治	25
森のシンボルツリー・サクラの樹勢回復……………	豊田 栄	27
桜の樹勢回復に終始した活動……………	金田 正弘	29
厚岸町子野日公園のサクラ保護育成……………	百海 琢司	33
新人樹木医活動記……………	白鳥 桂子	38

林業一筋のなつかしい思い出……………	伊藤 務	40
「コロナ禍雑感」－感染拡大防止策の徹底という嘘と思考停止－…	吉田 憲一	43
樹木医として思うこと……………	菅野 信治	45
「小川内の杉」－軌跡を振り返る……………	熊谷 恒希	49
枝抜き雑感……………	鮫島 宗俊	54
樹木の害虫図鑑と所有する害虫写真……………	池ノ谷 重男	57
[コラム]シャクナゲは天然の温度計……………	真田 勝	58
「緑のカーテン」新たな提案……………	北浦 みか	59
「地域の赤ちゃんに木のおもちゃを贈る」 森の輪（わっこ）プロジェクトのご紹介……………	日月 伸	60
石狩市はまなすの丘公園砂嘴の地形と植生の関係……………	多田 光義	62
グイマツをめぐる考察と本別海の物語 [前編] ……………	加藤 真樹	64

ヤドリギが北海道の巨樹・名木に仲間入りをした日？……………	今田 秀樹	68
2020 樹木医活動の報告……………	木戸口 和裕	70
私の仕事……………	豊島 幸信	74
函齋松（かんさいまつ）－函館・亀尾町の名木－……………	吉田 一雄	76

北海道支部会員紹介……………	細縦 聡子	78
令和2年度北海道支部活動報告……………	事務局	85
資料 [北海道支部役員一覧・会員動向・技術研修会・講演会・冬期事例発表会記録] ……………	事務局	87
樹守総目次 No.1～No.30……………	真田 勝	94
樹守（きもり）の編集と投稿方法……………		100
編集後記……………		101



表紙：乙部町の縁柱（縁結びの柱）

撮影・提供：館和夫 撮影日：2016.9.22

北海道爾志郡乙部町にある巨大なカツラ。館樹木医が長年手がけられていた。
 写真は東京都・村田さんご夫婦（村田さんは奥尻出身の詩人麻生直子さんのご子息）の樹前結婚式の様子。「樹前結婚式は12年ぶりと、当時の新聞は伝えています。2013年8月の大雨被害で、周辺は橋が流され道路が崩れ、根元が洗掘され大きな被害を受けた縁柱公園ですが、この日は復興の喜びに溢れた、良い縁柱祭でした」（館樹木医）
 「この2本のカツラは、互いの幹と枝が結合しており、その姿から地元住民は縁結びのご神木としめ縄を飾り、良縁が結ばれるよう祈ったと言われている」※今田秀樹樹木医著「2018 北海道の巨樹・名木150選」より

道支部の機関誌「樹守」No.30（記念号）を発行して

日本樹木医会 北海道支部長 金田 正弘

温故知新

日本樹木医会北海道支部に所属している会員は、現在 60 名で道内一円に活動しています。私達の先駆けとなった、1 期 4 名大先輩の残した足跡に改めて敬意を表する次第です。

コロナ禍で支部の活動が休止している中、「樹木医カルテ—樹木診断、治療事例集」（日本樹木医会、2004 年 3 月発行）の改訂版発行予定の話がありました。この中に道南知内町の「姥スギ」の治療事例の記載があり（三代目支部長・斎藤晶氏寄稿）、現状が気になるところです。樹木の調査方法、診断の考え方、治療の技術等は、時代とともに進歩するものです。悠久の時間を送る古木名木に当たる時、最新の知見を基に、科学的に検証する必要性が問われています。30 号を積み重ねた樹守の存在は、貴重な資料として今後の利活用が期待されます。今こそ「古きをたずねて新しきを知る」この言葉を思い返しましょう。

樹守との関わり

私が樹木医に認定されたのは、2001 年 12 月です。樹木医制度の発足は 1991 年ですから 10 年目、その後 20 年目そして、今年 30 年目と切りの良い時代背景に活動をすることができました。

樹守は、私にとって 1 年間の活動の中、特に印象深い処置事例等を取りまとめ、投稿できる唯一の機会でした。道内各地に点在する会員の情報伝達手段として、地域に根ざす樹木医活動を支えてきたと思っています。諸先輩の構築した樹守発行の意気込み、精神を次世代の方々に受け継いでもらうことを願って止みません。樹守の名付け親、初代支部長・中内武五郎氏、三代目支部長・斎藤晶氏、四代目支部長・橋場一行氏、ほか他界された会員の方々に、つつしんで哀悼の意を表します。

樹木医登録更新制度の導入

令和元年度、CPD 制度による樹木医登録更新制度の導入が始まりました。詳しくは、樹守No.29（2020 年 3 月発行）六代目支部長・豊田栄氏の「登録新制度の導入にあたって」に記載されています。この制度は、対象樹木医 4 名の方々（29 期）だけの新制度ではありません。他多数の会員も、これを契機に共通の意識を持たなければなりません。樹木の調査、診断、治療は、何故必要か、どうして実施しなければならないのか等、原点に立ち返る時だと考えます。

緑と地球温暖化対策

近年発生する気象災害は、年々来襲頻度が短くなり道民の生命を脅かす、看過できない事象と言えます。これは、地球温暖化による気温の上昇によるものです。その原因の二酸化炭素を吸収固定するのは、唯一樹木（植物）だけで、生態系の構成の中に機能する大切な仕組みです。私達樹木医は、誰よりもこの事を知っています。膨大な森林のみならず身近な都市緑地の樹木を守る「木の命を守る」活動に、今一度関心を示す必要があります。

次を担う樹木医の活躍

私が樹木医を目指したきっかけは、二代目支部長・小田島悦氏の存在でした。残念ながら昨年退会（1 期・館和夫氏も同じ）の意向を示されました。小田島氏最後の投稿となった樹守No.20 に「近況（老境）」と題して「・・・時の流れの速さに感無量です」と書かれていました。私もその気持ちが解る気がしています。次を担う皆さんの活躍を期待します。



設立 30 周年を祝して

北海道知事 鈴木 直道

一般社団法人日本樹木医会北海道支部が設立 30 周年を迎えられましたことに、心からお喜び申し上げます。

貴支部が、平成 3 年の樹木医制度発足と同時に設立され、以来 30 年間、「緑化思想の高揚と質の高い緑の環境づくり」を実現するため、道内の巨樹・名木から街路樹や庭木などの身近な樹木に至るまで、その保護、育成に大きな役割を果たされてきたことに心から敬意を表します。

近年、地球温暖化の防止や生物多様性の保全、心身の健康づくりなどに対し、森林や樹木が果たす役割について関心が高まる中、本年 10 月には、皇族殿下のご臨席を仰ぎ、第 44 回全国育樹祭が苫小牧市の「苫東・和みの森」で開催されます。

道といたしましては、北海道発祥の「木育」の取組を一層推進し、道民運動として定着させていくとともに、森や木の働きについて理解を深め、豊かな感性と思いやりの心を育む人づくりや、人と森・木材が深い絆で結ばれる「木の文化」が息づく社会を目指して取り組んでまいります。貴支部及び会員の皆様におかれましては、今後とも、樹木の診断や治療をはじめ、各地の緑化活動の指導やみどりの普及啓発など、専門的な見地から、より一層のお力添えを賜りますようお願い申し上げます。

結びに、日本樹木医会北海道支部の益々のご発展並びに会員の皆様のご健勝とご活躍を祈念し、お祝いの言葉といたします。



「樹守」創刊 30 周年に寄せて

一般社団法人 日本樹木医学会
会長 松本 竹吾

「樹守」創刊 30 周年、誠にありがとうございます。30 年間編集活動に携われた関係者並びに執筆された全ての皆様に心より敬意を表します。

「樹守」は、樹木医相互の技術や情報交換を主たる目的として掲げ、学識経験者、有識者による特別寄稿、臨症事例や基礎研究の成果、樹木にまつわる歴史と文化の考察、新規合格者の紹介など掲載内容は多岐にわたりますが、題字の「樹守」に樹木医としての確固たる信念と矜持が現れていると感じます。

北海道での活動は、寒冷地特有の気象条件との戦いでもあり、臨床での知見を共有することは次代の治療、予防、育成の観点から貴重な経験値となります。また、広大な地域に点在する会員相互の連携や研修などが大きな課題となっていると推察されますが、これらの課題に対して「樹守」は重要な役割を果たしていると思います。

日本樹木医学会北海道支部は、平成 4 年に設立され、当初 4 名からスタートし現在 58 名の会員が登録されていますが、設立会員の皆様の発案により発刊され今日に至るまでの一冊、一冊にどれほどの労苦と情熱を傾注されてこられたのか考えますと本当に頭が下がる思いであります。

会員の皆様の技術の研鑽と向上に少しでも貢献できればとの一念が 30 年間継続してきた原動力になっているのではないのでしょうか。

さて、医学の定義は、「生体の構造・機能および疾病を研究し、疾病の診断・治療・予防の方法を開発する学問」（広辞苑）と記載されていますが、樹木医学も同じように樹木の構造や機能、疾病を研究し、診断・治療など科学的知見に基づいた方法を開発する学問と位置付けることができると思います。

現存する最古の医学書はエドウィン・スミス・パピルス（Edwin Smith Papyrus）とよばれ、紀元前 17 世紀古代エジプト時代に作成されました。この医学書には人体解剖的研究、診断、治療、予後診断などが記述されています。数千年前の著作が現代医学の発展に寄与していることは間違いなく、現代の私たちはそれを読むことができます。ここに、「書」を表すことの意義があり、今の時代における樹木医学のレベルを記述する著作は後世の樹木医学にとって重要な一頁となるに違いありません。

人間の医学は数千年の時を経て研究・体系化され今日の発展へと繋がっています。樹木医学はこの数十年でやっと研究が本格化し、精力的に研究が進められているところではありますが、現代人間医学のレベルにある基礎研究や疾病の治療、診断機器や治療機器の技術革新と治療薬の革新的な発明などは、今後長大な時間を有するものと考えられます。

私たち樹木医個々の力は小さなものかもしれませんが、樹木医としての地道な研鑽と活動が未来の樹木医学の発展に繋がると確信し、今後ともご尽力されることを願い、創刊 30 周年を慶祝することばとさせていただきます。

いち 一 樹木医の回想

館 和 夫（1期）

1 樹木医になるまで

私が少年時代を過ごした桧山管内の江差は、江戸時代から明治、さらに戦中・戦後にかけて山林が乱伐されたためか、大正の初めには前浜からニシンが全く姿を消してしまった。そのため地元の人々は、戦後、全国的に盛り上がった国土緑化運動に、人一倍熱心に協力していたようである。加えてその頃のわが家は、昔ながらの荷馬車や櫓そりを造る車屋で、ブナやナラなど多くの木材を消費する家業であったため、子供心にもいくらか責任を感じてか、いつしか自分も何らかのかたちで国土緑化に貢献する人間になりたいと願うようになった。

宇都宮の学校で林学を学び、卒業後、民間の造材会社で造材現場の帳場見習いとして短期間務めたあと、翌年の夏に道庁で行われた林業改良指導員資格試験に合格して道職員になったものの、まだまだ経験の足りない駆け出しの身である。日々触れあう下海岸の民有林の所有者に対して造林技術を教えるどころか、逆に教えられることの方が多き毎日であった。

やがて私は函館市郊外の道立林業試験場道南支場に転出し、研究員として道南各地の山野を歩きまわるようになった。折から世は高度経済成長期を迎え、外材の輸入が盛んになる一方、国内の林業は衰退していった。しかし、国民経済全体としては右肩上がりの好景気で、一億総中流化ともいべき生活意識のなかで人々は周囲の環境の中にささやかな潤いを求め、身近の緑化に努めようとする気運が高まった時代でもあった。

戦後復興のための造林事業が一段落する一方で、緑化樹・花木に対する大きな需要が生まれたのである。都市近郊の植木産業も活気づき、各地の名所旧跡や巨樹名木の保護を目指す技術者の必要性も高まった。

「山の木も町の木も共に大切」という認識が林務関係者の間でも一般的になり、私が日頃から取り組んでいた林業相談の範囲も広がって、私はごく自然に樹木医への道をたどることになった。

2 多難だった発足当時の北海道支部

平成3（1991）年12月5日、全国で76名、道内4名の樹木医の一人として道庁内で澤田林務部長から認定登録証を貰ったときは素直にうれしかった。でも、それからが大変だった。当時、道庁の林務部森林整備課に林業専門技術員（森林保護担当）として在職していた私は、翌春から通常業務のほかに知事公館をはじめとする各地の公園緑地や巨樹名木の調査診断・補修等に駆り出される一方、日本樹木医会北海道支部発足に向けての事務、さらには会報「樹守」の発行、といった具合で、まさに目が回るような忙しい生活が待ち受けていたからである。

加えて北海道では翌年の樹木医合格者がいなかったため、平成4（1992）年11月4日に発足したばかりの北海道支部は、たちまち人手と資金の不足に陥ることになった。心配した中内支部長が自ら法人・個人を合わせて17口ばかりの賛助会員を集めて一時をしのいだが、なお、会の運営は容易ではなかった。世間の期待が大きいだけに会の発展を図るためには、まず魅力的な広報資料が必要である。さしあたり会報の「樹守」がその役目を果たさなければならない。ちなみにこの誌名は発刊に当たっ

て幹事が持ち寄った案の中から、私の案が中内支部長の鶴の一声で決まったもので、短い新語の中に新たな業務に立ち向かう我々の心意気が表している点が気に入られたらしい。そのようないきさつで平成5(1993)年5月12日に誕生した本誌であるが、当初はワープロ印刷のA3版用紙半折のA4版、ホチキス使用の袋とじて、表紙込み14頁という小冊子にすぎなかった。

創刊号から5号までの発行人は中内支部長で、平成8(1996)年4月の第6号から平成12(2000)年の第9号まで小田島支部長が、さらに平成13(2001)年3月の第10号からは斎藤支部長に代わった。その間、編集人も館、小田島、橋場、真田という風が変わっていったが、本誌が面目を一新したのは平成14(2002)年3月の11号からで、表紙にはカラー写真を用い、正会員の増加に伴い記事の収録ページも当初の倍以上の36頁、後には60頁以上に上る目覚ましい充実ぶりで今日の立派な「樹守」に発展した。何かと行き届かないことの多かった初代編集人として、心から喜ばしく思い、感謝してお礼申し上げる。

ところで、本会発足当初からのマンパワー不足や、業務の繁忙といった悩みばかりでなく、新米樹木医には次から次へと乗り越えなければならない試練の垣根がたちはだかった。平成6(1994)年2月17日にポールスター札幌で行われた日本緑化センター主催の講演会もその一つで、道内の緑化関係会社、団体、地方自治体職員など、339名の受講者を集めて行われたこの講演会は、地元の緑化事業関係者による樹木医の品定めともいうべきもので、私にとってとりわけ頭痛の種であった。いわば渡島半島の南半しか知らない程度の私の貧しい知識や経験で、全道から集まったベテランの緑化関係者に対し、何をどう話してよいものやら、全く自信はないまま、当日の講演に臨んだのである。

次に当日話した内容の概要を、ごく短く要約したかたちで掲げる。

3 樹木医講演会 — 樹の命を守る【病虫害の診断と防除】(要旨)

林業改良指導員として道職員の仲間入りをした私は、森林保護の分野で農林漁業に従事する民有林の所有者に接触する機会が多かった。道立林業試験場の研究職員になってからも林業相談という形で、山林種苗業者や園芸業者などの若手の勉強会に参加して病虫害標本や被害情報を集め、写真を撮り、電話相談などでも聞き放し、答え放しにならぬよう、なるべく現地を見るようにして記録にとどめた。道南は温帯の上部に当たり、本州産の緑化樹花木は生育限界を超えているものが多く、気象被害を受けやすい。毎年沢山買って沢山枯らすという悪循環は避けなければならない。林業の分野では、林木の病虫害による被害の判断基準は、もっぱら木材の生産に有害か否かで決まるが、造園や園芸、緑地管理の分野では、その病虫害がいかに美観を損ない、管理が行き届いているか否かが問われる。以下、北海道に適した、緑化技術の確立のため栽培管理技術の向上を図る目的で、主要な林木や緑化樹花木類の内、手もとにスライド写真がある病虫害の一部についてその生態、発生例、被害の態様と、程度、防除法等について概略説明を行う。

＜講演で取り上げた主な樹木病虫害＞ ○印は特に重要なもの

【イチイ】○ナガチャコガネ、イヌガヤワタカイガラ【カラマツほか】○マイマイガ【ゴヨウマツ・ストロブマツ】○マツノクロホシハバチ【ゴヨウマツ・ハイマツ】マツカサアブラ【クロマツ・アカマツ】マツオオアブラムシ、マツカキカイガラムシ○マツアワフキ、○マツカレハ、○マツノキクイ、マツノコキクイ、○皮目枝枯れ病【モンタナマツ】○マツツマアカシムシ

【ヨーロッパアカマツ】 マツノシンマダラメイガ【スギ】 ○スギノアカネトラカミキリ、黒粒葉枯れ病【ポプラ・ヤナギ、ドロノキ】 ポプラハバチ、セグロシャチホコ、ヤナギシリジロゾウムシ、ドロノキハムシ○ポプラの腐乱病【ハンノキ】 ○ハンノキハムシ、ゴマダラカミキリ【シラカバ】 シラカバノクロボシハムグリハバチ【クリ・クルミ】 ○クリタマバチ○クスサン、クルミハムシ、うどん粉病、○クリ真正胴枯れ病、ナラタケ病、【ノムラカエデ】 イラガ、ムラサキイラガ【ニセアカシヤ】 クワゴマダラヒトリ、○ハリエンジュノアブラムシ、ベッコウタケ病【サクラ類】 ○モンクロシャチホコ、○オビカレハ、○コスカシバ、ヒメシロモンドクガ、エゾシロチョウ、○てんぐす病、○がんしゅ病、こぶ病【リンゴ、ナシ、ボケ】 リンゴスガ、○オビカレハ、○赤星病、【ミズキ】 キアシドクガ【クサツゲ】 ツゲノメイガ【ハマナス】 ○ドクガ、【エゾムラサキツツジ】 ツツジグンバイムシ【リュキュウツツジ】 ツツジコナジラミ、もち病、すす病

注) 被害防除のため当時紹介した薬剤は、その後、薬剤名や内容が変遷している場合があるので省略。

延々と樹木病害虫の話をしたが、これらは見て快いものではない。それだけに管理する人は、このようなものをのさばらせておくわけにはいかないので、虫や病気の特徴をよく知って経済的、効率的に防ぐ必要がある。

防除作業は概して遅れがちになるので先手必勝のつもりでその地にふさわしい防除暦を皆さんの力で造ってほしい。温帯上部から亜寒帯に属する北海道では、温帯系の緑化樹を育てるには気象被害など、かなりのハンディキャップがある。侵入害虫などに注意した上、各地で異郷土樹種を含め、健全に育てられるような技術体系を作る必要がある。

終わりにやや話が大きくなるが、日本人の美意識というものは、神代の昔、西方の照葉樹林文化という薄暗い森の神秘の中から生まれてきた。自然崇拜とか自然神信仰とか、そういうものが核になって京阪神地方で練り上げられた美意識というものが今日の庭園の技術や枠組みが出来ている。

しかし北海道は気候帯も、歴史も文化も違う。今後、地元での緑地文化を発展させるためには北海道らしい美を創造する必要がある。過渡期にある今日の北海道では、ちぐはぐな庭園設計の例も目立つ。総合的に見てやはり北海道らしい美を、北方樹種も活用した庭園の美、緑地の美というものを創造していくことが必要であろう。若干欠点をあげすぎて本州方面から来た緑化樹花木類は皆ダメということになって困るが、取り入れるべきは取り入れて、北海道らしい緑地管理技術なり環境にマッチした美を造っていく努力を重ねていただきたい。

注) 講演の全文は、廃刊となった北海道造林振興協会発行【林】平成6年7、8月号(通巻507,509号 所載)

おわりに

予定のスペースが尽きたようなのでこの辺でやめるが、他にも乙部の縁桂や江差法華寺のケヤキ、ツバキの補修など、本誌の過去の号に載せてあるように、私にとってそれらの仕事に関与できたことは最高の思い出である。道南の檜山に生まれ、木を使う町工場の家で育てて志した方向の道に進み、どうやら人並みに卒業できたかな？と、自問自答しながら日常の家事に励んでいる今日この頃である。現役の樹木医諸君のさらなるご活躍を心から念じている。

支部の礎を築いた先達

鈴木 順策(3期)

1. はじめに

昨年暮れに、日本樹木医会北海道支部(以下「支部」という)池ノ谷事務局長から、会報「樹守」発行予定の30号を記念号とするための執筆依頼があった。

私は55歳で林野庁北海道営林局を退職し、北見地方素材生産事業協同組合で高性能林業機械による新たな作業システム確立に関する調査で、現地調査員などを経て58歳で樹木医3期生となった。

以後27年の星霜を積み重ねているが「晩節に老醜をさらす」ことはできない。と、記憶を辿り思いつくまま振り返ってみることとした。

2. 北海道初の樹木医誕生

1991(平成3)年11月16日、北海道から初めて樹木医1期生4名が誕生した。

いずれも北海道庁の林務行政や林業試験場の現職とそのOBであるが、先輩諸氏の年齢は、年齢差一回りも違う54歳から66歳で平均年齢59歳。かつて道内各地で活躍した実務経験豊富なスペシャリスト[登録番号順:17小田島悦、32斎藤晶(故人)、40館和夫、44中内武五郎(故人)]である。

1期生は、全国47都道府県のうち広島県と山口県を除く76名であるが、55歳以上が54名(大正生れ8名含む)で71%を占め、樹木の保護・保全に対する研究者等の層の厚い経験豊富な人材が多いと解することができる。

3. 支部の設立と会報誌「樹守」創刊号の発行

1) 支部は1992(平成4)年11月4日、支部長に中内武五郎、副支部長に小田島悦、事務局長に館和夫、幹事に斎藤晶の各氏を選び発足した。

既に同年6月3日、任意団体として設立した日本樹木医会(以下「本部」という)との連絡調整を図りながら、当該支部会員4名が中内支部長を先頭に支部の「屋台骨」を構築するため、人手不足や資金等で試行錯誤を余儀なくされながら礎を築いたものと推察される。

が、幸いにも同じ北海道庁の現職やOBで気心も知り尽くした阿吽の呼吸で、大正生まれで東北なまりの気骨ある初代支部長中内武五郎氏の「胆力」とそのリーダーシップ、それを支えた先達を決して忘れてはなるまい。

2) 会報誌は翌年1993(平成5)年5月12日に支部会報「樹守」創刊号:No.1が発行され、会報名は発起人4名が精一杯案を持ち寄った末、中内支部長の鶴の一声で新造語である「樹守」に落ち着いたとされるが、流石「樹木医=木の医者」としてのセンスある誇らしい正に選る「会報名」となっている(以下この当時の樹守掲載内容は事務局保管「樹守」CD参照)。

4. 本部会報紙 TREE DOCTOR 創刊号の発行

1993(平成5)年7月1日創刊号:No.1が発行されるが、刈住昇初代会長挨拶で要点の一部を抜粋すると「樹木のいのちを護り、地球上の緑を少しでも多く残すために日本樹木医会が誕生した」「まだ会の基盤が固まっている状態ではない。会の運営や財政面でも多くの困難が横たわっている」「樹木

医の事務局は東京にあるが、その活動の中心は地域にある。各地域の樹木医の働きが樹木医会を支えている。地域の樹木医の努力がなければ樹木医会は成り立たない」と記述している。

特にこの広大な北海道では、極当然のこととして受け止めなければならないだろう。

5. 北海道に1期生に次ぐ3期生2名が誕生

1993(平成5)年11月17日先輩樹木医の後に続けと支部に3期生として、北海道では5番目と6番目になる2名〔登録番号順:192 鈴木順策 58歳(林野庁北海道営林局0B)、213 橋場一行氏 57歳(北海道庁林務行政現職:故人)〕の樹木医が加わり会員数6名となった(全国78名のうち台湾籍樹木医1名誕生)。折しもこの年の12月9日屋久島、白神山地が世界自然遺産に登録された年でもあった。

6. 先達の支部長時代とその主な足跡

1) 初代支部長:中内武五郎氏 1992(平成4)年度~1994(平成6)年度

(1)1994(平成6)年1月19日~1995(平成7)年3月29日「樹医の診察室」朝日新聞(朝刊)掲載、年度内49回(次年度の2代目支部長まで継続し都合55回の掲載となる)。

朝日新聞社の要請によって、毎週水曜日に自然科学のページとして「樹医の診察室」が設けられ、樹木医の存在が報道される(何故「樹医→樹木医」ではないのか最終執筆者としては聞けずに終わった)。①中内武五郎 10回執筆:1994.1.19~「植物たちのドラマ語りたい」外9回、②斎藤晶 10回執筆:1994.3.30~「樹齢150年のマツを外科手術」外9回、③小田島悦 7回執筆:1994.6.15~「桜の短命は寒さが原因」外6回、④館和夫 10回執筆:1994.10.5~「『長寿』は環境守ってこそ」外9回、⑤橋場一行 10回執筆:1994.12.14~「道内の長寿樹木ベスト5」外9回、⑥鈴木順策 2回執筆:1995.3.15~「巨木が発する神秘的な力」外1回

(2)1994(平成6)年2月17日樹木医講演会の開催、(財)日本緑化センター主催による北の都冬の札幌で、ホテルポールスター札幌会場に、市民や関係行政機関等約380名が参加し開催された。

(注)樹木医講演会は1期生誕生年度から開催され、札幌開催は全国累計9回目である。

開会式:主催者代表日本緑化センター挨拶、平成5年度樹木医認定登録証授与式、樹木医講演会「樹の命を守る」をテーマにした樹木医による講演である。

日本緑化センター中野常務理事による挨拶で、要点の一部を抜粋すると「樹木医講演会は、東京を皮切りに金沢、名古屋で開かれ今回の札幌は4回目であるが、どの会場も定員をオーバーするといった大盛況で関心が高い。北海道でも今年度2名が認定され6名となっているが、広いエリアの北海道に6名では手が回らないのが現状。少なくとも道内14支庁に一人ずつの体制を早く作りたい。日本の文化財に指定されている樹木は戦後400本と言われていたが、専門家が治療するという体制ができていなかったために現在は280本程度となり約3割が枯れてしまった。貴重な文化財としての樹木を次世代に引き継ぐ義務がある」などその必要性から「国費で養成すべく始まったのが樹木医制度である」と述べている。

続いて平成5年度樹木医認定登録証授与式では北海道庁を通じて林務部の紺野みどり対策室長から、一人一木植樹をスローガンに緑づくりをするなど色々な施策を講じているが、樹木医の活躍は大変心強い味方となる等の挨拶があり、鈴木順策、橋場一行氏の順に認定登録証が手渡しされ万感胸にせまるものがあった。開会式のセレモニーが終わって、樹木医講演会「樹の命を守る」

をテーマにした講演会である。中内武五郎氏（北海道植物美術病院）が「腐朽木の診断と治療」、館和夫氏（北海道庁林務部森林整備課）が「病虫害の診断と防除」、青森県支部の小林範士氏（弘前市役所商工部公園緑地課）が「弘前公園の桜の管理」とそれぞれ題して行われた。

この講演会の講師は樹木医1期生3名によるもので、参加者（市民や関係行政機関等）からは樹木医に対する関心の高さが会場内に伝わり成功裏に終わった。

（注）支部会員数7名（4期生まで）

2) 2代目支部長：小田島悦氏 1995（平成7）年度～2000（平成12）年度

(1) 1995（平成7）年4月1日～12月16日樹木医ノート 北海道新聞（朝刊）30回掲載 樹種27種

①小田島悦8回連載：連載樹種 アカエゾマツ・イチイ・カラマツ・サクラ（上、中、下）ナナカマド、ハルニレ ②館和夫氏5回連載：連載樹種 イチョウ、カキ、クリ、クルミ、ミズナラ ③窪田信作3回連載（4期生、北海道では7番目の樹木医となる）：連載樹種 ウメ、モモ（上、下） ④中内武五郎5回連載：連載樹種 エゾノコリンゴ、カエデ、グミ、ハギ、ムクゲ ⑤鈴木順策3回連載：連載樹種 シダレヤナギ、ハマナス、プラタナス ⑥橋場一行3回連載：連載樹種 シナノキ、シラカバ、ニセアカシア ⑦斎藤晶3回連載：連載樹種 シャクナゲ、ツツジ、ライラック

（注）支部会員7名（1、3～4期生）で執筆

以上のように新聞掲載されてからは、樹木医の存在が道内に浸透し、その後各樹木医による講演や文化財指定の樹木等の診断・治療は、テレビや新聞で報道されるようになった（1996.4.1日本樹木医会北海道支部発刊「樹木の特徴と育成・保護」参照）。

(2) 1995（平成7）年5月10日～6月14日「樹医の診察室」朝日新聞（朝刊）前年度から継続掲載

①鈴木順策6回執筆：1995.5.10～「威風堂々巨木が持つ『樹格』」外5回

（注）支部会員6名（1～3期生）で前年度から55回執筆

(3) 1995（平成7）年6月2日発行のTREE DOCTOR No.3は、特集「桜」と題した桜の保護・保全について掲載された。いずれも日本の有名な日本三大桜等の報告等である。その中に小田島悦氏が、北海道の野生種を主としたエゾヤマザクラ・カスミザクラ・ミヤマザクラについて、平成4年静内町から「二十間道路の桜並木」について調査依頼を受け、平成6年までの3年間に及ぶ「実態調査と診断結果」の概要を紹介している。北海道の樹木医としては拍手喝采の心境であったことは言うまでもない。

かつて私も山梨の山高神代桜など、研究者や仲間達に誘われて桜の勉強会に何度か参加してきたが、有名な桜の名所地での維持管理等は「科学に裏打ちされた治療等の実務経験豊富な樹木医」の出番が求められる。

しかし、不特定多数の観桜客にも「樹木医にも勝るとも劣らない」眼力の鋭い人もいるのは世の常で、ややもすると治療木等は常に注目の的（観察対象木）となって「臨床樹木医」の「真価」を問われるものである。が、心していなければならない。

(4) 1999（平成11）年5月21～22日、日本樹木医会北海道大会開催

新緑鮮やかな北の都札幌に、全国各地から正会員および賛助会員約210名が参加し盛大に開催された。総会に引き続き「北方樹木保全技術研修会」が開かれ、講演会では五十嵐恒夫北大名誉教授の講演と斎藤晶副支部長の事例発表が行われた。現地研修は、北大植物園で「北方樹木の育成・保全」をテーマに10パーティに分けて当該支部会員が案内・解説を担当し研修が行われ、エクス

カーションは道央、道南、道東の3コースに分け上記同様当該支部会員が案内・解説を担当した。北海道庁、札幌市、関係団体のご協力の賜物で立派な大会であり、今振り返ると私は大会開催宣言等とエクスカーションの道東担当であったが、小田島支部長のリーダーシップに改めて感謝である。

(注) 支部会員数 19 名 (10 期生まで)



平成 6 年 樹守 No. 4 双子の桜診断治療 (津別町)

3) 3 代目支部長：斎藤晶氏 2001 (平成 13) 年度～ 2004 (平成 16) 年度

(1) 2002 (平成 14) 年 9 月 5～6 日技術研修会開催、参加者 20 名 (うち賛助会員 2 名) 開催当日夕張郡栗山町の王子製紙 (株) 森林博物館で館長の幸田秀穂氏による概要説明を受け、以後同博物館研究員永田義明氏と樹木医伊藤務氏 (3 期生平成 11 年 9 月大阪支部から転入) の説明を受けながら資料館見学、王子の森、苗畑、試験林、シラカバ並木など視察した。翌日栗山小学校の校庭で、支部初の推定樹齢 130 年以上のシダレヤナギ (古い時代の大枝切断露出腐朽部) の公開治療である。

当日は、新聞テレビの報道関係各社や、教育委員会、引率の先生と小学生、一般市民が見守る中で斎藤支部長から「畏敬の樹木」治療の必要性について挨拶があり、その後当時副支部長の鈴木が参加会員の協力を得ながら治療を施し、今後経過観察の上必要に応じた処置を講ずることで終了した。

(注) 支部会員数 29 名 (14 期生まで)



平成 14 年 支部初のシダレヤナギの公開治療



平成 14 年 児童たちに「木のお医者さん」の説明

7 おわりに

紙面の関係等で多くを記述できなかつたが、北海道に支部が発足しその礎を築いた先達、それから 28 年の時間的空間の中で当該支部は逐年会員数が増加し、幸いにも現在正会員は 1 期生から 29 期生の昭和から平成生まれの会員は都合 59 名に達した。

然しながら、その「時」と「重み」は、隔世の感があるにせよ支部としての将来を展望した組織の舵取がより一層求められる時代になった。

遅きに失した感はあるが、支部の屋台骨は時代の変遷と相俟って、必要に応じ発展形へと再構築しなければならない。そして森林王国に相応しい「樹守」即ち「樹守人 (きもりびと)」として大地で大きく羽ばたいていくことが、後世に繋げる唯一の「鍵」ではなかるうか……。

「樹守」 第一号の紹介

副支部長 阿部 正太郎(12期)

「樹守 30号記念号」の発行に当たって、創刊号である「樹守第一号」を読みました。そして、その感想を支部会員の仲間に伝えたいと思いました。これについては、これを作った1期生の先輩が書いてくれるかもしれないという期待もありましたが、第12期生が樹守創刊号の感想を書くのも意義あることかと思ひ、僭越ながら書かせてもらうことにしました。

樹守第一号は4人の第一期生によって平成5年5月に発行されました。北海道支部発足の半年後の事です。支部会報を発行しているのは現在でも千葉支部と北海道支部だけです。僅か4人で、会報を発行するのは、さぞかし大変だったと思います。

初代支部長である中内武五郎さんは「創刊のことば」にこのように書かれています。

「このたび創刊された、この会報が、樹木保全に関する技術知識を高める上で大きな力となり、また、樹木愛護の精神によって結びついた会員相互の親睦を深めるためのより所となって末永く親しまれる機関誌になるよう、心から希うしだいである」

北海道支部発足の半年後の発行なので、樹守の歴史は支部発展の歴史でもあると思います。また、樹守第一号がなかったなら、今日の樹守もないかもしれません。そのようにも思えて是非紹介したかったのです。

樹守第一号を紹介するためには、これを作った4人の樹木医を紹介しなければなりません。独断と偏見をお許しいただき私なりに紹介させていただきます。



中内武五郎さん

最初に中内さんですが、一番左に前掛けを掛けては写っている人です。奇抜で愉快な人柄が分かります。初代支部長で平成4年から6年まで務められ、支部の基礎を築かれました。道立林業試験場を退職された後、中内植物美術病院（後の北海道植物美術病院）を開設して、広く活動されていましたが、樹木医になってからはさらに磨きがかかり、その多様で特異な活躍はしばしばテレビ・新聞などのマスコミに取り上げられ、世間一般の人が樹木医を知ることにもなりました。私にとってはカリスマ樹木医です。

創刊号の中に「会報命名の由来」あり、こう書

樹 守	
事務局 ●060北海道札幌市中央区北3条西6丁目 北海道林務部森林整備課内	
〒011(2ノ1)4111内31-278	
1993年5月12日発行 発行人 中内武五郎 [美幌市西4条北3丁目6-26] (平成5年) NO.1 編集人 館 和夫	

図 創刊のことば 図



日本樹木医会北海道支部長
中内 武五郎

近年、緑化思想の浸透にともなって、緑土の宝である巨樹名木の類を愛護しようとする気運が全国的に盛り上がってきている。
このような時代風潮を背景に、林野庁は樹木医制度の発足を企画し、その礎をうけた財団法人日本緑化センターによって平成3年11月に全国で76名、翌年には80名が樹木医として認定された。
その後、日本緑化センター内には日本樹木医会が設立され、各地域ブロックごとに樹木医会支部が結成されて今日に至っている。道内においても在住する4名の樹木医が発起人となって、平成4年11月4日に北海道支部を発足させた。目下、志を同じくする賛助会員の募集を行って、道内における巨樹・名木・美林、緑化樹花木等の樹木保全事業の発展を図ろうとしている。
このたび創刊されたこの会報が、樹木保全に関する技術・知識を高める上で大きな力となり、また、樹木愛護の精神によって結びついた会員相互の親睦を深めるためのより所となって末永く親しまれる機関誌になるよう、心から希うしだいである。

会報命名の由来

会報の創刊にあたって、会報の名前をどうするかという問題は、正直、頭の前問題であった。発起人4名が精一杯の案を持ち寄った末、支部長の頼の一声で「樹守」(きもり)という、いさか耳慣れない名前に着目した。辞書にもない造語であるが、わが国には古くから「山守」、「野守」、「花守」などという奥ゆかしい言葉があるので、その例にならって命名したのである。ともあれ、新しく生まれた会報の名前として、末ながく親しまれるように念願している。

樹守創刊号(平成5年5月12日発行)



1期生4人の筑波大での実習研修写真(H3.10.19)
左から中内・小田島・斎藤・館さん(館さん提供)

かれていました。「会報の名前は頭の痛い問題であった。4人が精一杯の案を持ち寄ったが支部長の鶴の一声で、館さんが出した「^{きもり}樹守」に落ち着いた。我が国には古くから「山守」「野守」「花守」などという奥ゆかしい言葉があるので、その例にならって命名したのである。末永く親しまれるよう願っている」よくぞ良い名前をつけてくれました。

また、中内さんは「植物とつきあって50年」という題名で書いています。要約すると、「少年時代から植物が大好きで、小遣いをためて買った図鑑や顕微鏡でいろいろ調べた。植物の講演などで全支庁に791回行った。樹木医になってからサクラ・ハルニレ・スギ・ブナ等多くの樹木の診断をした。定年の3年前に道を退職して、友内人の勧めで中植物美術病院を開き、記者に言われて『中内』を『北海道』に改めた。植物は美しい方がよいので植物美術とした等々」本当に植物（樹木も含めて）が好きで詳しくあったのがよくわかります。

小田島 ^{たけし} 悦さん

小田島さんは2代目の支部長で、平成7年から平成12年迄務められました。道の林務部を退職された後、(財)北海道森林保全協会(以下「協会」)に勤められましたが、この時から事務局は長い間協会に置かれることになりました。この協会には橋場一行・佐藤敬夫・斎藤満・阿部正太郎の樹木医が勤務することになります。小田島さんは活動家と研究者としての面を持たれており、阿寒の前田一步園の森林調査、新ひだか町の二十間道路桜並木の調査など重要で大きな調査を数多く手掛けており、先輩樹木医からよくその逸話を聞きました。また、この頃から始まった樹木診断の草分け的樹木医でした。

小田島さんは「厚岸町国泰寺の老桜樹の診断」という題目で書いています。国泰寺は蝦夷三官寺の一つで国の史跡に指定されており、ここに奥州石巻から移植された樹齢160年を超える貴重なエゾヤマザクラの老木があり、これを診断した時の事が書かれています。下記に要約します。

「20年程前から腐朽が進行し、著しく腐朽した状態になっている。ツガサルノコシカケも付いていたようで、外科手術は到底困難なので、今後の対策として①幹への雨水阻止②危険な枯枝の除去③根のための立ち入り禁止柵、パーク堆肥施肥④支柱の設置⑤早急に2代目苗木の養成が必要」

※平成27年に老桜樹を見る機会がありましたが、殆ど原形をとどめていませんでした。

斎藤 ^{しゅう} 昌さん

斎藤さんは3代目の支部長で、平成13年から平成16年迄務められました、道立林業試験場を退職された後、函館を中心に活躍され、多くの巨樹・名木・記念木等の診断治療を行いました、又、開発局・市役所など信頼が厚く、多くの委員をされ道南地方の優れた緑の創出に貢献され、知事から社会貢献賞を受賞されています。※斎藤さんが平成12年に診断・治療を行った「姥スギ」(神社の御神木として崇められている)の樹勢追跡調査依頼が、現在日本樹木医会本部より北海道支部に届いています(詳細は後日)。

斎藤さんは「風倒木発生の予知技術」という題目で書いています。下記に要約します。

「函館市桔梗町から七飯町峠下に至る10kmは日本の道100選に選ばれた樹齢130年の『アカマツ並木』、平成2年の風速28.8mの温帯低気圧によって相当倒れた。外観に腐朽等は無かったが、内部が腐朽しており、その腐朽率は断面積で35~40%であった。現存のアカマツに成長錐を入れて、内部の腐朽率を推定し、腐朽率が何%であれば風速何m迄耐えられるか、この時(平成2年)のデータから、それぞれのランク別に風倒木発生の予知を試みた。また、風倒を未然に防ぐため、樹冠部の減量、支柱による補強、治療技術等について検討した」この文章から斎藤さんは「アカマツ並木」の風倒防止を心掛けてきたことが分かります。

館 和夫さん

一番右側に写っているのが館さんです。4人の中では一番若く、当時、道庁の森林整備課に席があり、ここに事務局がおかれ、最初の事務局長として発足当初の支部を支えました。本来の仕事の他に樹守第一号の発行もあり、相当、お忙しかった事と思います。これについて、館さんは「編集後記」にこのように書かれています。「今日こそは今日こそはと思いながら、日々の勤めに追われて、つい会報の発行が延び延びになってしまったことを、先ず、お詫びしたい」

平成7年に道（林業試験場研究員）を退職され故郷江差町に近い函館に帰られましたが、この時から事務局は（財）北海道森林保全協会に移り、第3期生の橋場一行さんが長く事務局を務めることになります。

館さんは笑顔を絶やさぬ温厚な人柄で地域の人達に敬われ、多くのボランティア活動等もされました。そして乙部町の^{えんかつら}縁桂、江差法華寺のケヤキ等の巨樹名木を長年、手掛けておられました。今回の樹守の表紙を飾っているのはこの^{えんかつら}縁桂です。また、長年、男爵イモの普及功労者である川田龍吉男爵の生涯について調査研究をされ、そのことがJR（特急）の車内誌（2011年9月号）に写真入りで紹介されていました。

館さんは「巨樹名木の現状と対策」という題目で書いています、要約すると、「平成4年度から林野庁の企画により、3か年計画で各都道府県の巨樹名木の樹勢調査が行われている。本道では150本の巨樹名木が予定されており、初年度分として15種25本の樹勢診断結果が報告された。その調査結果と樹勢を維持するための総合対策について見ると、クロマツ等の針葉樹は樹勢が良く、クリ・エゾヤマザクラ・スモモ等の広葉樹はかなり悪かった」

また、江別市近郊の緑化樹苗畑（2.2ha）の害虫について「江別市近郊の緑化樹林木苗畑害虫」という題目で書かれています。多数の樹種に関する害虫が説明されていました。

むすび

このようにして作られた「樹守第一号」は「第二号」、「第三号」と引き継がれますが、「第三号」には第三期生の橋場一行さん、鈴木順策さんが加わり、（伊藤務さんは平成10年に大阪総支部から転入されました）さらに充実したものになります。その後、1年も欠けることなく、今回の「樹守30号記念誌号」の発行になりました。

これまでの樹守関係者の皆様に感謝し、さらに多くの会員が参加し、親しまれる樹守になるよう願ってむすびとします。

「樹守」編集 11 年の思い出

真田 勝（8 期）

北海道支部機関紙「樹守」（KIMORI）は 1993（H5）年 5 月 12 日の創刊以来、本年度に記念すべき創刊 30 号を迎えたことを、大変喜ばしく誇りに思っています。

私が支部会に入会した 1998（H10）年に、橋場事務局長より電話があり、新会員紹介を「樹守」に載せるので自己紹介を書いてくださいとのこと、さらに、土壌と樹木の植栽などについて何か書いていただけませんかと言われ、入会と同時に原稿を頼まれた思い出があります。まだ、会報を見ていないし、「きもり」？聞きなれぬ名前に戸惑いを感じましたが、現職時代の仕事の一端をまとめて提出し、9 号に掲載されたのが初めて、会員はまだ 8 期生 2 名を加えて 12 名の時でした。

それまで樹守の編集は、主に事務局長がされてきましたが、支部結成 10 年も過ぎると事業内容も充実し、年々事務量が多くなり、樹守の編集が大変重荷になっているといわれ、それでは事務局から切り離し、樹守の担当者を置くことにしようとなりました。さて、では 12 人の中から誰にやってもらうかですが、当時の支部役職者を除き、遠隔者、現職者などを除くとおのずと絞られてきて、私が指名されることになってしまいました。

当時私は定年後、（財）林業科学振興所（以下「林振」）に非常勤職員として在職し、傍ら毎週木曜日、札幌市平岡樹芸センターに「緑の相談員」として主に樹木の相談に応じていました。

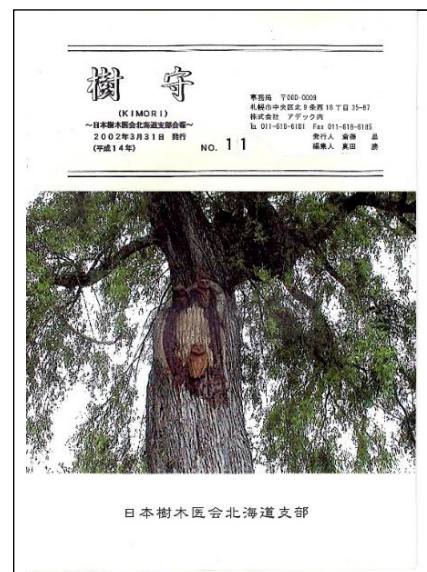
林振での仕事は、当時林野庁が進めていた「酸性雨モニタリング事業」で全国の定点で 5 年ごとに採取された土壌と毎月ごとの雨水の分析作業で、森林総研の 1 部屋を借りて毎日のように出勤していました。大量に送られてくるサンプルを期限までに分析報告しなければなりません非常勤でもあり、勤務時間に縛られる仕事でもないので、編集などの経験はないが引き受けることにし、それ以来 11 号から 21 号までの 11 年間樹守の編集を担当することになりました。

樹守の創刊号は 1993（H5）年の発行で当初は不定期で年 2 回発行され、体裁は A 4 版 14 頁の簡単な袋綴じでした。5 号：1995（H7）年発行からは年 1 回の発行となり、また 9 号：2000（H12）年発行からは年度末の 3 月 31 日の発行に変更され現在に至っています。

私が担当する前は表紙らしい表紙はなく誌名「樹守」のみであったので、どうしようかと思っていたところ、そうだ森林総研の図書室に行ってみようと思いたち、閲覧書架に国内外の雑誌や年報、月報など、ずらりと並ぶ表紙を見比べ参考にし、樹守の書体やデザインはそのまま残し、その時々カラー写真を取り入れることに決めました。製本は用紙節約できるよう A 3 の用紙に両面コピーとし、簡単にホチキスで止めることのできる中綴じとしました。

早速表紙の写真を募集したものの一点も応募がなく、手持ちの写真を探し、研修会で公開治療を行った栗山町角田小学校のシダレヤナギの治療後の写真にしたのが 11 号の表紙です（写真）。

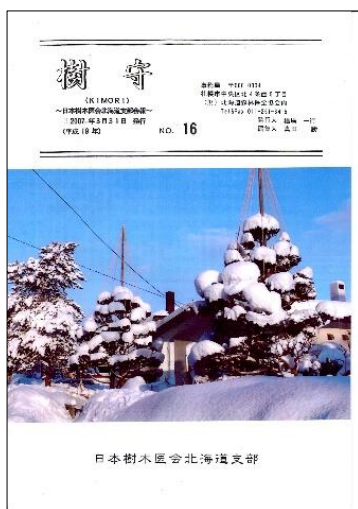
いよいよコピー、製本です。中綴じの場合、ページの組み合わせが複雑で、仮本をつくりそれに貼り付け、それを見ながらページを間違わないように注意しながら両面



表紙にカラー写真・中綴じの 11 号
（公開治療したシダレヤナギ・木彫の
フクロウが樹上から学童を見守る）

コピーし、ページ順に重ねて中央2か所を止めて、二つ折りし圧縮して中綴じの本が出来上がりです。さらに図書室の裁断機をお借りして3方を裁断し「樹守11号」の完成です。総会当日会員一同に配ると、これまでとは異なった体裁にウォーと声が聞かれましたが、今見るとコピーのまずさが目立ちます。

編集に当たっては原稿集めが重要ですが、なかなか集まらず指名で書いてもらうこともありました。また、研修会などに都合で出席できなかった会員にも考慮し、座学の講師にお願いしレジメをいただき掲載しました。中綴じとなると4ページ単位の増減となります。誌面の空白は、体裁上間抜けで好ましくないのでコラムやカットを入れて埋めましたが、自ら書かなければならないなど一苦労することもありました。カットには北方林業誌に多く使われた、鮫島惇一郎さんの描画を使用させていただき大変助かりました。当初は細かな投稿規定もなく、各自自由に字体、大きさ等もそれぞれで、誤字、脱字を修正する程度で、ただ張り付けただけのような編集でしたが、年々要領が分かったことやワープロの進化にも助けられ、少しづつ良いものになっていったと思っています。



お気に入りの16号の表紙
(雪吊り・オンコ)

表紙の写真は、会誌の顔になりますので何にするかは重要で、手持ちで良さそうなものがないときは、おぼしき人に頼んだりしましたが11冊のうち6冊は手持ちのものを独断で決めて使用しました。中でも自分が最も気に入っているのは16号の雪吊りの写真です。近年は札幌でも雪吊りは多く見られるようになりましたが、自宅の近所で大雪のある朝、青空に映える見事に雪を載せた雪吊りです。この2本のオンコも数年前に断幹され、今ではこのような風景は見る事が出来なくなってしまいました。この写真の原版をこの庭の持ち主に差し上げたら大変喜んでいただけました。

いつの間にか11年間も長きにわたって「樹守」づくりをやってきましたが、この間、私の最大の失敗話をすると、20号記念号を作成の時、A3用紙17枚68ページの大作で、裏表間違いなく各120部のコピーを終え、ページを整え、まず1部中綴じをして折り込み出来映えを見ようとした時、表紙の「第20号記念号」とすべきところが変換ミスで「記年号」になっているではないか！シマッタ！！と一瞬心臓が止まりそうなショックを受け、しかもカラーコピーの表紙120枚ではないかとガックリしたが、まだ綴じる前だったので少し良かったかなと気をとりもどし、すぐ字体を修正し、2台の高速コピー機を駆使し事なきを得た覚えがあります。

22号からは編集者が代わり発行部数も多くなったことなどから外注することになり、製本は無線綴じとなり、24号からは背文字も入り、また25号からは誌名も大きくすっきりし、さらにご支援、ご協力をいただいている森林総合研究所北海道支所、北海道庁水産林務部および道総研林業試験場より順次玉稿をいただき、花を添えて樹守は年々進化していることは私にとっても大変喜ばしいことであります。

われわれが扱う樹木は人生よりはるかに長生きするものであり、これを何かに記録し伝えなければなりません。「記憶は消えるが、記録すれば残り続ける」と言われるように記憶は年とともに薄れやがて消えるが、記録は誰かが読みよみがえります。

本会誌が全会員の共有できる記録媒体として永続し、活用されることを切に願うものであります。

歴史を重ね、これからを想う

—「樹守」30周年記念号に寄せて—

桜田 通雄 (15 期)

「樹守」の30周年おめでとうございます。樹木医制度創設と同時期に刊行開始ということですから、創刊時の北海道支部の熱意と盛り上がりを感じます。また、それを持ち続けた支部活動への敬意も表現したいと思います。継続する、長く続くことの意味は深いです。定期会誌を刊行する支部は全国で二つということからも、ひとしおです。

樹木医制度の軌跡

思いを巡らすと、「樹木医」の制度創設に努力した先輩達は、その職能の認知や職能の枠取り、そして命名に苦心したに違いありません。全てのことは時代と共に変化し、それに対応して、新たな必要性や視野が開拓され、発展してきたことは、様々な分野の歴史が示しています。御存じのように社会の移り変わりや学術や専門性の興隆・廃滅は、深い相関関係にあります。

明治後半から大正時代の植物関係の史料に、「植医」という名称が登場します。「植物病院」の名称を掲げた広告も見ます。これらからは、植物における現場臨床職能が、学制として、あるいは世間に多少は認知されていたことをうかがえます。

分野は異なるものの同様な立場を持つと考えられる「医師」や「獣医」は、明治以降の近代国家建設の中で、軍事や産業上の要請もあり、制度確立とプロの養成・拡充が着々と図られ、職能として早い時期に社会に定着しています。

一方、植物の病理や生理等に関する研究や実地応用は進展し、日本の植物学・園芸学、造園学も発展しました。しかし、現在のような樹木医が扱う事項についての社会的需要は散発的で希薄であった、ということなのでしょう。現場の技芸は個々に堅実に培って来たとは言え、これらを制度的に、大系的に構築する必要性や樹木医という枠取りを社会が要請するには時間を要したという歴史になったようです。

パンデミックと公衆衛生

2019年に出現した新型コロナウイルス感染症は世界中に大変多くの感染者、死者をだしています。日本でも生活を根本から揺るがす厳しい事態が続く、未だ収束が見えません。事態は世界中で混迷を招き、不安をおとめています。しかし、歴史上、このようなパンデミックは何回もあったことも再認識します。そして、その解決のため、調査研究が積み重ねられ、応用された事柄の一步一步が、医療世界の発展につながる歴史であったこともわかります。

今、連日の報道は、病院現場での患者の治療、介護の緊迫した臨床の様子を伝えます。加えて、断片的ではあるものの、研究機関・大学機関、保健所や医療行政・施策分野で、多くの人が活動していることも伝わります。様々な知見を集散的に把握し研究し、政治や世の中に専門的立場から見解を示し、提言し、活動する“公衆衛生”という分野の存在もよく見えてきます。この分野も必要性の歴史の中で組み立てられて、医療の世界を深化させてきたということでしょう。

樹木医世界の展望

発展・深化は、樹木医の世界にも当てはまることがあると考えます。樹勢診断・回復、病虫害予防・回復など、個々の樹木・植物に対し具体的に診断、対処する作業は、樹木医技量の核として重要なところですが、これが脆弱であれば樹木医は成り立ちません。上記の「個々の病院で直面する患者の治療、回復」の場面に相当するのでしょうか。

この外に、歴史の展開として、“公衆衛生”に相当する分野があると私は考えるのです。樹木医学会などの活動はこれに入るのでしょう。しかし、この内容は「思うは易く」で、理念・思想的なことまでも含む広範囲であり、今の私自身、そのことの全貌を明解に展望しているわけではありません。

支部活動への連環、そして樹木医

10 年余前、私が北海道支部会員になった時の会員は 40 人弱、そして今や、60 人を上回るまでになりました。また、制度上も樹木医補制度が新設され、学制上も医学部・獣医学部の域に匹敵しないまでも広がったと思われる。次世代が増え、職能が確立していくことは喜ばしいことです。

支部会員名簿からは、地方公共団体、造園会社・コンサルタント在籍が多く、大学・学術機関に少し、そして、その在住は札幌及びその周辺が多いが道内各地に点在、さらに、組織的活動が可能な現役組あるいは組織・ラインとは関係しない立場もありです。相当の幅のある現状の身を束ねて活動しているのが支部活動とすることができます。例会や実地研修、会誌刊行などは、技量伝達や情報交流などに貢献していると思われます。

加えて、私は歴史の道筋として、公衆衛生のような分野にも間口を拓けてみたいと思うのです。とは言え、はるか遠大です。以下の事例で考えてみます。

2019 年頃、新聞記事にもなった A 市での並木樹伐採可否問題をご記憶の方がおられると思います。地元市役所及び住民と樹木医の間にあった出来事です。私は小さな記事以上のことはわかりません。関わった個々の樹木医の問題という見解もあります。

しかし、この推移は支部として、つまり多くの樹木医が行政との関わり、仕組みや樹木医業務の活かし方など検討・議論し、整理すべきであろうと私は思います。次代につながる課題やそれを基にした提言などを共有する機会と捉えます。

知見やデータをどのように解析し、現場に適応させるか、手順・手続きや判断思想に関し、行政を含めての一般社会に普及させるにはどうするかなど、もっと、多くの樹木医が理解して考えていくことが歴史を積むことと考えます。支部活動として、そのようなテーマがとりあげられ、議論が広がっていくのも一歩と思います。

周りが緑だらけの北海道の非都市部に住んでみると、「緑はあまり重要ではない」「ない方が金も人手もかからず楽だ」の発想を感じるがあります。世間の最前線はそうであったとしても、我々が関わる植物、樹木は、地球温暖化、脱炭素社会への対応を始め、環境循環要素としての樹木・森林などとして、“生きている公共財”の理念のもと、適切な管理を行うことは不可欠の時代に突入しました。

この大課題は、社会経済上の様々な角度・分野からアプローチしなくてはならない間口の広さと深さがありますが、このような中で、樹木医という専門性に対する社会的評価の向上や拡大は、この解決の、わずかであっても確かな一翼であると想っているのです。

全国育樹祭の成功を願って

高谷 俊和（19期）

1 はじめに

昨秋、新型コロナウイルス感染症対策により開催が延期されていた「第44回全国育樹祭」が令和3年10月に開催されると決定した。私は、さかのぼること14年前、平成19年に苫小牧市で開催された「第58回全国植樹祭」に携わった者として、成功を切に願わずにはられない。

それは、「全国植樹祭」と「全国育樹祭」は言わば密接不可分の関連行事であり、天皇・皇后両陛下がお手植えされ成長した木を皇太子・皇太子妃がお手入れをされてきたという伝統があるからである。

さらに、金田支部長が「樹木医ノートNo.3」でご報告されているように両陛下によるお手植え木は、支部の研修の一環として「林試移植方法の応用」を実施し昨年4月に育樹祭会場に移植されている。つまり今回の全国育樹祭には、樹木医会としても大きく関わっているのだ。

裏方として「第58回全国植樹祭」に関する沢山の思い出とともに当時のあれこれを綴ってみたい、はやり言葉で言えば「時を戻そう」というわけだ。

2 全国植樹祭って何？

全国植樹祭は、国土緑化運動の象徴行事として昭和25年の山梨県を皮切りに各都道府県持ち回りで開催されている。北海道では、昭和36年（第12回）千歳市・苫小牧市で開催されたのち、46年ぶりに平成19年（第58回）苫小牧市で開催し、大会式典では、天皇陛下の「お言葉」、天皇・皇后両陛下による「お手植え・お手まき」行事、道内外の参加者による記念植樹、国土緑化運動ポスターコンクール等の表彰行事、記念切手の発行、大会宣言が行われた。

ところで、札幌市に「^{ぎょうけいどおり}行啓通」があるが、これは大正天皇が皇太子の折にご来道されたことに由来している。皇后・皇太子・皇太子妃の外出を「^{ぎょうけい}行啓」というので、それにちなんで名付けられたもの。天皇陛下の外出を「^{ぎょうこう}行幸」、天皇・皇后両陛下の外出を「^{ぎょうこうけい}行幸啓」という。随行員は供奉者（ぐぶしゃ）といい、宮内庁長官・侍従長等・女官長等・侍医・宮内庁総務課長等・警察庁長官等・皇宮警察本部長等からなり、お見送りは、首相・宮内庁次長・警視總監が出席となっている。行幸啓の中では「全国植樹祭・国民体育大会・全国豊かな海づくり大会」を「三大行幸啓」というが、一次産業や国民の健康に皇室が重きを置いている証左となっている。

また、昭和52年の第28回全国植樹祭（和歌山県）から、秋に過去の全国植樹祭でお手植え・お手まきにより成長（古い自分は生長という表記で習ったが）した木の手入れ（枝払いなど）を行う「全国育樹祭」が開催されるようになった。北海道では、昭和62年（第11回）千歳市・苫小牧市・札幌市で開催されたのち、34年ぶりに令和3年（第44回）苫小牧市・札幌市で開催されるのです。

3 課せられた命題

皇室行事には、関係機関との連絡調整や手続きなどをはじめ開催までに様々な業務があるため、準備に時間と労力を要する。そのため、道庁水産林務部内に担当組織として「準備室」が設置され、その後「推進室」へと変遷し植樹祭に臨みます。

私は、この「推進室」が立ちあがった際に配属された。いわばタスクフォース（機動部隊）である。まったなしの渦中に入っていった。

はじめに申し上げたいのは、室員 20 名という要員では到底成し遂げることはできなかった。多くの皆様のご支援ご協力があってこそそのもの、この感謝の気持ちを忘れてはいけないと思っている。

さて、大きな課題の一つは、「予算をかけずに北海道らしさをどう演出するか」にあった。これまでの開催県の平均予算を大きく下回る予算不足をどう補ったらいいのか。例えば、県内出身の歌手に植樹祭のためだけの作曲まで依頼できた県もあったが、そんな予算的余裕があるはずもない。予算不足を補うため、また多くの方々の理解と賛同をいただくため、各方面からの協賛を募ることにした。

協賛は「資金」と「物品」の二本立てで進めたところ、想定を超える協賛をいただいたことに感謝している。例えば、大手の飲料メーカーから会場で使う飲料の無償提供の提案もあったが、直接的な宣伝は無理であることをご理解いただき、純粋な協賛については感謝しつつ受け入れた。

また、庁内各部や職員からタオルや文房具などの提供があった。これらは、例えば招待者が座るベンチや用具機材が濡れた時に拭いたりするのに役立った。何しろ、文房具もないのかと各部からファイルや様々な物品が届いて感謝した。大口の協賛企業に対しては「知事感謝状」を贈呈することにした。当然のことだが、企業にしてみると資金を出す以上、何らかの見返りがないと本社サイドの理解が得られない。なお、協賛金については、寄付金控除の対象となるよう手続きした。

もう一つの課題は、「失敗は許されないし、ありえない」ということ。細心の注意や用意に万全を期すために、ミーティングは特に緊密にしてダブルチェックや進捗の把握に努めた。行幸啓は全国植樹祭へのご臨席をメインにはしていたものの、ご日程は三泊四日、植樹祭前夜には歓迎レセプションと苫小牧市民による提灯奉迎、植樹祭終了後ただちに地方事情ご視察があり四日目に千歳空港お見送りとなっていた。

この間、万が一のことがあってはならない。過去には、不審車両の進入を皇宮警察の白バイが止めたということもあったようだ。何が起こるかかわからない、そして何を起こしてもいけない平穩無事が必須であった。

4 全国植樹祭の概要

- ・ 開催日：平成 19 年 6 月 24 日(日) ・ 主催：(社)国土緑化推進機構・北海道
- ・ 大会テーマ：「明日へ 未来へ 北の大地の森づくり」
- ・ メイン会場：北海道苫小牧市字静川(「つた森山林」隣接地)
- ・ 参加者：12,000 人(道外招待者 2,000 人、道内招待者 8,000 人、スタッフ 2,000 人)
- ・ 行事内容：記念式典(お野立所を中心とする式典会場で開催、約 3.5ha)
植樹活動(参加者が全員参加して実施、48 種、2 万本、約 4.8ha)

北海道知事を会長とする第 58 回全国植樹祭実行委員会を組織したほか、開催地の苫小牧市に設置された全国植樹祭推進委員会と連携・協力のもと実施。具体的には、実施本部を中心に、記念式典部、式典植樹部、植樹部、会場部、特別接伴部、輸送部など、13 部 29 班体制で運営。各班の要員は、各関係機関の職員 950 名で構成され、日常業務を抱えながら植樹祭業務を担当。また、関係者間の情報の共

有化と計画実施内容を検討、協議、決定するため、実施本部員会議及び式典専門部会等を設置・運営。総合運営及び輸送業務については、それぞれ民間企業をパートナーとして選考し、連携・調整。



天皇陛下のお言葉・記念式典会場での招待者の様子

5 今だから語れるが

今だから語れること、冷や汗ものの出来事が沢山あった、まさに薄氷の上を歩むが如しだった。

(1) 総合司会のこと

総合司会を誰にお願いするか、全国的に知名度があり好感度の高い人、そう札幌市出身のあの人、森田美由紀さんです。上司とNHK札幌放送局にお願いにあがった際、厚かましいことに我々にはお金がないことまで吐露した。当時のアナウンサー部長は「いいですよ、事情はわかりましたから。私どもの通常の出張で対応します」とおっしゃっていただき、なんと助けられたことか。

彼女には、前日の歓迎レセプションの司会も担ってもらった。JRで一人苦小牧駅に降り、ホテルでは控室も用意できず女性職員の更衣室で着替えをしてもらった。歓迎レセプションは約350名、両陛下とのご歓談やご拝謁の方々が殺到するので気苦労も相当なものだったと思う。

そして、今は「チョコちゃんに叱られる」のナレーションを聞かされた時に当時を思い出し感謝するばかりである。また、NHKでは全国植樹祭を1時間の特別番組で放映する、この伝統は今も続いている。だから受信料は払わなければいけないし、NHKから自国民を守る党には賛同できないのである。

余談になるが、新冠町のパカパカファームの牧場長はこの歓迎レセプションに招待された。英国人である同氏にとっては、エリザベス女王に謁見するようなもので喜びはひとしおだったという。加えて、植樹祭前のGIレース、NHKマイルカップ（ダービーなど4つしかない3歳馬のGIレース）

でこの牧場の生産馬が 18 頭立て 17 番人気で優勝するという快挙を果たした。まさに「走れ、走れ、コータロー！本命、穴馬かきわけて！」何と、3 連単 973 万円という超高額配当となった。そして、同氏はかなりの協賛金を出してくれた。ちなみに、このレースのファンファーレはNHK交響楽団の生演奏となっている。本当にNHKさんには色々な面でご迷惑をおかけし申し訳ないと思っている。

(2) 北海道らしさの演出のこと

浦臼町には子供達がドサンコ馬に乗り、森林の管理や巡視に一役買っている「森林愛護騎馬隊」がある。両陛下がご入場される際、この騎馬隊によりお迎えしてはどうか。また「カムイノミ」（アイヌ民族による神への祈り）を演出するのも北海道らしさではないか。

宮内庁に説明にあがった際のこと、「乾門」で事前に登録していた車両番号や乗車の氏名を一人一人照合確認という、厳重なチェックがあった。恐れていたことは、たとえ子供といえども馬上からの奉迎では御料車を見下ろすことになり、違和感があると言われかねない。宮内庁の職員は和やかに対応してくれた。馬上からの奉迎も、北海道は人馬一体となって開拓してきたのだから問題ないでしょうとの言葉に、ホッとした。また、「カムイノミ」には旅人の安全を祈るという意味もあり、北海道らしい演出であると認められた。

ドサンコ馬を現地の環境に慣らすため 2 週間くらい前から近くでリラックスさせよう、本番で馬が暴れたら大変なことになるから、と中央競馬でも有名なノーザンホースパークにお願いに行った。乗馬ズボンを履いた場長さんが対応され、ファームにおいてくれることになった。同時に場内にある宿舎、これは競走馬を売り買いする人のためにある施設だが、この利用も許可された。高額な競走馬を管理しているだけに宿舎も立派であった。対応に感謝を申し上げる。

さて当日、子供たちは馬上から頭を下げて奉迎し、両陛下は手を振って応えられた。一生の思い出になっただろう。後で馬を係留していた牧柵を確認したら、丸太をガリガリかじった痕跡があちこちにあった。ドサンコ馬もただならぬ気配を感じ、ストレスから丸太をかじったようだ。

(3) 経費縮減のこと

屋外でのイベントの場合、雨が降ってきたときの備えとして、記念品の中に雨具をセットする。しかし、晴れた場合には使われない、つまり、晴れたら無駄な費用となる。「矢切の渡し」ならぬ「値切りのわたし」としては、上司と相談し危険を冒した賭けに出るしかなかった。

一応、雨具を積んだ車両を会場近くに待機させるが、天候に問題なしとなった場合は輸送費だけ負担して帰ってもらう。雨具が必要となった場合は、可及的速やかにバスの添乗員が配布する。といっても、そんなこと現実にはできるのか、限られた時間では無理だ、大型バスで 300 台だぞ、危険すぎる、色んな意見があった。しかし、雨具が 200 円なら 1 万人で 200 万円をカットできるのだ。今だから言えるが、雨が降らず計画通りトラックを返して経費縮減となるか、雨が降り経費縮減にならないばかりか雨具の配布に手間取り混乱を来すか、まさに天候次第の紙一重だった。

また、特別招待者は両陛下とともに記念植樹をするのでスコップが必要かもしれないが、一般招待者にも必要だろうか、苗木を植えるのなら小さなシャベルで可能ではないか。もちろん、異論は噴出したが、100 円ショップで手配しよう、待てよ、製造元ならもっと安いのでは。結局、あちこち探して新潟県燕三条市から取り寄せることにした。100 円ショップなら 100 円で買うところを 80 円台まで圧

縮できたと思う。さらに、記念式典会場の大型ビジョンやテレビカメラの台数は最小限に抑えた。

このような積み重ねもあってか、誰もが不足を懸念していた中で、財政当局から認められた予算はかなり残して返納することができた。もっとも、こんなことなら何も危険を冒す必要はなかったのかもしれないが、当時はいかにコストを圧縮できるかしか考えられなかったのだ。

(4) 事前調査(と警備)のこと

行幸啓においては宮内庁の総務課長が「行幸啓主務官」として責任者となる。そのため、事前に現地調査が行われる。総務課長は警察庁からの出向者であるが、現地調査での緊張感は特別であった。

「わたしは、行幸啓主務官〇〇〇〇。只今から、全国植樹祭の開催にあたり現地調査を実施する」凛とした張りのある声だった。言われた瞬間、みんな固まった。決して威圧的ではなかったのに、何故か、立会者すべてが一時、動けなくなった。ようやく体が動くようになり「ここから車いすの方々のおられるところまで何メートルですか。両陛下と目線が合いますか。報道機関はどこで撮影されますか」など穏やかにやり取りが続いたが、現地変更が必要なほどの問題はないとされた。

また、大会会長の河野洋平衆議院議長(当時)の現地調査もあった。招待者が座るベンチを見て「何という木で作っているの?」と質問され「カラマツです。」というと、素晴らしい木だね、会場も良くできているねとねぎらわれた。同じ時刻に、道警さんが警備の訓練をしていた。「コリヤー!」とか「ワー、ヤー!」などと掛け声をかけ、犯人役を追いかけ捕まえる訓練だった。聞いたところ、声を出さないと体が硬くなって動けないのだと教えられた。プロ集団でもこうなのだから、我々が固まるわけだと妙に納得した。

道警さんとは何度も議論した。警備に万全を期すためには費用がかさむ、できるだけ費用を圧縮したい、そのせめぎ合いもあった。地方事情ご視察では沿道に面する家屋や住民の調査、警護体制などに多くの職員を動員しなければならない、大変だったと思う。こうした道警さんのご協力のおかげで無事終えることができたのだ、感謝しかない。当日の会場では、警備のため胸に「HP」とつけたジャンパーを着てもらったが、本部に「ホームページって何ですか?」と質問があった。北海道ポリスの意味だったが、他府県の人からは馴染みがなかったようだ。

(5) 国歌独唱のこと

国歌斉唱は合唱団、国歌独唱はオペラ歌手などが歌う場合が多い。地元ゆかりの深い関係から、紅白歌合戦にも出場経験のある苫小牧出身の民謡歌手、伊藤多喜雄さんに国家独唱とエピローグをお願いした。

後日談になるが、大分県の高齢の女性から電話が入った、いつものことだが、お叱りの電話だとばかり思っていたら逆だった。今まで聞いた国歌の中で一番良かった、素晴らしい歌声に感激した、長生きして良かった、という内容だった。確かに、民謡調の国歌独唱はその後も聞くことはないし、本当に素晴らしいものだった。

(6) 記念品の袋詰めのこと

1 万人分の記念品は、詰め込むだけでも大変な労力と根気が必要になるし、その量も膨大なものになるからスペースも必要になる。そこで、道立林業試験場をお願いすることにした。試験場の研修棟

には体育館のような施設があったからでもある。白衣を着た研究員が出てきて、自分の研究時間を割いて黙々と記念品の袋詰めをしてくれた。

また、両陛下お手植えの木に万が一のことがあった場合の控えの木やお手まきの種から発芽した苗木も試験場の圃場で管理してもらうことにした。育った苗木は全道各地にすでに配布されたが、林業試験場には色々な面で助けていただいた。

(7) 荒天会場のこと

全国植樹祭は、雨天決行、荒天以外はすべて屋外で行われる。しかし、荒天の場合は屋内での開催となるため、その備えも必要となる。荒天というぐらいだから、バックアップ用電源車の用意も必要だし、両陛下の座られる机には防弾設備や暖房装置の用意も必要となる。

積み上げていくと金額も相当額に上がる。開催日は、過去のデータを検証し「天候」の「特異日」、つまり雨の降る確率のもっとも低い日を設定しているとはいえ保証はない。幸いなことに当日は荒天にならなかったが、資金も労力もなかったから必要最小限の形式的な準備しかできなかった。

(8) 植樹祭終了後の仕事のこと

両陛下の地方事情ご視察も終わり、千歳空港から飛行機をお見送りした時の安堵感は忘れられない。しかし、その後も業務は続いた。記念誌の編纂、DVDの編集、全国関係機関・図書館等への発送、宮内庁への献上品の選定・制作依頼、協賛者へのお礼状の発送、議会への報告、後催県（秋田県）への引継、決算の確定作業などがあった。

中でも忘れられないのは、天皇陛下が全国植樹祭にご臨席された際の情景をお詠みになった和歌を御製（ぎょせい）というが、これを御製碑として建立しなければならないというものだった。プロポーザル方式により選ばれた栗沢町にある溝口石材工業は、歴史に裏打ちされた技術で一生懸命により仕事をしてくれた。銘石に「苔小枝の街近く 森を造らむと あかえぞまつの苗を植ゑたり」という天皇陛下の御製を刻してくれた。この銘石は日高産で、国歌にも出てくる「さざれ石」だということだから大変貴重なものだ。

5 おわりに（過ぎてしまえば）

途中には、幾度となく挫折しそうになったが、とにかく、貴重な経験をさせていただき、多くの方々に感謝している。

さて、これから全国育樹祭推進室もいよいよ佳境に入る。コロナ禍という環境の中でいかに安全・安心な開催とするのか、悩みも大きいだろう。しかも、皇太子・皇太子妃のご臨席ではなく、今は皇族殿下という表記しかできないが、これまでとはまったく異なるはじめての行事となる。

さらには、お手植え木を移植するというのは過去にもほとんど例がないことだろうから、この行事の成否に果たす樹木医会の役割は大きい。

これから昼夜を問わず様々な業務と戦う推進室をはじめとした関係者の皆さんに、エールを送りたい。そして、心から成功することを願ってやまない。

橋場一行さんを偲んで

副支部長 阿部正太郎 (12期)

私達の大先輩であり、長きにわたって事務局と支部長を務められ、支部を支え、発展に尽くされた橋場一行(第3期生)さんが令和2年11月6日に84歳でお亡くなりになりました。

私が橋場さんに最初にお会いしたのは、平成13年に道を退職して(財)北海道森林保全協会(以下協会)に勤めた時でした。林業試験場退職後、協会の研究室で樹木医の仕事の傍ら支部事務局の仕事をしておりました。平成7年から平成16年迄は事務局として、その後平成17年~23年迄、支部長をされましたが平成21年には支部長と事務局を兼務されており、大変忙しかったと思います。

平成22年から2年間、私が名乗りを挙げて、橋場さんの下で事務局をやらせて頂きましたが、その時の経験がその後4年間事務局をやった時に役に立ったと思っています。

橋場さんは熱心な人でした。林業試験場におられた時は江別市から美唄市まで長時間通勤でしたが、いつも一番早く出勤し、一番遅く帰るので周りの人が帰りづらかったという逸話があります。この熱心さが支部事務局と支部長の仕事に引き継がれたと思っています。

私が橋場さんに初めてにお会いした平成13年頃は、樹木診断をする所があまりなくて殆どが協会で行っており、経験の浅い私は橋場さんに手伝って頂き、一緒に調査することが多かったのですが、“木は生き物だから”といつも言っており、診断する姿は「木と会話」しているようでした。傍にいて樹木医として大切なものを学んだと思っています。

木の状態をよく知り、どうしてそのような状態になっているのか、その原因を知ることが樹木診断であり、樹木医の原点であり、その為には、木の生理生態、病気、キノコ、害虫、土壌、木槌打診等の知識や技術、特に経験が必要なのを身に染みて感じたのもこの頃です。

橋場さんは曲がった事の嫌いな一途で礼儀正しい人で、このようなことから日本樹木医会本部の倫理委員をされていたのだと思います。一方、よく冗談を言う楽しい人でしたが冗談を言っているのかと思うと、実は本気で怒っていることがあり、面くらいました。思い当たる人もいます。

他にも講演会の講師、緑化団体の評議員、森林認証の仕事など幅広く活躍され、網走や帯広によく行っておられました。一緒に食事することも多かったのですが、どちらかと言えば小食でお酒は付き合いで嗜む程度、どこにあのようなパワーがあるのかいつも不思議に思っていました。

真田さんと一緒にお参りさせてもらった時に、仏壇の前に一枚の写真が飾られていました。“どうした、元気かい”という感じで木を見上げているどこか楽しそうな表情の橋場さんの写真です。

息子さんは「これが父の自然の顔です。普段自分と向き合っている父はこんな顔をしていません。好きな木を相手に過ごせて本望だったと思います。安らかな死に顔でした。支部の皆様への感謝の言葉を最後まで口にしました」と言っていました。

「樹守30号記念号」が出来たら、仏壇の前に置かせてもらおうと思っています。“ほめ過ぎだよ、困るな”と言われそうな気がします。心からご冥福をお祈り申し上げます。 合掌



帯広の森で講師を務める橋場さん(日月さん提供)

五稜郭のサクラ

山上 勝治（5期）

毎年春になると、桜の便りが津軽海峡を越えてやってきます。北海道での桜前線は、道南の松前、函館から始まり道央、道北のチシマザクラ、オオヤマザクラが開花しゴールを迎えます。桜で有名な松前公園、五稜郭公園の桜は、いずれも江戸時代に造られた城郭に植えられた桜です。松前公園では250種1万本を超える品種の桜が生育しています。色、形ともに変化に富み開花期間も1ヶ月と長く楽しめるのが特徴です。五稜郭公園の桜は約1,600本あり、ほとんどがソメイヨシノです。一斉に咲き満開となり一週間ほどで散ってしまいます。外堀の水面に浮かぶ花びらを見て、かつてこの地で土方歳三をはじめとする多くの侍が戦い散っていったことを思うと格別な想いがします。

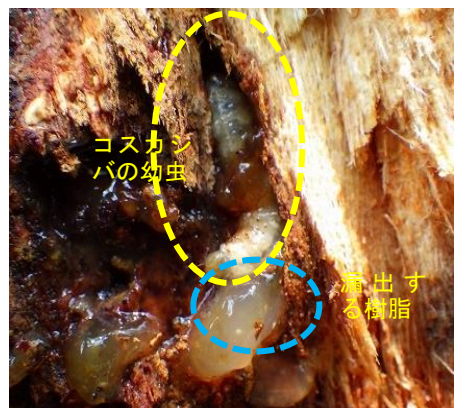
1864年(元治元年)に五稜郭の築造は竣工しました。今から157年前、幕末の時代です。竣工の2年後江戸幕府が崩壊します。箱館奉行所(1864年竣工～1871年解体、2010年復元)竣工時に周辺に庭木や防風林としてアカマツが植えられました。現在90本弱のアカマツが奉行所周辺に生育しています。樹高20mを超える老齢巨樹となったアカマツは適切な点検・維持管理の元で生育良好、見事な景観を呈しています。復元された奉行所と共にインバウンド観光の目玉となり、サクラ同様に貴重な観光資源となっています。これからはマツノマダラカミキリが津軽海峡を越えて来た際の備えも講じておく必要があります。サクラが植えられたのはアカマツが植えられてから約50年後(1914年～1965年の間に11,300本植栽)、公園として一般開放されてからです。



観光の目玉である復元された奉行所と背景のアカマツ(樹齢155年)

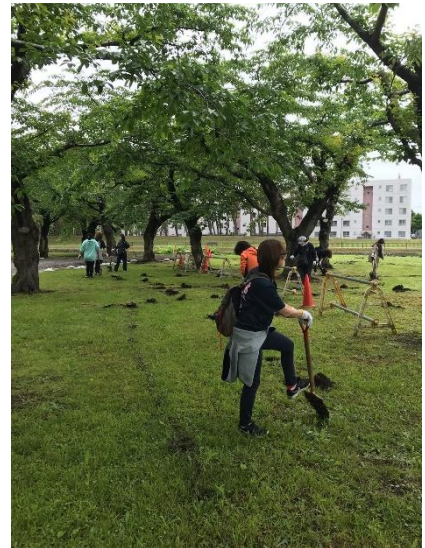
函館奉行所を外国から警備防衛する目的で造られた城郭が五稜郭です。築造時この土地はネコヤナギが群生する湿地だったそうです。ぬかるんだ土地を人力主体で行う大工事だったと推察します。堀の掘削、石垣積、土塁の盛土など土と石で強固に固めて作られました。決して植栽に適した土地ではなかったはずですが、長期にわたり樹木の生育を良好に保ってきたのは、堀の掘削による敷地の水抜効果と堀上げられ風化した肥沃な土壌が良好な生育環境を生んだからだと推察します。

サクラの周りの環境や人の流れも近年整備され、ずいぶん変わりました。子供の頃の記憶では、郭内(堀の内側)の一部の平坦部以外はイタドリ等の背の高い雑草がうっそうと生い茂っていた印象が残っています。花見は郭内でも盛んに行われ、団体の花見では紅白の幕が張られ飲みや踊れの宴会がされていた記憶があります。この頃の函館の花見では今のような焼肉の煙は上がりませんでした。現在の奉行所の前には中島のある石組み護岸の池や茶店があり、夏にはラムネなどを飲んだ記憶があります。他には運動会や林間学校等の行事が行われ、博物館の前には函館戦争の当時の大砲がおかれていました。今のように国内外の観光客で賑わい、建物や樹木、芝生が整備された公園になるとは想像できませんでした。



コスカシバの幼虫と漏出する樹脂

2020年5月、新型コロナの影響で市内の公園での花見や宴会の自粛が呼びかけられている頃、五稜郭公園の桜も満開を迎えました。市民は勿論、観光客の入場も規制されました。そんな中、6月に市民ボランティアによる五稜郭公園‘サクラの木お礼肥プロジェクト’が函館市住宅都市施設公社主催により開催されました。過去に数多くの管理者、専門家、業者、ボランティア、個人が五稜郭公園の桜に関わってきました。桜へのアプローチも数多くあり、その時々効果的で有意義なものであったと思います。この度の‘サクラの木お礼肥プロジェクト’は今までにないほど大規模な市民による画期的な事業であったと思います。点が線、面となって今後も繋がってゆく事を望みます。何より市民の目が桜に向けられ関心を持ってもらう事が大事であると考えます。9月には、函館市の要請を受けて、日本花の会特任研究員の和田博幸さん（樹木医10期）が来函し、五稜郭公園はじめ市内の桜鑑賞公園を視察され貴重なアドバイスをいただきました。



お礼肥えプロジェクト、市民の手による施肥作業



日本花の会 和田さん視察

10月、老桜のウロから煙が上がる事件が起きました。今年で何度目かのボヤ騒ぎだそうですが、これも悲しい事実として受け止めなくてはなりません。今後このような悲しい出来事は市民の関心が桜に多く向けられる事で減らせるのかもしれませんが。

ソメイヨシノは日本全国に植えられ、日本人に最も親しまれ、好まれている桜です。五稜郭公園もソメイヨシノ主体の桜の名所です。昨今ソメイヨシノを取り巻く環境が大きく変わろうとしています。それは、ソメイヨシノ特有の‘てんぐ巣病’の伝染拡大が問題となり苗木の販売や新規の植樹を控える傾向にあるためです。日本花の会では平成21年から販売を中止しています。代替え品種としてジンダイアケボノを推奨しています。今後、新たにソメイヨシノによる桜の名所が生

まれてこない事が懸念されます。現在、日本国内のソメイヨシノ主体の桜の名所は、植栽後40～50年以上経過しているものが多く、すでに高齢化しているものも多くあります。各地に生育するソメイヨシノをいかに長く守り育てるか樹木医にも大きくかかわって参ります。

人里に持ち込まれた桜は、人の目が行き届かなくなると生育が悪くなり育ちません。本来、生育旺盛、再生能力の高い樹木ではありますが、放置(無視)状態が長く続けば枯れてしまう事さえあります。眺めて、手をかけ、育てれば大きく育つのが桜です。良くも悪くも手をかければ答えてくれるのが桜です。桜を扱う現場では、この桜の‘生きる力’にしばしば救われています。これからも桜に触れ、声を聴き、伝え、皆様と共有して行けるよう精進したいと思います。



タバコの火によるボヤ！

森のシンボルツリー・サクラの樹勢回復

豊田 栄（11期）

2016（平成28）年4月、生活クラブ生活協同組合（以下「生活クラブ生協」と呼ぶ）の森づくりプロジェクトから連絡があった。「毎春見事な花をつけていた森のシンボルツリーであるサクラの状態がここ3～4年前から花付きが悪くなってきたので診て欲しい」とのことである。5月に現地のサクラを視察後先方に状況を報告し、同年6月から2019（令和元）年まで4年間樹勢回復業務を行なったのでこのことについて述べる。このプロジェクトは「海を育む森づくり」を目指し、牛乳パック回収売却金を原資として古平町の海を臨む牧場跡地に苗木を植え育て、これまで20年近くにわたって計画的に森林づくりを行ってきた。注1)

1 森のシンボル・古木のサクラの現状

樹種はエゾヤマザクラ（オオヤマザクラ）で双幹、形状寸法は樹高：13m、枝張り（平均）：7m、胸高幹周（片方の幹）：160cm（直径51cm）×2本（2本ほぼ同じ）であった。

計画的な植林と手入れによりつくられてきた牧場跡地の若い森林の中にあつて、既存の樹齢を重ねた古木のサクラはよく目立ち、森のシンボルツリーにふさわしい存在感のあるサクラであった。

状態としては、上枝先端の枯れや大枝折損箇所、材質腐朽、幹・大枝の胴枯れ症状（樹皮の壊死）等の被害がかなり多く、双幹の片方の幹根元にも根株心材腐朽による空洞（不定根が発生）と胴枯れ症状がみられ、また太根も地表面に露出し剥皮損傷していた。枝葉は樹冠の中～上部にかけてやや疎で葉の大きさも全体的に小型で特に樹冠上部の葉は小さい等、樹勢はかなり衰退していた。

2 樹勢回復の考え方

樹勢回復は処置完了後も生育状況を注意深く観察しながら状況に合わせて適切に対処・維持していく継続的な管理が必要で長い時間がかかる。このサクラの樹勢回復における継続的な管理は、森林づくりを行ってきた所有者の生活クラブ生協の森づくりプロジェクトがその役割を担うことになる。

サクラの樹勢回復費用は資金に限りがあることから、一定期間内にそれなりの成果を出して森づくりプロジェクトへ引き渡す必要があった。樹勢回復はサクラの衰退状況、現地の気候やシルト・粘性土・硬質砂岩等が混在する土壌等の条件、かかる作業費用等を勘案しながら以下の処置策を講じた。

- ① 幹・枝・露出根の処置：枯枝及び材質腐朽被害が大きく折損危険の高い枝の除去、スタブカット箇所の切り戻し整理、地表露出太根の損傷箇所等の切削整形と殺菌癒合促進剤の塗布。
- ② 不定根の育成：不定根が発生している幹根元の腐朽空洞内部に、ピートモス：炭の混合改良材を充填、黒色ポリエチレンフィルム及び幹巻テープで養生。
- ③ 土壌改良：根量を増加し樹木の活力を高めることを目的に行う土壌改良にはいろいろな方法があるが、ここでは検討した結果堅穴式土壌改良工法を取り入れることにした。

方法はアースオーガーとダブルスコップで直径15～20cm×深さ60cm程度の穴を掘り、割竹を挿入する箇所注2)と挿入しない箇所の2通りを樹冠内外に数十か所設置する。割竹挿入箇所は径5～6cm×長さ60cmの2つ割り節抜き晒竹を掘削箇所に建て込み、竹の周囲には熟成堆肥：炭：

現地土の混合材を充填。一方割竹を挿入しない箇所には割竹の代わりに黒曜石パーライトを施用、周囲には同様に熟成堆肥・炭・現地土の混合材を充填。

- ④ この他：緩効性肥料2種類（粒状・固形、年1回）と発根促進剤等の施用、真夏の乾燥時期の適宜散水、年2～3回の草刈等。

3 作業状況の確認とサクラの定期観察

樹勢回復業務後の継続的な維持管理を進めて行く上で、管理する側が樹勢回復の手法や作業の状況を知っておくことは大事である。生活クラブ生協の森づくりプロジェクトは、毎月森林の手入れを行っているので、手入れの際にはいつでも自由に作業の状況を見てもらうとともに、定期的にサクラの元へ集まり、衰弱したサクラの回復状況の確認と意見交換を行いながら、維持管理の進め方について理解を深めてもらうことにした。作業開始2年目からは着花数もやや多く見られるようになり、定期的な観察を重ねるうちに森づくりプロジェクトからも「良くなってきた」という言葉が出てくるなど、少しずつではあるが、サクラの樹勢回復の兆しを感じ取ってもらうことができた。



樹勢回復2年目のサクラの開花状況（2017.5.1）

4. 引き渡しとサクラの今後

4年間の樹勢回復業務を終え、5年目の2020（令和2）年は引き渡しの年であった。今後の育成管理のポイントを箇条書きにした簡単な作業要領を作成し、サクラの管理に必要な除草・草刈、施肥について現場で一緒に作業を行い、やり方を身につけてもらった。回復業務の4年間で着花量や葉量の増加など全体的には相応の樹勢回復成果を出すことができたが、それでもまだ上枝の枝葉の一部にやや回復が遅れ気味のものがあり、胴枯れ症状・腐朽患部の巻込み状況とあわせて、この先もしっかり見守っていく必要がある。

私も仕事の手が離れたとはいえ時々サクラの状況観察に現地を訪れようと考えている。

注1）生活クラブ生協は古平町に植林用の土地（約5haの牧場跡地）を取得し、古平町の人たちとともに森をつくりたいという思いを込めてこの土地を「フィービラの森」と名付けた。これまで生態学的混播法による植林の他に3000本以上の苗木を植栽し、育成管理を行ってきた。牧草主体の見晴らしの良かった牧場跡地に古木のサクラが生育していたようである。

2）堅穴式土壌改良工法の割竹挿入法は堀大才氏が考案したもので、本州ではモウソウチクの利用が多いようである。ただ北海道ではモウソウチクの価格が高く晒竹の方が安く入手できる。使用方法としては竹を割らずに竹筒に多数の穴をあけて通気管として使っている場合もある。根の伸び具合は樹種や土壌条件等によっても異なる。このサクラの樹勢回復における土壌改良は、4年間の回復業務の中で3年間だけ行った。

桜の樹勢回復に終始した活動

金田 正弘 (11 期)

2001 年樹木医に認定され、20 年が経過しました。当初は、造園会社勤務のため専門の樹木医活動が思うようにできませんでした。これを払拭するべく、2004 年自営会社を設立し、新たな船出を決意しました。そのきっかけは、現在福島県で活動中の志鎌樹木医とのふとしたやりとりからでした。志鎌氏が札幌の造園会社勤務の時、持参してきた数枚の桜の画像がそれです。小樽宏楽園のソメイヨシノの現況を伝えるもので、とても印象深く、興味があった画像でした。当時サラリーマンの私は、樹木の治療をする機会が少なく、手詰まりの状態でした。ソメイヨシノを中心に 100 本程のサクラ類のある宏楽園が、樹木医活動の原点になるなど思いもよらない事でした。自営活動のきっかけになった、不思議な因果を感じています。

1. 樹勢回復処置に対する考え方の違い



幹がワイヤーで絞められたソメイヨシノ (2004. 4. 30)

宏楽園の桜は、長年札幌の樹医（仮称）という方が手入れを実施していたようです。枝が極端に無い異様な樹姿（物干し竿様）を呈していました。穴や空洞は、全てモルタルが充填され、中に鉄筋を組んでいる処置もありました。又、地際周辺は、締め固まりグラウンドのような状態でした。さらに、景観上の処置なのか五色砂利が厚く敷均され、どれも驚きの連続でした。2004 年に桜の手入れをすることになりましたが、これらの作業に従事していた管理人がいて、治療方法に関して多くの軋轢が生じました。この対応に時間を要し、かなりのストレスを感じました。この思いは、その後別の桜の名所樹勢回復に当たり、技術的な苦勞より、対人関係が大きい悩みになりました。場数を踏んだ今、「責任は私がとります。言う通りにして下さい」と伝え、一緒に作業をしています。

2. 手がけた桜は、結果を出す



宏楽園ソメイヨシノ桜並木の開花 (2014. 5. 7)

宏楽園の樹木医による治療は、当時あまり馴染みのある作業ではないようでした。その存在価値を知ってもらう上でも手がけた樹木は、必ず良い結果を出さねばなりません。外科的処置、根系土壌改良、樹冠部の縮伐、新たな桜苗木の植栽、桜の移植等、粘り強く丁寧な作業を心掛けました。樹勢回復の結果が出ると、良い評価につながります。そしてマスコミ等に取り上げられ評判になりやがて、他の目に止まり仕事の幅が広がっていきました。

3. 自営6年目で軌道に乗る

専業樹木医を目指した新たな船出でしたが、当初2年間の活動及び生活は、大変厳しいものでした。確立した技術、人とのつながり、機動力、資金力どれをとっても不安定でした。

6年間地道に取り組んだサクラ類の処置、観察、記録の成果が見え、ようやく軌道に乗った感じがありました。この間理解を示してくれた宏楽園のオーナーには、感謝の言葉しかありません。転期が訪れたのは、2010年浦河町桜並木の調査依頼があつてからです。委託事業は、5年継続して実施する予定でした。2箇所の樹勢回復処置を実施する事になり、専業樹木医としてレベルアップにつながつたと思っています。



浦河町西舎の桜並木 (2020. 5. 7)



うらかわオバケ桜 (2020. 5. 7)

4. 管理作業内容の多様化

(イ) 開花時期の異なるサクラ類

サクラ類の開花（花見）は、春5月に2週間程の関心度で花が散つた後、忘れ去られてしまいます。野生種も、あっという間に葉桜になってしまいます。そこで、サトザクラの早咲き、中咲き、遅咲き種類を組み合わせ、観桜時期を長く（6月にも咲く品種を導入）することを考えました。又、二季咲きの桜（秋に咲くアーコレード・十月桜・冬桜等）を導入し物珍しさを狙いました。冬期間（1月～3月）は、予め用意した鉢植えのサクラを室内に入れて咲かせました。又、各種の剪定切枝も促成で咲かせることも試みました。これらは、今も続けています。

(ロ) 宏楽園内に草花やバラ、アジサイ等を植える

宏楽園は、温泉宿であり年中花を咲かせたい希望がありました。そこで新たに、バラ園、ボタン園、アジサイ園、花壇、宿根草、野草、ロックガーデン等の造成に挑戦しました（宿の火事で一部消失）。これらは、見様見まねでなく、その道の専門家の指導を受け、本格的に取り組みました。花壇の造成は、兵庫県に異動した涌島樹木医に指導してもらいました。一年草と宿根草の組み合わせは、配色、草丈、開花時期の違いや花苗の市場性も考慮した上で作る、奥深さを感じました。又、植え方、トリミング、施肥、除草、水やり等管理も大変な事が解りました。

バラは、春の花が咲き終わる6月頃から咲き始め、秋遅くまで咲き続けます。小樽の豊田樹木医に相談し、配置、苗の選定、植えつけ方法等含め、バラ育成のプロに指導をお願いしました。出入口の中程ロータリー緑地（目立つ場所）にバラ園を新設しました。バラは、四季咲き種、そしてツル性のバラ両方を導入し、枝を這わせるアーチも設置しました。



チューリップの春花壇 (2011. 5)



夏花壇 (2014. 7)



バラ園の開花 (2014. 7)

バラの育成は、サクラ類より手が掛ることが解りました。植えつけ時の基盤作り（土壌改良）、毎年行う剪定は、本格的に取り組む必要があります。又、病虫害の発生が目立ち、防除作業が欠かせません。現在も豊田氏の指導で株の植替え等実施しています。以下、宏楽園バラの主要な病虫害の発生情報です。

<発生する病害>

バラ根頭がんしゅ病

地際部や根に大小さまざまなコブが発生する。生育不良になり枯死することもある。

コブの切削り整形後、保護剤（トップジンMペースト）を塗布。残渣の処分。

周りの土を入れ替えてくん炭の施用、使った刃物のアルコール消毒（細菌性の病害）。

バラ黒星病

葉に黒点を生じ周りが黄色くなる。さわっただけですぐ落ちやすい（早期落葉）。

毎年しつこく発生。地面に落ちた葉の清掃。施肥。

トップジンM水和剤の散布。

バラうどんこ病

葉と新梢が白く粉状になる。品種によってかかりやすいバラがある。

暑くなる時期に発生するようで。適度に散水する。施肥。

<発生する虫害>

アブラムシ類

バラの新梢に大量に発生する事がある。小さいアブラムシは、気がつかない場合が多く、見つけてあわてる。新梢発生部の切除、捕殺で対応する。オルトラン粒剤を散布したが、匂いがきつく使用をやめる。

ボタン、アジサイ類の苗木は、園芸店、ホームセンターの残り物をまとめて買い植えつけました。何本で何種類か忘れてしまいました。ボタン、アジサイは、品種がとても多くあることが解りました。野草類は、9cmポット苗を購入し池、小川沿いに育てました。



野草の開花 (2014. 8)

5. 專業樹木医の行く末

私は、3月で74歳になります。この先いつまで樹木調査、診断、治療の仕事ができるのでしょうか。先の10年間（2001年～2010年）は、無我夢中の時期、次の10年間（2011年～2020年）が軌道に乗り、経過の観察に基づく樹勢回復効果を判別できた時期でした。この先の10年間（2021年～2030年？）は、未知の時期になりそうです。



多摩森林科学園の桜観察(2006. 4. 17)



新宿御苑の桜 (2006. 4. 17)



八重紅枝垂れ並木（兵庫県）



かみごうり さくら園 (2006. 4. 16)
神代曙、思川他 10 種 1200 本の桜造成地 (TM氏指導 上郡町)



上の画像は、15年前に訪問した桜観察の懐かしい画像です。この後も姫路、神戸、室戸、京都、大阪周辺の桜植栽地、名所等の観察を数年間実施しました。案内してくれたのは、同期の兵庫県の鶴田誠樹木医（11期）でした。この間鶴田氏も何度か来道してもらい、松前、森、長万部、八雲、伊達、室蘭、登別、苫小牧、日高各町、小樽、別海町、北見、網走、釧路、音別、帯広、由仁等精力的に桜を探し回りました。

今は、お互いに行き来できなくなり休止の状態ですが、いつの日か年月が経過したサクラ類の状況を、もう1度観察したいと思っています。鶴田氏も同じ気持ちでいる事でしょう。桜の名所をただ見るだけでなく、苗木を植えて育成し、新しく名所作る様子を観察できた事は、貴重な経験として私の樹勢回復処置、苗木の植栽方法、土壌改良資材の選別、サクラ類品種の知識等に活かされています。

桜は、典型的な陽樹で寿命が短い樹種と言われています。病虫獣害、気象害に弱く、それらの扱いは、特に気を使わなければならないと思っています。寒地に育つ桜の養成管理に、今後も長く関わりを持ちたい。体力、体調を維持しながら、頑張りたいと思っています。

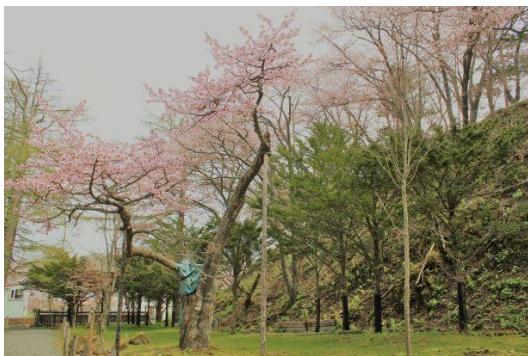
厚岸町子野日公園のサクラ保護育成

百海 琢司（9期）

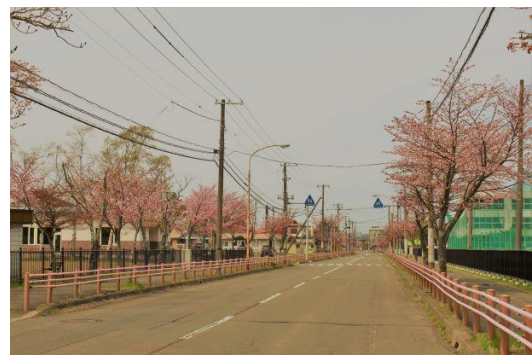
私は平成 31 年 4 月から厚岸町地域おこし協力隊員として、厚岸町の子野日公園を活動拠点としてサクラの保護育成等の活動に取り組んでいます。活動を始めてまだ 2 年目ですが、厚岸町のサクラの現況と日頃の活動内容について簡単に報告させていただきます。

1 厚岸町のサクラ

厚岸町には、樹齢 200 年近い町指定天然記念物の国泰寺老翁樹（オオヤマザクラ）をはじめ、街路樹や庭木として町内のあちらこちらサクラが植栽されています。しかし、近年高齢化とともに樹勢がよくないサクラが目立っています。



国泰寺老翁樹 2020. 5



街路樹（桜通り）のサクラ 2020. 5

国泰寺老翁樹は、北海道立林業試験場の協力で平成 16 年組織培養技術によりクローン苗の育成が開始され、平成 20 年に子野日公園内に植えられて、現在樹高 600 cm、枝張 450 cm、幹周 43 cm までに成長しています。老翁樹の現状を見る限り、このクローン樹を本来の国泰寺に植えて、老翁樹 2 世として育てていくことが必要ではないかと思えます。



老翁樹クローン（開花期 2020. 5）

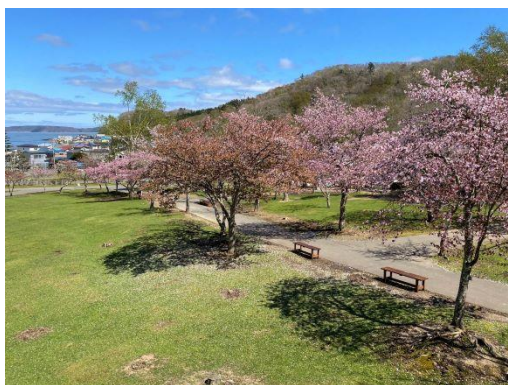


老翁樹クローン（落葉期 2021. 2）

2 子野日公園のサクラ

子野日公園は、昭和 37 年に元町長の子野日氏所有の庭園（翠湖園）が町に寄贈され、その敷地をもとに整備された町営の公園で、オオヤマザクラを中心に現在 30 品種、約 1200 本のサクラが植栽されており、5 月の「あつけし桜・牡蠣まつり」の会場として町内外の多くの人に親しまれています。中でも、八重桜品種のフゲンゾウ（普賢象）は、本来この地方では6月上旬から中旬に咲く遅咲きの品種ですが、冬期間ブルーシートで覆って保温して祭りが開催される5月中旬に満開となるように開花調整しており一見の価値があります。また、厚岸町で育成されたネノヒヒガン（子野日彼岸）などの珍しい品種も観ることができます。

公園内のサクラは植栽されてから数十年が経過していることと、祭りの会場として年2回多くの人が訪れることによる踏圧などにより樹勢が落ちているものが多くみられます。過去には、外科的治療も行われていたようですが、近年は衰退が激しい樹木は伐採されてきたようです。今後、樹勢を回復させる処置と合わせて、後継樹に植え替えていく必要があります。



子野日公園全景 2020.5



フゲンゾウ



ネノヒヒガン



スマウラフゲンゾウ

子野日公園のサクラ品種一覧

オオヤマヤマザクラ	オオヤマヒトエヤエ	ソメイヨシノ	ネノヒヒガン
チシマザクラ	クシロヤエ	イトクリ	マイヒメ
オオシマザクラ	ナデン	コウカ	アーコレード
ミヤマザクラ	チシマナデン	アラシヤマ	シダレザクラ
カスミザクラ	ベニユタカ	タイサンフクン	ベニシダレ
シウリザクラ	カンザン	フゲンゾウ	セイヨウミザクラ
エゾノウワミズザクラ	アマヤドリ	スマウラフゲンゾウ	
オクチョウジザクラ	コイト	ギョイコウ	

3 サクラ保護育成活動

(1) サクラの後継樹育成

サクラの後継樹や品種育成のため、令和元年の7月に公園内のオオヤマザクラ、チシマザクラ、オオシマザクラ等と別寒辺牛湿原のエゾノウワミズザクラから種子を採取して、苗畑ハウス内の土中に埋藏しました。翌令和2年3月に土中から種子を掘り出して、赤玉土とバーミキュライトの混合土を入れた育苗箱に播きました。種子は2週間ほどで発芽し、8月末までにそれぞれ最大樹高に成長しました。発芽率は、チシマザクラが90.4%と最も高く、次いでクシロヤエ85.70%、オオシマザクラ75.0%、オオヤマザクラ66.0%、低いものはミヤマザクラ10.7%とエゾノウワミズザクラ31.3%でした。伸長量では、オオシマザクラが最も大きく70cm、続いてクシロヤエ49cm、オオヤマザクラ41cm、伸長量が小さかったのはミヤマザクラ11cm、チシマザクラ11.5cm、エゾノウワミズザクラ14.5cmでした。種子サイズの大きいものほど、1年目の伸長量は大きくなる傾向が見られました。

これらの苗は、接ぎ木台木や品種育成などに使用していきます。令和2年7月から8月には桜見本園にある様々な品種のサクラから種子を2000粒以上採取しており、令和3年3月に播種を行い育苗する予定です。



採取したチシマザクラの種子



チシマザクラ 2020.5



オオヤマザクラ 2020.8

サクラ各種の発芽率・伸長量

種名/品種名	播種数(n)	発芽数(n)	発芽率(%)	伸長量(cm)
オオヤマザクラ	47	31	66.0	41.0
チシマザクラ	52	47	90.4	11.5
エゾノウワミズザクラ	96	30	31.3	14.5
ミヤマザクラ	28	3	10.7	11.0
オオシマザクラ	8	6	75.0	70.0
クシロヤエ	14	12	85.7	49.0
ベニユタカ	13	6	46.2	31.0

(2) 病害・獣害の防除

子野日公園のサクラに多く見られる病害にはこぶ病、てんぐす病があります。こぶ病は落葉期に発見しやすいので、冬季に罹病枝を高枝伐り鋸で除去しています。こぶ病に罹患している樹木が公園全体に分布していて見つけたときに伐り取るようにしていますが、山の斜面に立地するサクラまでは完全に除去できていない状況です。罹患しているサクラは、オオヤマザクラとクシロヤエが多いようで

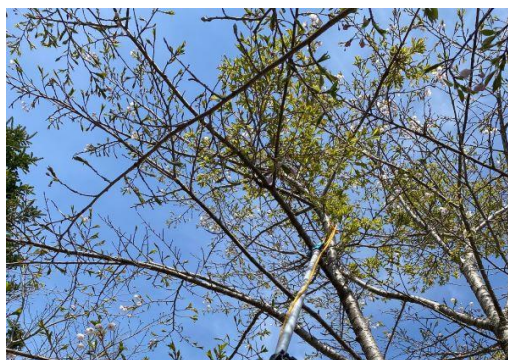
す。てんぐす病罹病枝は、ソメイヨシノやオオヤマザクラに見られ開花期に花を付けず通常より小型の葉が展開するので、この時期に見つけて切除しています。また、公園付近の山林にはエゾシカの生息数が多く、サクラ小径木の樹皮が角研ぎや食害などの被害を受けることがあるので、樹脂ネットを巻き付けて防いでいます。



サクラこぶ病罹病枝（オオヤマザクラ）



サクラこぶ病罹患部



サクラてんぐす病罹病枝（ソメイヨシノ）



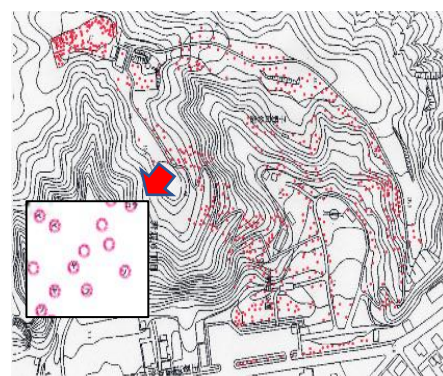
シカ角研ぎ被害（オオヤマザクラ）

(3) サクラマップ・管理台帳作成

公園内のサクラについて、植栽位置、樹種、樹木寸法、樹勢などの管理記録がないことから、植栽されているサクラの位置と樹種・品種を記したマップをCADソフトで作成し、その中から重点的に観察が必要だと思われるサクラを選定して、季節ごとの写真撮影と目視による樹勢を記録して管理していくことにしました。

4 サクラに関するその他の活動

厚岸町の友好姉妹都市である山形県村山市から年始に切り花用に贈られてきたケイオウザクラ（啓翁桜）の枝を開花させた後、令和3年2月に枝を切り分けて挿し木をしました。挿し木苗は子野日公園の苗畑で育て公園内に植栽するとともに、町民に配布して交流に役立てたいと思います。



サクラマップ



ケイオウザクラ（啓翁桜）2021. 1



ケイオウザクラ挿し木 2021. 2

5 今後の課題

(1) 既存樹木の樹勢回復、後継樹による更新、品種育成など

毎年、多くの来場者の踏圧によって固結・裸地化した表土の土壤改良やマルチング、施肥などによって既存のサクラの樹勢を回復させるのと合わせて、回復が見込めず倒木の危険があるサクラは計画的に後継樹へ更新していく必要があります。

今後、厚岸の名をつけた新たな品種ができるように、播種して育てた苗から選抜して育種にも取り組んでいきたいと考えています。

(2) サクラ保護育成活動のための組織づくり

厚岸町には昭和 34 年に結成された「厚岸桜の木保存会」という桜保護育成団体（会員数：16 名）があります。これまで、子野日公園をはじめ道の駅や町役場周辺など町内のサクラ植樹活動や保護育成活動を実施してきましたが、会員の高齢化が進み活動が少なくなっています。町内のサクラを次世代に引き継ぐために、若い人たちに参加してもらえるような組織づくりに取り組まなければなりません。



パーク堆肥によるマルチング 2020. 12



厚岸桜の木保存会による植樹 2019. 5

新人樹木医活動記

白鳥 桂子 (29 期)

この1年は新人樹木医として、樹木に関する様々な仕事や相談を受けました。一番多かったのは、サクラに関することです。札幌市内のサクラ、特にエゾヤマザクラで胴枯病、こぶ病及びpunkタータ(旧和名:チャアナタケモドキ)が発生している樹木が多く見受けられ、どうしたら良いかという相談を受けました。サクラが生育に適する条件は、①日当たりが良いこと、②水はけが良いこと及び③土壌条件が良いことが挙げられます。サクラは陽樹ですが、公園等に植栽された樹木の植生遷移が進み、他の樹木に被圧されてサクラが日陰になってしまうケースが多くなっています。また、地球温暖化の影響で北海道の夏の気候は本州同様高温多湿となっていることも病害虫の発生要因の一つとして考えられます。サクラについての胴枯病、こぶ病及びpunkタータが発生した樹木については、罹患部を切除する以外に今のところ防除策は見つかっておりません。サクラを健全に保つためには、植栽時にはサクラの生育に適する日当たりの良い場所を選定し土壌改良をすること、植栽後には追肥や病害虫の早期発見等、定期的な維持管理が必要であると考えられます。また、植栽基盤が厳しい条件での植栽計画の検討、シンボルのエゾヤマザクラを保全してほしい等の相談がありました。以下に私が樹木医になってから担当した仕事について紹介させていただきます。

1 里塚霊園緑地帯への植栽の検討について

平成30年9月に発生した北海道胆振東部地震により損傷した里塚霊園(札幌市清田区)緑地帯の盛土について、市街地復旧推進室を中心に地元との調整をしており、盛土部分における植栽計画を検討する仕事を受けました。盛土部分は住宅地と里塚霊園の緩衝緑地としての機能を果たしており、当初は芝のみを予定していましたが、景観に配慮し樹木を植栽してほしい、という依頼でした。植栽基盤の前提条件として、アルカリ再生土を含む土壌を締固め安定させること、表土は30cmすき取った土壌を埋め戻すこと、植栽時期は秋であるということでした。アルカリ再生土を含むということは、植物にとっては良い条件とはいえ、アルカリに強い樹木を選定する必要があります。脆弱な植栽基盤でも生育できる植物を調べていくと、「都心部での緑化」や「屋上緑化」の事例にヒントがあるということに行きつきました。インターネットを調べると、東邦レオ(株)のホームページの樹木医による「土壌のアルカリ化問題」早わかりガイド¹⁾に「アルカリ性に強い樹木」の一覧表が掲載されており、特に東京都心部での需要が多いことが分かりました。一覧表に掲載されているアルカリ性に強い樹木から、浅根性の低木を中心に北海道でも流通しており生育可能な樹木を調べました。

里塚霊園緑地帯に植栽する樹木は、墓園側にアルカリ土壌に強く北海道で生育可能な低木であるコデマリ、シモツケ、エゾヤマハギを選定し、草本類は秋に植栽しても枯れてしまう可能性が高いため、住宅地側に球根類を中心としたクロッカス、チオノドクサ、スノーフレイクを植栽する計画を提案させていただきました。また、樹木根系図説²⁾によると、エゾヤマザクラの根系は最大深さ140cmとなっていますが、表土は30cmという条件であることからサクラの植栽は難しいことについて説明させていただきました。住民からは既存のエゾヤマザクラを残してほしいという意見が出され、当初伐採を予定したエゾヤマザクラの一部を残すことになりました。

2 平岸霊園のサクラについて

平岸霊園（札幌市豊平区）の職員より、シンボルとなっているエゾヤマザクラの樹勢が悪いので見てほしい、という相談を受けました。見てみると、胴枯病が入っておりサクラを保全する場合には、それなりの治療が必要でした。金田樹木医が新ひだかの二十間道路、浦河町西舎のサクラ等で不定根誘導処置や施肥を行い、樹勢回復処置をしていることから、札幌市でも樹勢回復処置を実施したいと相談させていただきました。治療すれば回復の見込みがあるとのことのお返事をいただいたことから、令和2年度に金田樹木医による平岸霊園のシンボルのエゾヤマザクラの樹木診断、不定根誘導及び樹勢回復処置を実施しました。今後も継続的な観察が必要であると考えられます。

3 中島公園のサクラについて

中島公園（札幌市中央区）は隠れた桜の名所のひとつであり、エゾヤマザクラやソメイヨシノの美しい並木が春を彩ります。この並木の一部に樹勢が弱っているエゾヤマザクラがあり、今後どのような維持管理をしたら良いか、金田樹木医に相談し、指定管理者（札幌市公園緑化協会）、札幌市を含め現地の状況を確認しました。中島公園体育センター付近のエゾヤマザクラのうち1本は特に樹勢が弱っており回復が見込めないことから、両脇に新しいエゾヤマザクラを植栽する提案をいただきました。また、金田樹木医からこぶ病、胴枯病や枯れ枝の見分け方を解説していただき、指定管理者が重点的に冬期剪定を実施することになりました。中島公園の桜並木を継続していくには、樹木調査を行い専門的知見により樹勢回復を行うか伐採して更新していくかを判断し、計画的に維持管理をしていくことが必要だと考えられます。



中島公園 エゾヤマザクラ並木

新しい事例に取り組み、課題を解決していくためには、北海道樹木医会や同期の樹木医とのつながりが欠かせません。金田樹木医には、サクラに関する相談に乗っていただき感謝しています。また、LINE やメール等電子媒体でのやり取りに加え、コロナ禍のため東京等で開催されるシンポジウムや学会等に Zoom で参加することができるようになり、最新の情報が手に入るようになりました。これは子育て中の私にとって大きなプラスとなりました。

札幌市内の樹木は大きくなり、樹種の特성에応じて長期的な視点で樹木の維持管理をしていく必要があります。樹木へのニーズは多岐にわたり、地域社会とのかかわり、日照や土壌条件等、その土地の状況に応じて柔軟に対応することが求められています。これからも、樹木に関するコーディネーターとして樹木医活動をしていきますのでよろしくお願いいたします。

参考文献

- 1) 東邦レオ(株) グリーンインフラ&植栽基盤 WEB
樹木医による「土壌のアルカリ化問題」早わかりガイド
<https://greeninfrastructure.jp/support/knowledge/alkali-guide/vol16/>
- 2) 最新 樹木根系図説 誠文堂新光社

林業一筋のなつかしい思い出

伊藤 務（3期）

私の母は私が小学校の時に、残念ながら悲しみを残して逝ってしまいました。祖母から母は娘のころに札幌道庁の赤レンガ庁舎や丸井今井百貨店に勤務していたことがあると聞いていたので、一人で札幌の街を歩けるようになった中学生の夏休みには、なつかしさも手伝って赤レンガの庁舎を一回りしてのぞいてから、近くの北大付属植物園に立ち寄り、大好きな樹木の名前を覚えたり、四季おりおりの草花や博物館を見た後で、母のにおいをかぎたくなって丸井今井さんによく行ったものでした。

一条館の9階と10階の踊り場に、牛か鹿か今でも分からない、めずらしい立派な金色のモザイクの壁飾りが保存されています。当時はそのすぐ前の一室が小さな郷土博物館になっていて、道内の歴史的な文物がたくさん展示され、そのガラスケースの一つにアイヌのマキリ（小刀）が5～6本飾られていました。その中でも私のお気に入りのものは、小ぶりで反りがあり、鞆^{きや}の3か所が桜の樹皮巻き作りで、渦巻き文様が見事に彫刻されたものと、魚の形をした茶色の皮袋製の鞆^{きや}のものでした。山や川でのいろいろなことを想像しながら、初めて見たのに飽きずに眺めていたので、今でもその文様までもあざやかに思い出すことができます。マキリの鞆^{きや}の材料は主にイタヤカエデが多いようです。そして、エンピツ削りの小刀をマキリと呼び習わして親しんだものです。

春になるとタケノコやフキ、秋には沢山の実がなっているコクワやヤマブドウ、キノコなどを採りに父に連れられて野幌の原始林に出かけました。

そんなことから次第に自然志向となっていき、昭和30年に空知農林高校に入学して、校内では樹木にかかわる色々な実習や月形の演習林に寝泊まりして学習をいたしました。

卒業後は林業に係わりがあり、日本各地に広大な社有林を有する製紙会社の伝統深い山林部に入社して、道内各地の山林で社有林管理の仕事をはじめ、造林、造材、立木調査や苗畑などの作業に従事して北海道各地の山野を駆け回りました。

その他に国有林の請負造林があり、厚田、別狩担当区内で春先からトドマツの植林と下刈りや地拵え作業が秋まで続きました。発足の山村の元気な労務の人たちには大変お世話になりました。トドマツの種子採取が終了日でした。造林地の奥の海岸に近い深山で大きな舞茸を見かけたことがあります。

当別に向う青山峠から造林地を遠望すると、山にはトドマツの広大な緑を見渡すことができます。

山林業務の折には、わけでも古くから伝わっているマキリとタシロ（山鉾）に接し、ラッパや鈴と剪定鋏と一緒に必ず携帯するとともに、その刀姿や文様彫刻の美しさに限りなく深い魅力を感じるようになり、欠くことのできない大切な山林用具のひとつでした。

大阪万博が開催された年、私が30歳の時に大阪に転勤になりました。関西で京都の山や四国、九州の山林や造園、苗畑を歩き、北海道で見られなかった名前を知らない樹木や植物などがたくさん生育していましたが、その内にいつの間にかほとんど覚えることができました。また、日射病も体験しました。奈良県大台ヶ原の広大な山岳地帯では、希少となった天然ヒノキの探査も行いました。

当時の関西地方では、初めての花の博覧会やゴルフ場建設ブームの最中で、大手ゼネコンからの発注があり、セパレート植栽はクロマツが主で本数も多く、クラブハウス周りの造園工事や巨大なケヤキの移植作業も担当しました。そこには木や花の大好きなオーナーの方もおられ、植栽状況をよく見

にこられていました。また、道路公団による新設の高速道路沿いの樹木の植栽や住宅公団の宅地造成地の造園工事なども手がけました。その他、海を埋め立て造成された関西空港の広い芝張も行いましたが、現場までは船で行き、潮風があり、また地面が固く竹串を打ちながらの作業で大変でした。

奈良西ノ京に有名な五重塔がある薬師寺の外構植栽と造園工事は、会社が直接請けた工事で、植栽は近鉄沿線にクスノキやクロマツなどを植えました。庭園の名木探しには大阪近郊の苗畑や四国、九州まで駆け回り、私は3年間にわたり担当者として携わりました。

各々の工事も無事完了し本殿の竣工式には宮内庁はじめ、大勢の人たちが参拝なされ盛大に執り行われました。会社には、協力した施工業者として感謝状が授与されました。薬師寺の建築には太い台湾ヒノキが使われたと聞いていましたが、めずらしい旭川のユーカラ織の幡^{ぼん}が垂れ下がり美しく翻っていました。竣工式に参列出来まして嬉しく思います。

仕事の都合で京都と名古屋にも住みましたので、休日には名所旧跡めぐりができました。

定年後には北海道に帰り、王子林木育種研究所で主に苗畑の仕事をし、その後は造園会社に入り円山公園のサクラ養生や大通公園8丁目のケヤキの大木8本ほどの土壌改良工事(樹守13号表紙)を行いました。そのケヤキは今でも元気です。次はコンサルタント会社に所属して、道内各地の道路新設に伴う立木調査や住宅地再開発に掛かる庭木調査に明け暮れて各地に出かけました。

春先に西から黄砂が北海道にも飛んできます。ODAの「中国山西省JICA植林プロジェクト」黄河流域保全林造成5ヶ年計画に2006年と2007年に、先輩と同級生に誘われて6人の仲間と参加しました(詳しくは樹守17号参照)。黄砂の飛来と地球温暖化防止の目的で、黄土高原山岳地帯に植林する技術指導員として春先から秋口までの間、現地に滞在して植林するもので、高度は1,000mほどの札幌の手稲山くらいの高さの土地で、どこ迄もどこ迄も続く広大な高地に500万本の油松や側柏(コノデカシワ)、ニセアカシアなどの苗木を延べ4万人工の現地の人たちが、植床を掘って植林する大規模なもので、大変厳しい作業でしたが無事完了し、年々植栽木が大きく育って、山が緑に変わって行くのがはっきりと分かりました。

帰国に際し、有名な世界遺産の万里の長城や故宮を見学させていただき、また陸続きの遠い、遠いモンゴル見物に車で連れて行ってもらい、途中の砂漠では今まで見たことのないラクダらしい珍しい野生動物を眺めたり、古い遺跡を見ることが出来たことは夢のようでした。

札幌に帰ってからは、中国と一緒にいった先輩と北海道新幹線建設予定地の函館から倶知安、小樽までのトンネル掘削地付近の立木調査や北の最果て稚内の風力発電にかかわる建設予定地の立木調査や移植木の調査を行いました。また、知床半島の中標津から羅臼の中間頃の海岸沿いの道路補修に伴う立木調査では、トドマツの樹幹には鋭いヒグマの爪痕がたくさんあって、先輩と仲間三人で代わる代わりラッパや笛、鈴を大きく鳴らし続けての調査で無事目的を達しました。森の中にはエゾシカの角が落ちていました。

胆振管内白老町のアイヌ文化復興拠点「民族共生象徴空間」(ウポポイ)、北海道では初めての「国立アイヌ民族博物館」の建設に伴う、白老と苫小牧の中間の高速道路のインター新設の山林調査と国道拡幅に係る樹木や移植木の調査は、コンサルタントの下で行いました。

待望の愛称「ウポポイ」はアイヌ語で「おおぜいで」歌うことを意味します。ウポポイは令和2年7月12日にオープンいたしました。体験ホールでの舞踏や学習館、伝統的コタンなどの構成です。

令和3年元旦に年賀状が白老アイヌ民族文化財団の知人の役員の方から家に届きました。それには

新しい「アイヌ民族博物館」にはいろいろな民具と共に「マキリ」もたくさん展示されていますよ、ぜひ見に来て下さいねと書かれていました。折を見て見学に出かけるのが楽しみです。館内にはアイヌ民族に関連する貴重な資料が1万点ほど收藏されているそうです。

山林の立木調査は、山には起伏も多く、崖や小川などもあり、季節によっては蜂などの害虫も飛び交います。通常調査は選木してナンバーを付ける人、その木の胸高直径を輪尺などで計測する人とそれを野帳に記録する人の3人1組で呼吸を合わせて行いますが、2人1組の場合もあります。冬はカンジキを履いての作業になります。また、人里離れた奥地での調査ではハンターの方をお願いし、同行していただいたこともありました。山ではいつも危険が伴い注意が必要な業務だと思います。

北海道では古くから、一般的に林業関係者では毎年12月12日は、夏山と冬山の境目の日と定められていて、その日だけは山林用具や輪尺、マキリやタシロなどの刃物類は使わずに、近くの大きな樹木にお神酒などをお供えて、山への感謝と作業の安全を願う、大山神安全祈願祭が行われて、仲間の人たちと一緒にその日だけは無礼講で、なごやかに楽しい一日を過ごすことが習わしでした。

傘寿を過ぎた今では、樹木に係わる想い出がなつかしく次々と浮かんでいきます。



アイヌ民具マキリ

札幌の伊藤さん



札幌市厚別区の樹木医伊藤さん(58)がこのほど、アイヌ民族の名工が細かい装飾を施したマキリ(小刀)を全国に探し歩き、写真集「民具図録続・アイヌの工芸世界・彫工シタエホリ」にまとめた。シタエホリは、幕末の探検家松浦武四郎が著書「近世蝦夷人物誌」の中でたたえたマキリの名工。

(山口洋輔)

アイヌ民族の名工・シタエホリが装飾
マキリの写真集発刊

美しい唐草模様を魅了され、文献を調べていくうちに、似た模様のマキリの存在を知った。以来、数十年にわたり、全国の博物館や資料館を訪ね歩き、美しい模様のマキリや工芸品を探して写真を撮り続けた。

その中で伊藤さんが、シタエホリの作と考えたものには「杉本目出平」林調査などでマキリを使「堀助」「シタエホリ」伊藤さんは、二〇〇二

全国の博物館訪ね撮影
お盆など含め40点紹介

伊藤さんは製紙会社で働いていることから、山をのびながら、山ものには「杉本目出平」林調査などでマキリを使「堀助」「シタエホリ」伊藤さんは、二〇〇二

作品について九六年に論文を発表すると、民族文化の研究者の別の論文に引用されるなど、一定の評価を得たという。退職後も資料集めを続け、アイヌ文化振興・研究推進機構の助成も受け、今回シタエホリの作品十五点を含むマキリやお盆など計四十点を紹介する写真集を完成させた。写真集は道内外の約三百の図書館や、博物館などに寄贈した。



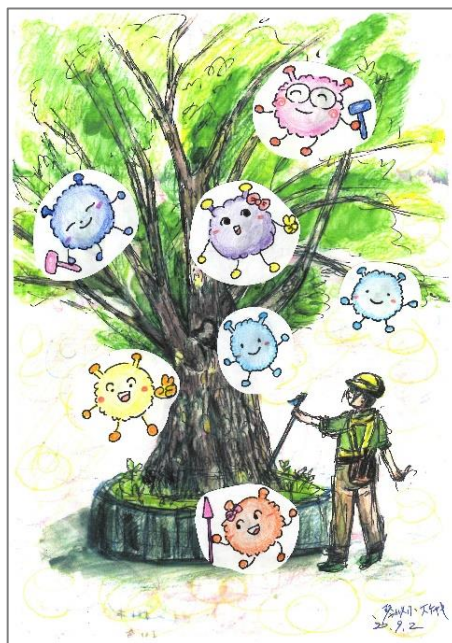
「コロナ禍雑感」

— 感染拡大防止策の徹底という嘘と思考停止 —

吉田 憲一（7期）

「病は人から人へ？」

今まだ2度目の緊急事態宣言が続いている。政府や地方自治体の指導者達はマスク姿で「緊急事態宣言の効果が出了」「更なる感染拡大防止策の徹底を！」と声高に叫んでいる。しかし、マスコミや専門家達を駆使し国民に長期間強要してきた「3密防止、行動8割減、新しい生活様式」等コロナウイルス感染拡大防止策の検証はまだされていない。「非『マスク、消毒、3密防止』地区（期間）」という対照区のない実験（政策）では、真の研究者は「効果あり」とは言わない。木には無数の菌やウイルスが共生している。木材腐朽菌（キノコ）は健全木にも居て、衰弱・枯死部があると活動を始める。最終分解者として物質を大地に還す重要な仕事だ。ウイルスは更に微細なミクロンの物質なので既に万人の肺に入っており、そこに炎症や壊死部があれば活動を始める。つまり、病は人から人へ移るのではなく、肺の中から発現すると考えた方が理に適っている。日本人の殆どが健全体であることがその証左である。新型コロナウイルスは、中国大陸武漢市で発生したといわれる。北緯30度付近で日本では丁度鹿児島県屋久島あたりになる。その当時（2月頃）の北東方向へのジェット気流（偏西風）に乗ると、ウイルスは韓国上空を通過し4000キロ離れた北海道へわずか数時間で到達する。海外渡航歴のない人から外国の変異株が発見されて感染経路不明と大騒ぎするが、真相は明快であろう。



「マスクの効果は？」

マスクは新鮮な空気の吸入を阻害し免疫力を下げる。健康体には不要で特に全身成長期の子どもにとって新鮮な空気不足は心身共に重篤なダメージとなる。「目元口元」には人の心が現れる。マスクは外して素顔で誠実に話そう。過剰な行動規制は社会的弱者、そして彼らを傍で支える人々を苦しめる。新しい生活様式ではなく菌やウイルスと共生する普通の生活でいいのだ。緊急事態宣言の功罪は？必要性は？専門家の信用度は？指導者の責任は？アフターコロナの新しい生活様式の変化とは、どうやら私達庶民の生活レベルではなく政治や専門家集団の世界のようだと思えるのは私だけであろうか。もし感染拡大防止策そのものが無効・不要なものだったとしたら……。今、私たちはあのハンセン病対策と同じ道を歩まされてはいないか、胸に手を当てて自問すべきではあるまいか。

「感染症の三大要因」

感染症には「感染源」「感染経路」「感受性」の三大要因があり、このどれか一つを断つことで感染は防止できるとされている。感染経路の分類は、空気感染、飛沫感染、接触感染があげられるが、新型コロナウイルスは主として飛沫感染と接触感染といわれている。感染経路不明者が50%以上と増加するにつれて「飛沫」と「空気」の中間的な「エアロゾル感染」、更に人為色の濃い「市中感染」という語が使われ始めた。感染者数ピーク時は殆どが無症状・軽症者であることから、無症状者が感染を広めているという余りに非科学的な理論が出始めた。「空気感染」を認めることは、彼らが金科玉条のごとく信じ、万人に強制してきた「マスク云々」等感染拡大防止策の破綻・無効を認めることになるからだろうか。この「飛沫感染」論により「コロナ病が人から人へ移る」という発想が、実はコロナ病よりもはるかに恐ろしい「心の病」を生み出していることに彼らは気付かない。



「感受性の重み」

専門家から「感受性」という言葉が消えた。感受性とは同じ感染源（ウイルス）を吸っても発症する人とならない人がいるということで、言い換えれば免疫力のある人とない人ということである。大きさ 0.1μ ($1/10000\text{ mm}$) のウイルスは実感的な重さはなく、空気中に無数（無限？）に漂い、既に万人の肺に入っており、そこに感受性（炎症、衰弱・枯死細胞）に応じて発症することになる。専門家がいう「飛沫感染論」をなぞると、健全体の肺から出た不活性化したウイルスを含んだ飛沫は「弱毒性ウイルス」であり、ワクチン論でいうと「天然ワクチン」ということになる。すなわち「3密防止対策」では「宝の持ち腐れ」ということになるのだ。ほぼ1年の長期に渡る政府・専門家達の感染拡大防止策が、逆に個々人の免疫力の向上を妨げていたとはいえないだろうか。

「思考停止からの脱却」

自然界や生物界の循環・共生システムを理解しないと、自然界の一員でもあるコロナ禍の対応は難しい。自然と共に歩む人間社会は、密閉された研究室の理論ではコントロール出来ない。このままでは医療関係者、感染症学者、政治家、行政指導者達の信頼こそが崩壊するであろう。行政による目先の行動制限は「自粛警察」を生み、コロナ感染者や社会的弱者への偏見・差別・いじめを増大させていく。人間社会の相互信頼や心の崩壊の方がはるかに大きいのだ。専門家と名の付く者たちは、この新型コロナウイルスの実態を冷静に生物学的・生態学的に分析判断し、一日も早く普通の日常生活の空気を国民に返さなければならない。「もう以前のように戻れません」「宴会や旅行は控えて」等と脅すことの無意味さ高慢さに気付こう。「嘘の上塗り」はもう限界である。今、また春を迎える。子ども達には思いっきり新鮮な空気を吸わせてあげよう。そこで一句、(二句で失礼！)

「顔隠す マスクは真も心も 隠すもの」

「気のゆるみ そう言うあなたは 思考停止」

浅知恵では到底自然の摂理に敵わない。

以上

樹木医として思うこと

菅野 信治（15期）

これまでの樹木調査で経験したいくつかの事例を振り返り、樹木調査の現実とあるべき姿を考えてみた。

結論ありきの樹木調査

樹木調査依頼の中には、結論ありきの危険木診断依頼があった。所有者の事情で樹木を伐採する必要になったため、樹木医の「危険木」との判定を根拠に伐採するためらしい。樹木医としては当然このような依頼を受けることができないが、私の場合は所有者の事情も考慮して、とりあえずその樹木を見るようにしている。一見して何の障害も樹勢低下もないと判断した場合は、調査を実施しても所有者の意にそぐわない結果が想定されるため、その時点でお断りをしている。しかし、健全性を疑うような状況が確認できた時は、樹木の保全を前提とした報告書を作成することを条件に受託することがある。その場合の報告書には、樹勢回復策や倒伏を防止する対策と、今後何もせずに放置した場合のリスクを必ず明記する。その後の伐採の判断は、当然所有者自らが行うことになる。

これまで人間は多くの樹木を庭木だけではなく、記念樹や修景、誘導、装飾、風よけや燃料、パルプ材の原料などとして植樹している。適切な維持管理が行われなかった樹木の多くは様々な障害で枯れ始め、やがて腐朽が進み枝折れや倒伏などの危険性が増すことになる。この場合、樹木医の危険木診断は目的にかなっていない。また、危険木診断の結果如何に関わらず、植樹目的にそぐわなくなった樹木は、用済み（使命を果たした）としてほとんどが伐採される。これがペットであれば、不要になって捨てた場合、道義的責任と時には法的責任も問われる。しかし、使命を果たした樹木の伐採は公共物でもない限り一般的に大きな問題にならない。

所有者の事情で健全木を伐採する場合は、樹木医が係わる余地が全くないため、今後も所有者自らが関係先の理解を得て伐採を行う必要がある。なお、やむなく伐採を選択した場合には、古木や長く親しんだ思い入れのある樹木ほど、敬意を払って伐採に望みたい。

もしも伐採木が貴重な樹木であれば、移植や挿し木、取り木、バイオ繁殖などで遺伝子を残すことができるため、そこには樹木医が関わるができる。



伐採前のお祓い

樹木医としての限界

危険木の診断基準はこれまで多くの関係機関から示されており、それらを用いて危険木と診断できても、いつどの程度の風で倒伏するかなどの具体的な時期は、到底断定することはできない。そのため依頼元から判断基準の適用指示がない場合には、これまでの経験則も付加して総合的に危険度判定を行うようにしている。これまで経験した中には、健全な樹木であっても強風や風向きしだいで倒伏した例が数多く見られ、また、今にも倒れそうな樹木でも根の張りや周辺環境に恵まれたことで、倒

伏せずに生育し続ける樹木も見てきた。

ある施設で数百本の危険木診断を行ったことがある。その結果は倒伏の危険性が低い樹木が 25%、今にも倒伏しそうな危険木が 75%であった。数ヶ月後に台風並みの強風が訪れた時、倒伏した樹木の 8割が危険木と診断した 75%に含まれていたものの、残り 2割は調査対象とならなかった健全木と 25%の倒伏の危険が低いと診断した樹木であった。強風という通常ではない厳しい状況であったが、2割もの健全木が倒伏した事実を考えると、危険木診断の難しさを改めて実感させられた。

不健全な樹木に対して依頼者のほとんどが「いつ頃枯れるのか、いつ頃倒れるか・・・」と答えを求めてくる。しかし、簡単にその樹木の将来を断定することはできない。通常、一度診断が終われば、樹木医が年間を通して経過観察を行うことは希で、多くの場合、所有者がその後の状況を見守ることになる。そのため、樹木医はどのような状態になった場合に倒伏の危険が増すのか、どのようにすれば樹勢が向上するかを、所有者に様々な事例を示して丁寧に説明する必要がある。加えて万が一倒伏した場合のリスクを明確に示すことが、樹木医ができる精一杯の質問の答えと考えている。

人間を看る医者は、末期ガン患者の余命を患者やその家族などに告げる場合がある。この余命判断には多くの文献や臨床結果、医師の経験則などが基になっている。それでも告げた余命は時に大きく外れることも希にある。樹木でみた場合、患者はものを言わず血液検査ができるわけでもなく、根の張りや幹内部などの詳細を見ることができない。そのため樹木の余命を判断できるほどの状況が把握できないことから、安易な断定はできない。しかし、将来を断定できないまでも、樹勢向上は人間の回復よりも容易であることは事実である。そこには我々樹木医が力を注ぐことができる重要な使命がある。

これまで多くの危険木調査を行って判ったことがある。高木の多くは何の維持管理もされずに放置状態であることが多い。維持管理を行っているとしても、せいぜい伸びすぎた枝を切り詰める強剪定である。また、調査依頼の樹木のほぼ全てが自然木ではなく、人間の手で植栽された樹木である。さらに依頼される樹木の共通点は、植生地盤が薄くまたは植生土が劣悪な状態であることが多い。このような状況下でも幸い高木まで生長した樹木には、大きな傷や腐朽が見られる。商業施設の樹木は、屋内外を問わず植樹柵に植栽されており、植木鉢のような土壤環境になっている。その樹木が危険木となり万が一倒伏した場合は、人や設備への被害が甚大になる可能性が高い。そのため即刻伐採が必要であるが、最終判断は所有者のためにその後も何もせずに何年も置かれる場合がある。



切り詰められたニセアカシア

ある施設では非常に危険な状態の樹木（樹高約 7 m、根元径 25cm）を、1年以上倒伏防止対策も行わずに置かれていた例がある。この樹木は根元に置かれたかわいいベンチに観光客が座り、記念写真を撮るための必要な添景木であった。この場所ではこの樹木が貴重な存在であったが、既に地際の幹

は朽ちかけており、横から力一杯押せば根元が大きく揺れるほどぐらついていた。その後時を経て伐採されたが、万が一倒伏して怪我人が出ていればと思うと、樹木医としての説得にも限界があると気づかされた貴重な経験であった。



根元が激しく腐朽し朽ちた危険な樹木



伐採された幹の地際断面

また、ある施設ではヤナギの大木（樹高約 22m、幹径 96cm）の幹が、長い年月をかけて裂けるように傷が広がった最も危険な形状の樹木があった。この状況を放置すれば何れ幹が裂けて倒伏するため、ケーブリングか伐採を行うことを提案したが、この場所は一般人が立ち入る箇所でなかったため、所有者は倒れるまでそのまま放置という選択を行った。当然のようにその後強風で片方の幹が裂けるように倒伏したが、幸い人や物への被害はなかった。



幹が大きく裂けているヤナギ



幹が大きく裂けているヤナギの全景



強風で片方の幹が倒れたヤナギ

このように危険木と診断しても対策が遅れるかもしくは対策をとらない理由は、大きく分けて以下の三点に集約される。

- ①伐採する費用の確保や代替え樹木の確保が困難
- ②万が一倒伏しても人や物への被害リスクが小さい
- ③所有者の認識不足

①については、その場に調和した同じ形状の樹木がなく、また高木であれば代替えの樹木確保が難しいなどの現実がある。費用に関してみれば、樹木は企業活動の必須構造物でなく、また生産性とも無縁のため予算化の優先順位が低くなる傾向にある。

②は森や林の中の自然林の中にある危険木と同じ扱いで、倒伏しても人や物への被害がないと判断した場合である。

③については、企業の場合コンプライアンスや社会的責任の認識不足、個人の場合は単純にリスクを理解していない場合が多い。しかし、昨今では多くの企業がリスクに気を配ってきているため、③については過去のものになりつつある。その他①から③が複合的に絡んでいる場合も少なくない。

しかし、どの理由であっても危険な状況は変わらない。そのため危険木診断で倒伏リスクや太枝などの落下リスクが高いと判断した場合は、所有者に十分理解していただけるように丁寧な説明を行い、可能な限り早急に対応していただけるように努力することも必要になる。

また、屋内の樹木の樹勢回復にあたっては、調査で提案した改善策をよく理解して実行できる管理員がその後の管理を行う必要がある。屋内の維持管理はマニュアル通りにはいかない。屋内の植栽（植樹柵）では水管理が最も難しく、柵の構造や土壌の種類、植栽されている箇所の環境（光量、室温、湿度など）によって土壌水分が大きく影響を受ける。そのためそれらを理解した管理員が日常管理にあたらなくては、根腐れや乾燥で衰弱枯死することが避けられない。少しでも手のかからない維持管理を望むのであれば、設計当初から専門技術者が参画し、植物に優しい環境を提供する必要がある。そうでなければ、いつまでも専門管理員の常駐や樹勢低下のたびに調査が必要になるであろう。

樹木は環境維持の源

危険木診断は人間との関わりの中で成立する業務である。人間に関わりがない自然林のような箇所では、樹木が傾斜しようが倒れようが問題にはならない。ここでは生命力が強い樹木からひこばえや胴吹きが発生し、また倒木更新などで生命が永続的に継続されている。そこは人との関わりが希薄なため、天然記念物でもない限り樹木医が係わる余地がない。しかし、ここからは樹勢回復のための多くを学ぶことができる。我々はそれらから得た知識を基に、病んだ樹木の樹勢回復の手助けが可能である。樹木の生命力の強さは、私たちの取り巻く環境を将来に渡って健全に維持する源になる。そのため樹木医は積極的に樹勢回復に取り組み、より多くの樹木が健全に生育できるように、これからも弛まず研鑽を重ねたい。

おがわち 「小川内の杉」 — 軌跡を振り返る

熊谷 恒希 (13 期)

福岡県の「小川内の杉」を覚えておられるでしょうか。福岡県の五ヶ山ダム建設工事に際し、水没地から高台に移植する工事費が 7.8 億円とかで樹木医の間でも関心を集めた樹木です。樹守 25 号の編集後記でも紹介しましたが、昨年 2 月初旬、九州に行く機会がありましたので会いに行って来ました。この頃は新型コロナウイルス感染のニュースが段々多くなってきましたが、移動中マスク姿の乗客はあまり多くはなかったようです。

さて、この大杉（大小 3 株の根元が一緒なので別名夫婦杉、親子杉とも）は佐賀県が昭和 31 (1956) 年に指定した県の天然記念物で、佐賀、福岡両県境の小川内地区にある山^{やまづみ}祇神社の境内にあったご神木です。説明板によると「樹齢は 500~600 年、3 株が根元で癒着し、樹高は約 38m、根回りは 13.5m におよぶ。また 2 株はほぼ同じ大きさで、目通り幹回りは 5.5m と 5.3m あり、残り 1 株はそれよりも小型です」とのこと。現在は運搬に使用された鉄枠内で静かに回復を待っているかのようです（鉄枠が外されるのは数年後になるとか）（写真 1）。



写真 1 移植された「小川内の杉」

1 移植に至るまでの経緯

事の発端は福岡市で起きた昭和 53 (1978) 年の大洪水被害。給水制限が 287 日間にも及び、これを契機に那珂川に三番目のダムを造る計画が出てきました。那珂川には最上流に脊振ダム（上水道目的で有効貯水容量は 440 万 m³）と中流域に南畑ダム（治水・不特定・上水道・発電目的で有効貯水容量は 556 万 m³）がありました。翌年の昭和 54 (1979) 年に調査を開始し、昭和 58 (1983) 年には実施計画調査が開始されました。計画された五ヶ山ダムは目的が洪水調節・流水維持・上水道・洪水対策となり有効貯水量は 3,970 万 m³ で福岡県内最大のダムとなります。福岡市はたびたび洪水と洪水被害にあっているとその機能に期待するところが大きかったのでしょうか。昭和 63 (1988) 年に建設事業が採択され五ヶ山ダム建設に着手、当初の事業費は 850 億円、平成 22 (2010) 年の完成予定でした。建設場所は佐賀県と福岡県との境を流れる那珂川の脊振ダムと南畑ダムの中間地点、丁度川の流が 300 度にも折れ曲がるかという場所です（図 1）。当然のことながらここにも昔から住んで生活している人々がおりました。福岡県側には東小川内、網取、道十里、桑川内、大野（この五集落が五ヶ山の由来）、佐賀県側には松隈字小川内、大野などの集落がありました。

この地の特徴として佐賀県教育委員会「福岡県営五ヶ山ダム建設工事に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書」の序には「小川内遺跡が所在する旧小川内集落は、古くは脊振山山岳信仰の舞台として、江戸時代には苗字帯刀が許された「山内刀指し」として藩境や水路の警備にあたっていました。近年ではその地理的特性により、農山村の原風景を色濃く残した地区として注目されていました」と記されています。

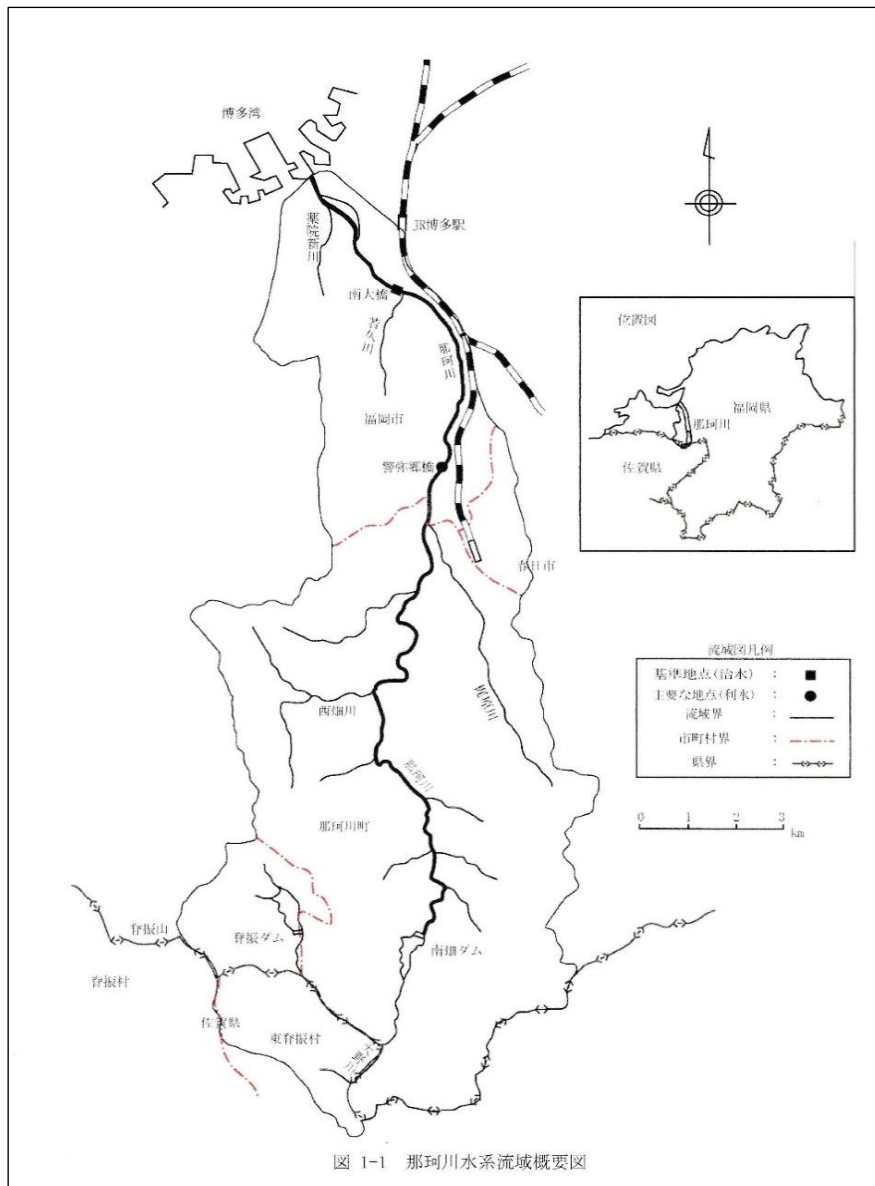


図 1 五ヶ山ダム位置図 (H15 那珂川水系河川整備計画より)

その後もダム建設計画は着々と進められ、ダム用地の取得や集団移転地の確保、移転補償などの事業が行われ、平成 18(2006)年に水没予定地に住んでいた人々の移転が完了しました。

かくして地域の信仰の場所であった山祇神社には「夫婦杉」がとり残されることになりました。地域の生活と歴史を見守り続けてきた神社のご神木に対する人々の思いは、できることなら何とかして水没の危機から救ってやりたいと相次いで保存を要望する声があがりました。以下は移植までの出来事です。

2002 年 福岡県が移植の可否について調査をし、一旦は「移植は困難」との結論に至る。

2003 年～山口樹木医（日本樹木医会佐賀県支部）や森樹木医（日本樹木医会福岡県支部）をはじめとする方々の調査が続く。

2005 年 佐賀の有志から”五ヶ山ダムはほんとに必要だろうか？”との意見が佐賀大学名誉教授（当時）の久保浩洋氏の検討書を含めネット上にアップロードされる。

- 2011年 地元をはじめ佐賀県側の強い要望を受け、福岡県は専門家による検討会議を発足させる。検討委員会には森氏、山口氏が樹木医としてアドバイザー参加、小河福岡県支部長が委員として参加。
- 2012年 「小川内の杉」の保存を内容とする住民監査請求「五ヶ山ダム建設工事差し止め請求」が提出されるも、監査請求対象は財務会計上の行為に限定されるため却下される。
ダムは本体工事に着手。
- 2013年 調査検討の結果「移植可能」の判断に至り、佐賀県に移植申請を行う。佐賀県教育委員会は移植保存に同意し、県文化財保護審議会も現地を視察。3月時点では移植地、工法は未定。6月に移植許可通知が出て、移植準備作業が開始される。
- 2014年 移植準備作業が続く。
- 2015年 佐賀県教育委員会が現状変更許可を出して、移植工事の概要も明らかになる。
移植事業費は7.86億円（引き上げ作業4.67億円、搬送路設置3.18億円）。佐賀県所有の樹木ではあるが工事費は全額福岡県が負担する（佐賀新聞）。
この頃から新聞やネット上の取り扱い記事が多くなる。
- 2016年 移植工事（根切り・運搬・植付）が実施され（写真2、図2）、この年以降養生作業に移る。
仮設関係のコンクリート構造物などは予算不足のため、撤去されずに残置。
- 2018年 五ヶ山ダム竣工（写真3）。試験湛水に入る。
- 2021年 五ヶ山ダム供用開始。

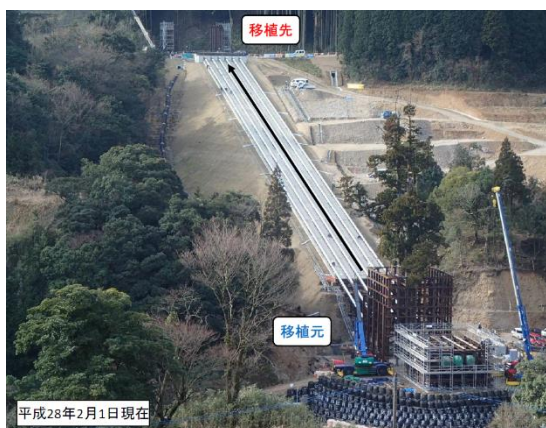


写真2 運搬の時を待つ「小川内の杉」福岡県 HP より



写真3 完成した五ヶ山ダム（ネット画像より）

2 事前の調査と施工方法

一旦「移植は困難」と結論を出したにもかかわらず、その後の調査・診断により「移植可能」と判断した理由は何でしょう。この移植工事を担当された森樹木医や山口樹木医に直接取材をしないで憶測で物を述べるのは甚だ失礼と思いつつ、樹木医のMLやネット上での情報をもとに追ってみました。

平成14（2002）年 福岡県が杉の調査を開始 → 「移植は困難」との結論。

平成15（2003）年 現況調査

以下は森樹木医のTDM上のメールです（作業は年度単位で記述）。

平成16～17年度 山口樹木医（佐賀県）による調査（外観診断、試掘調査、発根調査他）。これ以降は、森樹木医（福岡県）と山口樹木医の共同調査。

平成18年度 根系試掘調査、地中転石調査、樹幹機器診断（2m間隔で38m迄）ピカスとレジストグラフ

平成 20 年度 根系試掘調査 (エアースコップによる根系追い掘り調査)、土壌環境調査、試供木調査
(根系、分割移植検討)

その後 移植方法の検討—検討委員会への参加

平成 25～26 年度 移植準備作業開始。平成 26 年 1～3 月は 1 回目の根回し、平成 27 年 1～3 月は 2 回目の根まわし。

平成 27 年度 移植開始 (ここまでの作業状況は図 2)

とのことで移植予定の杉と移植先の調査にかなりの時間をかけて詳細な調査をした結果が移植の可能性を引き出すことができた要因のようです。また工法については山口樹木医が平成 19 年に大楠の移植で佐賀の H 緑化建設会社と検討したパイプルーフ工法が採用されたように思います。重量 500 t もの樹木を動かすには根鉢をかなりの剛性のある資材で固定しなければなりません。底部の補強 (写真 4) をどうするかが大きなポイントであったろうと思います。また運搬 (高さ 46m、水平距離 220m の斜路) にも特殊で大掛かりな装置が必要となります (写真 5)。今回その重責を担ったのは宮地エンジニアリング(株) (橋梁や鉄塔など大規模の工事を得意とする会社、工事の詳細は宮地技法 30 号に掲載)。このように多くの方々の努力と奮闘の末に大杉は新しい場所に移設されることになりました。



写真 4 底部の補強 福岡県 HP より



写真 5 斜路の運搬 (撮影 : 大神樹木医)

3 大規模プロジェクトと犠牲

いつの時代にも世の変化に対応するためと称して大きな事業が提起されます。しかしその都度、そこに生活する人々や自然に大きな犠牲が求められてきました。今回の五ヶ山ダムも本当に必要だったかどうか賛否が分かれています。「小川内の杉」もできることなら元の場所で集落の人々とともに朽ち果てるまで自分の生命を全うしたかったことでしょう。

移転を余儀なくされた人々のおかげで福岡 (市) の多くの人々の生活が向上するならば、事業に協力した甲斐もあったというものでしょう。今、五ヶ山と小川内の集落は湖底に沈んでいます。その光景を新しくなった山祇神社の横で「小川内の杉」は静かに見守っています。福岡に行く機会がありましたらこの場所に足を運んでみてはいかがでしょうか。

【参考・引用させていただいた資料】


Inoueinterior Room Blog (地元愛にあふれた文と写真がいっぱい。頻繁に「小川内の杉」に通っている)、通り道通信、福岡県 HP、佐賀新聞 LIVE、西日本新聞、樹木医 TDM、朝日新聞デジタル他多数の方々にお礼を申し上げます。

2016.7.20
ポスト-移転資料

五ヶ山ダム「小川内の杉」移植

樹木医 森 陽一

H18年度調




機器調査
調査足場
根系調査

ルートカラー
根の地上部で
広がった部分


《側面図（南側から）》 **調 査** 《側面図（東側から）》

弾性波樹幹内部調査(ピカス)

2号木 1号 3号木




樹木No.1
樹木No.2
樹木No.3




樹木No.1
樹木No.2
樹木No.3

H20年度調査

根系試掘調査




試供木調査



根株分割 根系調査 機器調査


H25年度移植準



根系掘削
埋戻し


移植準備

3D測量




3D測量

点検・養生



定期調査 3D測量

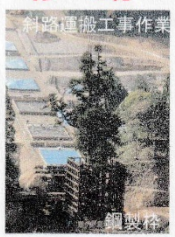
H26年度移植準




根系掘削 根回し 土壌改良資材 埋戻し 根回し完了

移 動


斜路運搬工事作業




移動前



移動中



移動中



植付完了




図2 詳細調査の様子

枝 抜 き 雑 感

鮫島 宗俊 (16期)

皆さん! 剪定は難しい、なかなかうまくいかないと思いませんか? うまいとか下手とか考えなくてもよいのです。うまい下手は他人の評価によって決まるのです。

自分の感性の赴くままにやっています。その時は必ず樹の気持ちになってやって下さい。

人間十人十色という様に、樹木も十木十色というかどうかわかりませんが、同じものはないのです。似たものはあると思いますが、それゆえ安心してノコ・ハサミを使って枝を外してみてください。人間のやることです。人それぞれ違っていいのです。切りすぎる人、切るのをためらう人、切れない人、これが個性、その人の持っている感性なのです。

ここで皆さんに言いたいことは、枝を外すにしても、残すにしても、いかに樹を美しく見せるかという事です。人間は美しくありたい、ほかの人に外見をよく見られたい(本当は内面の方が重要なのですが)と常に思う生き物です。樹も同じなのです。美しく見られたい、世の人に美しい樹形を鑑賞してもらいたいと思っているのです。そこを理解してハサミを入れてやるのが人間なのです。皆さんお分かりの通り、人間は口から食物を取り込んで生命を維持しますが、樹は太陽光、酸素を取り込み根から水分養分を取り込んで生命を維持していくわけです。本来であれば大きく羽ばたく様に枝葉を伸ばしたいのですが、これを狭い空間に樹形をまとめて生命維持させるのが人間であり、昔からの伝統ある剪定技術なのです。

今の樹木を確認して頂きたいのですが街路樹、庭園樹、屋敷林樹、植林樹、採炭樹等その用途に応じた樹形というものがある様に様々な形態があるのです。それを今の技術や人間の感性が過大解釈して、樹形を大幅に変えているのではないのでしょうか。

下記に写真を載せてみました。これは街路樹(プラタナス)の写真です。剪定する人によってこれだけ違ってきます。さて、皆さんはどちらが美しいと思いますでしょうか? 中枝、小枝の残し方に注目してみてください。



中枝・小枝を残した剪定の樹姿



中枝・小枝を残さず剪定した樹姿

評価は人によって違ってくるとは思いますが、如何なものでしょうか?

もし怒りっぽい人、朝夫婦げんかした人、出がけに会社で面白くない事があった人が樹に登って作業した場合、多分右側の写真となるでしょう。

心静かな人、出がけに争いごとをしなかった人、冷静で心穏やかな人は左側の写真の様な枝造りをする事でしょう。

さて皆さん剪定はその日の心の状態、体の状態でこの様になるのです。

まず木を切る事に慣れる事です。面白いもので木を切る事に慣れてくると、人間大胆になりどんどん切っていきます。そこでその人の感性が出てくる様です。そのまま切りすぎる人、1回立ち止まり見つめ直す人、さて皆さんどちらのタイプに入るでしょうか？

私の失敗例です。お茶の先生の所でアジサイが茶花になると知らないで、正月前の作業に入った折、ハギと同じ様に根元から切除してしまった事です。これで1年間花を観賞できなくなり、茶花として飾れなくなったのです。それ以降私だけそのお茶の先生のご自宅に出入禁止となり会社に迷惑をかけてしまいました。この様な体験も今では良い思い出になっております。

ある時太い枝を途中で切ると萌芽枝がたくさん出るから全部途中から切除しろと言われてその通り作業しました。ところが翌年切除した部分から不定枝も出ず枯れています。これで怒られた事があり、なんで自分が怒られるのかと思いながら実行者だから仕方がないかと疑いもせず納得した時があり、これ以降必ず芽を見る、切口を確認する、その木の勢いを確認する等気を付ける様になり、人の言うことを素直に聞かないぞと思った事でした。これが経験だと今思っています。

やはり自分で切った場合、枯れた原因を考える事に意義があるのだらうと思う今日この頃です。

皆さん、勘違いしていませんか。太い枝を切ったら木を小さくできると。

大きくなったから小さくしたい。これを一回でやりたいというのが人間なのです。なぜすぐやらなければいけないのでしょうか。最近特に疑問を感じる事です。大枝を切除する場合樹種にもよりますが、勢いの良い木とそうでない木を判別してください。お願いします。

5年手をかけなかった仕立物の樹を1年で元に戻せないのと一緒に、数年かけてゆっくり切戻剪定、枝抜剪定、切詰剪定などの手法を用いて小さくしていきましょう。大枝を切って萌芽枝をたくさん出させた場合、夏場は枝葉が出ているのでそれほど目立たないのですが、冬の樹形を考えてみてください。樹も一年中美しくありたいのです。

昔のことわざに「急いては事を仕損じる」とある様に、枝を外す時も一緒です。今じゃなくて、5年先の樹形を考えてハサミを入れていく様にしましょう。

今の人は急ぎすぎるのではないかと思っています。皆さん一回止まって廻りを見回してみませんか。それから仕事に取り掛かる様にしていく時期が来ているのではないのでしょうか？

高い木に登って剪定する場合、命を守るのが命綱です。昔は何も装着せず、サルのごとく枝から枝へと移動しましたが、今はハーネスという道具を装着しなければ高木に登る事ができません。これを着実に装着してから作業してください。

今まで一番怖かった事は、枝が折れて落ちなかったけど宙づりになった事です。麻縄をつけていたおかげで、命が助かったと今でも冷汗が出てきます。皆さん、高木の上で作業する時は必ず命綱をつけて作業してください。慣れてくると、装着しているけどそのまま作業している人を見かけますので！昔の職人さんは、今みたいに懇切丁寧に教えてくれません。「俺の動きを見ておれ」というだけでした。

今考えると前記した様にそれぞれ感性が違うので、剪定のやり方でなく切口とか、どの程度枝を外

すか、どういう枝を抜いていくのかという事を確認しろと言う事だったのだらうと思います。職人さんの動きを追いながら、自分は今の枝は残すかとも思いながら見ていた事を思い出しています。

一番の思い出は、樹高 15 m 葉張り 10 m のマツの剪定作業の時です。当然一日で終わるわけでもなく、昼の弁当をしょって木に登り、一日木の上で作業するわけです。途中で降りることなく作業した事です。鼻漏な話ですが用を足したくなかった時、木にへばりついてやったものです。その位途中で作業をやめる時間が惜しかったのと、早く仕事を覚えたい一心だったと思います。

ある工事現場での事です。建築現場でその監督と言い争いをした事があります。なぜなら、安全靴を履いて木に登れというものでした。これだけは自分のスタイルの地下足袋の方が安全だという事を説明しても聞いてくれないので、相手に地下足袋をはかせて歩かせてみました。しかし納得させるまで1ヶ月位かかりましたが、その後その監督が地下足袋で歩いている所を見て「それみろ」と自己満足したことを思い出します。多分足が軽くて動きやすいと認識したのだらうと思いますが、今は安全のために靴も改良されている事でしょう。

以上の事を思いつくまま書いてみましたが、要は自分の思うままに枝を外し、美しい木姿をすることで世間の皆さんを喜ばせ、剪定作業はこうあるべきだと啓蒙していく事も樹木医の仕事だと思えます。

皆さん、剪定には枝を抜く程度が春、夏、秋、冬で違うという事を再認識してください。お願いします。

剪定は慣れてくると、また忙しくなると仕事が雑になってきます。これだけはやめてほしいのです。日本全国美しい木姿を作って、又その木姿を守っていく様な市民の意識改革が必要なのです。自然の中でゆっくり振り返る時を持ちましょう。

樹は正直です。人間みたいに邪な考えは持っていません。光が差す方へ枝葉を伸ばし、切除されたらそれ以上に枝葉を出すのです。人間よりずっと自然への順応度が高いのです。もう少し樹木を労わる様にしましょう。

人間も、動物も、植物も全て姿かたちは違っても一生懸命生きています。しかし皆さん、樹は人間と同じです。丁寧に扱う様にしましょう。

以下に街路樹の夏季剪定の写真を掲載しました。8月中旬に撮影したものです。さて皆さんの様な受け止め方をされますか？

冬季剪定はどの様になるのでしょうか？これが札幌市の街路樹剪定の現状です。



ニセアカシア (8月中旬写)



オオバボダイジュ (8月中旬写)

樹木の害虫図鑑と所有する害虫写真

池ノ谷 重男 (16期)

2020年9月に一般財団法人農林産業研究所発行の「花木・鑑賞緑化樹木の病虫害診断図鑑」(以下、病虫害診断図鑑という)を購入しました。当初、本州の病虫害ばかりで北海道ではあまり役に立たないと思い、値段も高いこともあって購入しないつもりでいました。しかし、パンフレットによれば、12月4日までに購入申し込みをすると1割引きとなり、代引き手数料もなしとのことで、その文句につられてつい衝動買いをしてしまいました。

そこで、日頃活用している「北海道樹木の病気・虫害・獣害ポケット図鑑」(以下、ポケット図鑑という)、「緑化木・林木の害虫」及び「病虫害診断図鑑」の掲載種数と、私が所有している写真を合わせたら何種になるかを数えてみました。

「病虫害診断図鑑」の第Ⅱ巻の害虫編は、約500種の害虫を解説しているとのことですが、索引から種数を数えると540種載っており、「ポケット図鑑」も200種とありますが、別名があるものと重複があり実際には199種、「緑化木・林木の害虫」320種で、所有写真94種を合わせると1,153種になりました。これらには重複するものが372種あり、これを除く781種が発生害虫の同定に活用できることが分かりました。

「病虫害診断図鑑」の解説によれば、農業も含めた農林害虫の既知数は、2,859種あるとのことです。農林害虫に対する所有写真のカバー率は3.3%で、農業害虫を除くともう少しポイントは上がるものと思いますが、種数にしても上述の三つの図鑑との重複を除くとたった12種にしかなりません。しかし、この写真の大半は、前職時代に撮ったものです。これからいつまで続けられるかは分かりませんが、樹木医活動の中で少しずつ増やしていき、引退するまでには、後輩樹木医が活用できるよう整理していきたいと思っています。

なお、樹木害虫が発生した場合には、写真データを添えて情報提供いただければ、充実したものとなりますので、よろしくお願いします。

図鑑の掲載種数

	種数	重複数
花木・鑑賞緑化木の病虫害図鑑	540	290
北海道樹木の病気・虫害・獣害ポケット図鑑	199	
緑化木・林木の害虫	320	
所有写真	94	82
計	1,153	372

農林害虫数と所有写真

目	種数	所有写真	カバー率
チョウ	885	37	4.2
カメムシ	813	24	3.0
コウチュウ	689	22	3.2
ハエ	258	1	0.4
ハチ	104	9	8.7
バッタ	66	1	1.5
アザミウマ	44	0	0.0
計	2,859	94	3.3

参考図書

- 一般財団法人農林産業研究所 「花木・鑑賞緑化樹木の病害虫診断図鑑」(2020)
 社団法人北海道森と緑の会 「北海道樹木の病気・虫害・獣害ポケット図鑑」(2006)
 株式会社養賢堂 「緑化木・林木の害虫」(2003)

所有写真の一部



ゴマダラオトシブミ



シロケンモン



シロシタホタルガ



オオミズアオ

*****コラム*****

シャクナゲは天然の温度計

昔、むかし、そのむかし日本一寒い町、陸別町の陸別営林署管内阿寒湖近くの国有林に真冬に調査に入った時のこと、この辺りはアカエゾマツを主とした針葉樹林が広がっています。その中にハクサンシャクナゲが点在していますが、見ると葉が針金のように細く丸まってぶら下がっているではありませんか。枯れているの！いやいや良く見ると硬く丸まり細くなっているだけでしっかり生きていますよ。葉を丸めて寒さをこらえているのです。

それまであまり気づかなかったのですが、我が家のシャクナゲを見てみると、陸別ほどではないが、やはり丸まっています。少し暖かい日中には丸まり方が緩み少し広がっています。つまり気温によって葉を丸めたり、広げたりして体温を調節しているのです。

それ以来、朝起きると庭のシャクナゲの葉の状態を見て、今日は冷え込んでいるなとか、今日は少し暖かいななどと温度計代わりにしています。

このような機能は洋シャクナゲには持ち合わせていないようです。本邦のシャクナゲの中でもハクサンシャクナゲが顕著でツツジではエゾムラサキツツジが葉を丸めて身を守っています。真冬でも樹木が息づいているのが良くわかります。(さなだ)



-6°C時の葉の状態 (ハクサンシャクナゲ)



3°C時の葉の状態 (ハクサンシャクナゲ)



-6°C時の葉の状態 (エゾムラサキツツジ)

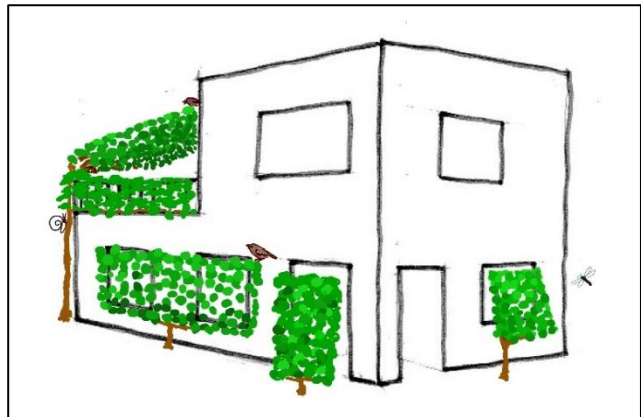
「緑のカーテン」新たな提案

北浦 みか（16期）

「緑のカーテン」は、窓の外に日よけとしてツル性植物をネットに這わせるものです。植物を利用した自然な室温調節ができ、一工夫で「夏を涼しく」する機能性と、ゴーヤなど育てやすい植物を使う手軽さが受けて、10年前くらいからこの呼び名が知られるようになりました。当時、仕事で緑のカーテンの推進に携わり、緑のカーテンに大きな魅力を感じていたのですが、同時にその魅力が十分発揮されていないようにも思っていました。それ以来、緑のカーテンの使い方を考えてきましたので、それについて書いてみたいと思います。

機能を広げる

日よけに加えて、目隠しとしても使います。人目が気になる窓辺や玄関先などでは、衝立として設置します。あるいは、緑として捉え、配置することで空間にうるおいをもたらします。地植えのものを2階に誘引して生垣や棚をつくと意外性のある景色になります。もちろん鉢植えを誘引することも可能です。



緑のカーテン導入のイメージ図

つる性木本植物を使う

一般的な緑のカーテンといえばゴーヤですが、ゴーヤは暖かい気候を好むため、安定した露地栽培が難しいところがあります。

北海道で使い易いと感じているのは、寒さに強いブドウです。木本ですので、剪定して骨格をつくることができ、春先から安定したカーテンができるようになります。また秋にはブドウが成り、紅葉し、その後落葉するので日光を遮りません。またブドウは、生食用の品種からワイン用の品種、あるいは日本のヤマブドウなど、場所や好みに応じて選択することができます。



ブドウのカーテン

都会のオアシスとして

街の中のマンションやビルでは、都会の中の小さな「緑地」「自然」として生物多様性に貢献します。幼稚園や保育所などで設置すると、身近な場所に生き物（小鳥や昆虫など）と触れ合える環境をつくりだすことができ、子供たちの環境教育の場としても活用することができます。

今後

街の中で緑のカーテンの設置をやってみたいです。または生物調査をして、多様性の検証をする機会があればうれしいですが・・・その折にはお声がけください。

「地域の赤ちゃんに木のおもちゃを贈る」

森の輪（わっこ）プロジェクトのご紹介

日月 伸（17期）

森の輪プロジェクトとは

森の輪プロジェクトは、産まれてきた赤ちゃんに木製の小さなおもちゃを贈る取り組みで、木工アーティストや保育の専門家、行政職員、幼児を持つお母さん、こどもの活動に関わる NPO の方など、私を含む数名の有志により 2019 年にスタートしました。森の輪は直径 8 cm のドーナツ型のシンプルな木のおもちゃで、にぎったり、くわえたり、なめたり、ころがしたり、乳児期の赤ちゃんの発達に合わせて、遊んでもらえます。

これまで、赤ちゃんに木の椅子や積み木、スプーンなど木製品を贈る取り組みは、多くの自治体でも行われていましたが、それらのおもちゃは、実際に使えるようになるのが 2 歳前後ぐらいからになり、出生祝いでもらっても、使えるまで時間が空いてしまうという課題がありました。森の輪は出生後間もない時期から楽しんでもらうことができます。

地域で取り組む

森の輪プロジェクトの大きな特徴は、それぞれの地域で取り組んでいただくことです。

地域の木を使い、地域で作り、地域で贈るということを大切にしており、市町村の役場に窓口になって取り組んでいただきます（一部、地域のまちづくり NPO が担っている地域もあります）。役場で予算を確保していただき、その地域で産まれた赤ちゃんにプレゼントしてもらいます。担当部署は自治体によって異なりますが、多くの自治体では、企画取りまとめを林務部門が担い、子育てを所管する保健福祉部門が贈呈を担当するというように、複数の部署にまたがって取り組みが進められています。

2020 年度末現在、道内の 10 市町村で取り組まれており、新年度以降に向けても多数の自治体から問い合わせがあり、まだ増えていく見込みです。



森の輪で遊ぶ赤ちゃん

地域の木を使う

材料とする木や樹種は、それぞれの地域で選んでいただきます。それぞれの地域で、「市町村の木」になっているものや、強風被害で倒れてしまった木、町有林で伐採した木など、それぞれの地域の思いや考えによって木を選んでいただいています。これまで、シラカンバ、エゾヤマザクラ、ヤチダモ、カラマツ、ケヤマハンノキなどで作られてきました。今後も、イタヤカエデ、ミズナラ、カシワ、オオバボダイジュなど様々な木で製造される予定です。樹種ごとに製品のさわり心地や質感、風合いが異なるので地域ごと

にそれぞれ違った森の輪ができあがっています。

地域でつくる

森の輪を加工、製作するのは地域の職人さんや工場です。森の輪はシンプルな形状で、簡易な工作機械の手作業でも製作できるものですので、それぞれの地域にある工場などでも製作していただくことができます。現在、道内外の7工場、職人さんとの協力体制が得られており、地域によって近い場所の加工場を紹介できるほか、今後、協力して下さる加工施設も増やしているところです。



森の輪に使う樹種は地域で選り調達してもらいます（上士幌町提供）

木との初めての出会い

森の輪の取り組みには、赤ちゃんが初めて木にふれる機会を大切にしたいという願いをこめています。また、木になじみがない保護者の方にも木という素材にふれ、木製品の良さを知っていただくきっかけになればと願っており、ご家庭でも大切に使用してもらえるよう、キズや汚れがついた時のお手入れに使える紙やすりをセットにしています。

広がる森の輪の取組

森の輪プロジェクトが広まるにつれ、自治体ごとに、特色ある取り組みも生まれています。ある地域では、地域で親しまれてきた学校が廃校になり、その校庭で育っていたサクラの木を材料にして森の輪ができました。また、ある地域では、新しく建てる学校の校舎に使われる地元産のシラカバ材の一部から森の輪が作られました。そのシラカバの森の輪で遊んだ赤ちゃんが、数年後には同じ木が校舎に使われている小学校に通うこととなります。また、森の輪を入れる袋に地域の手芸サークルの方々がひとつひとつ刺繍を入れて下さる地域や、林業推進員の方々が、樹種選定、選木から伐採、加工、贈呈まで全工程を通して携わるというユニークな自治体も出てきました。



森の輪の袋には紙やすりが入れられています

樹木医には、樹木の診断・育成・保護など専門的、実践的な役割があることはもちろんですが、森林や樹木と人々をつないでゆくことも大切な役割であり、これからますます求められていくことだと思っています。森の輪プロジェクトは、乳児期に赤ちゃんとその保護者が木のおもちゃにふれることで、樹木や自然を身近に感じたり、その木が育った地域の森林への愛着などにつながる取り組みであり、この取り組みをきっかけに、地域の樹木や森を守り育てていくことの大切さを知ってもらいたい。樹木医として、そんな願いをこめて、このプロジェクトに関わらせてもらっています。

石狩市はまなすの丘公園砂嘴の地形と植生の関係

多田 光義 (19 期)

石狩市の石狩川河口左岸に約 1 キロほどの砂嘴（さし）があり、多種の海浜植物の美しい景観が



見られることで有名です。ハマボウフウ、ハマニガナ、ハマエンドウ、エゾカワラナデシコ、ハマニンニクなどの草本と、他の地域と比べて樹高が低めで見た目が可愛いと評判のハマナスなどで構成されています。

図 1 はまなすの丘公園マップ：A-B 断線位置

図 1 は海浜植物保護センター作成によるはまなすの丘公園マップで、砂嘴の形と下図の AB 断面図の位置を表しています。このうちハマナスの樹高が低いのは強い海風圧で樹高が制限されているのが主な要因といわれています。しかし、ハマナスが生育している場所は、砂嘴の断面で見ると砂丘の凸部付近に多く、凹部には少ないように見えます。海風圧だけがハマナスの生長と分布の制限要因ではなく、他にも制限される要因があるように思えました。砂嘴という形だけを見ると「細長い均一な砂質土の堆積構造の上に海浜植物が一定の割合で生育してもの」と考えていましたが、実際の石狩砂嘴は石狩湾側からの海塩風、堆砂、飛砂で変化する微地形と、石狩川の運搬土の堆積と浸食及び水位変動による砂嘴の地下水水位の変化を受け、思った以上に複雑な環境を構成している場所であると改めて認識しました。

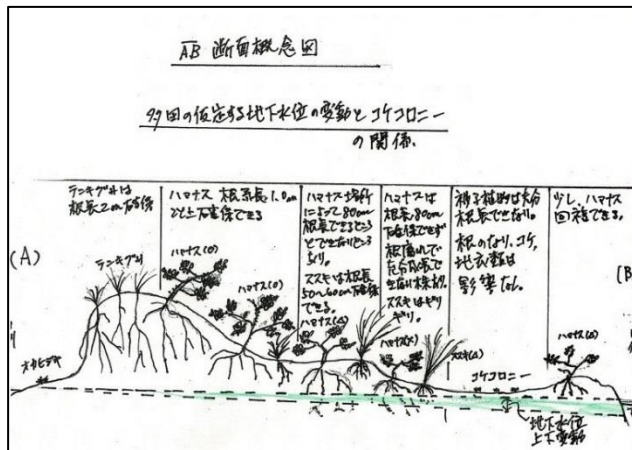


図 2 A-B 断面概念図 地下水水位変動とコケコロニーの関係

ハマナスの根系は刈住昇著「最新樹木根系図説」では成木の根系を低木・ボケ型・小径のひも状垂下根型で垂直分布は深根型とし、樹高 1.2m で根系最大深さ 80 cm の例を挙げています。このことは強海風圧が少なく、十分な土壌厚さが確保できる立地でははまなすの丘公園のハマナスも今の 0.4 m 程度の樹高でなく 1.2 m 程度の樹高を確保できる可能性があるような気がしますが、現地の風当たりが少ない凹地には H0.4m の株も少なく、深根性のテンキグサ（ハマニンニク）もまた少なく、ほふく型のハマニガナが多くなり、さらに深い凹地の

中心部では根系をもたずかろうじて仮根で地表にしがみついているような蘚類の一種のエゾスナゴケがかなりの生育面積を確保しています。

このように絶えず変動する石狩川の水位に連動するような砂嘴の地下水水位の上昇では、浸漬による障害で根長が制限され、逆の水位の低下では保水力の弱い砂質土の乾燥による障害に対応するため根長をできるだけ伸ばすことが必要になる、という真逆の環境に適応できる海浜植物の中でも更に小型化

などの柔軟な適応をせざるを得ない、砂嘴のスペシャリスト海浜被子植物群があります。
また、その逆に原始的体制しか持たない蘚類のエゾスナゴケや地衣類のハナゴケなどローテク・ゼネラリスト群が少ない生育面積を占めることができる、砂嘴という環境は非常に面白い場所でもあると思います。



写真 はまなすの丘公園砂嘴のハマナス（左：開花状況 右：結実状況）



写真 はまなすの丘公園砂嘴のエゾスナゴケ（右：拡大）



グイマツをめぐる考察と本別海^{ほんべっかい}の物語〔前編〕

加藤 真樹 (24 期)

前回の論文 (樹守No.29) は落葉松としてカラマツ [*Larix kaempferi* (Lamb.) Carrière]*1 を取り上げたが、もう一つ北海道には同じ仲間としてグイマツ [*Larix gmelinii* Rupr. ex Kuzen. var. *japonica* (Maxim. ex Regel) Pilg.]*2 がある。カラマツと似ているが、葉が短く、背もあまり高くない。枝の張り出し方も水平に近く、年老いたものだと垂れ気味になる。生育する環境は海辺や湿原などで潮風にも耐える。

世界的にカラマツ属 [*Larix*] はシベリアなど北方の亜寒帯や中緯度の高山に分布し、日本列島はその南限とされている。今ではカラマツは長野や山梨など本州、グイマツは樺太や択捉・色丹など南千島に分れて生育するようになった。ただ共に寒さに強く、なぜ北海道に自生していないのか不思議である。特に後者は、地図を見ると生育する両地域とも宗谷や根室から指呼^{しこかん}の間であり、それほど環境が異なっているとは思えない。

道内のグイマツで最もよく知られているのは厚岸国泰寺にあるもので*3、近藤重蔵が寛政十 (1798) 年に手植えし、今では幹周 2m、高さ 12m ほどになっている。幕府がロシアの南下に危機感を抱き、重蔵^{もがみとくない}や最上徳内などを蝦夷地に派遣し、国境がはっきりしない南千島を調査させた。重蔵は択捉島にあったロシア人が建てた十字の塔を撤去し、その代わりに「大日本恵土呂府」の標柱を建てた。その帰りの途上で色丹島に立ち寄って、グイマツの苗を厚岸に持ち帰ったという。またそれ以前では、明和 9 (1772) 年に松前藩が藩船で千島方面を探検した時、色丹島から持ち帰ったグイマツを狩場神社に献樹したものが*4。彼らがなぜグイマツを持ち帰り植えたかといえば、それはやはり異国の手土産として相応しかったからだろう。

ではグイマツは北海道の地に縁のないものだったろうか。開拓以後、カラマツが北海道に運ばれ、十分生育できることが分り、多くの地域で植林された。カラマツは生長が速く、大量に植林されたが、問題があった。それはエゾヤチネズミによる食害だった。頭を抱えた関係者たちは、それまで道内の実験、研究結果をもとに耐鼠性が強いグイマツとカラマツを掛け合わせることを考えついた。そしてその難問を片付けることができた。こういう事例を見るとやはりグイマツは外国産なのかと思わすが、実はそうではない。悠久の歴史において北海道にグイマツが自生していた時期がある。

「北海道の自然史」小野有五・五十嵐八枝子著によると、約 2 万年前は最終氷河期中で最も寒冷な時期で、北海道は年平均気温で今より 8℃程度低く、道央の上川盆地にはキンポウゲ科、バラ科などの草本類やシダの仲間と周極要素のコケスギランからなる草原にグイマツやハイマツなどがまばらに生える草原環境 (疎林ツンドラ) が形成されていた。また道南ではグイマツを主とする亜寒帯針葉樹林が展開していた。

山崎次男氏の「北海道洪積世グイマツ分布」(京大演習林報告 第十七号 1942 年) には、「洪積世 (約 170 万年前～約 1 万年前) における蝦夷島の森林は現今の日本北樺太の森林状態と同じであり、当時の気候もまた然りと考える」とあり、道内の湿原地帯にグイマツが分布していたと述べている。

また北海道各地の泥炭から調べられたデータでは、4 万年前から 9600 年前までグイマツの化石木が発見されている*5。

このように述べると遠い過去の話で、想像の世界でしか理解することができないかと思われるが、

北海道に生育していたグイマツの実際の姿を見ることができる。とは言っても、やや別な姿ではあるが…。

昭和 59(1984)年 5 月 5 日、登別川の左岸で行われていた高速道路建設現場で黒く直立した塊がいくつも発見された。さらに深く掘るとそれらは太く縦長のものと分り、専門家の調査で約 4 万 4 千年前の樹木、つまり化石林とされた。当時クッタラ火山*6 の大噴火で火砕流が降り積り、火口から約 4 km 離れたこの地点の森林も相当な高さまで埋まることとなった。そしてその熱が木々を直立したまま炭化させた。クッタラ火山の噴火後もいくつかの火山が数回にわたり爆発し、さらに幾層もの噴出物が重なり、炭化林は地中にすっかり埋もれた。それが今回の道路工事で深く地中が掘られ、その過去の遺物であった森林が数万年の深い眠りから呼び覚まされたこととなった。発見された黒く太い幹は全部で 57 本。長いものは 7～8 m、直径 40 cm で、かつての樹高は 20m を超えていただろう。樹木の種類は、トドマツ、エゾマツ、アカエゾマツ、そしてグイマツの 4 種類が確認され、その当時の風景は現在のシベリア森林地帯と似ていたようだ。この時発見された炭化グイマツの実物(写真 1)を、今、北海道博物館で見ることができる*7。現在でも冬の北海道は寒い、それよりさらに厳しい気象条件がこの大地を覆っていた。遠い昔とはいえ、そんな時代*8 が数万年と続いたことも驚きだが、やがてグイマツが主要な森林樹木だった環境が終わりを告げることとなる。

「北海道洪積世グイマツ分布」はこう続く。

—グイカラマツは蝦夷島では沖積世(約 1 万年前～現在)に入ると共に絶滅し、その原因は日本洪積世の終り、房州に沼の珊瑚礁のできた極く暖かい気候になった頃、蝦夷島も温くなりその南部にはミズスギ(水杉)さえ生ずるようになったためグイマツの如き寒冷なる泥炭地の特殊条件の所に生育するものは他に圧倒されたのである(要約)—

そして、その後道内から姿を消したようである。

やがて縄文時代が始まり、主に北は樺太、南は本州から人々が北海道(蝦夷)に入り、各地で生活を始めるようになった。時として様々な集団、縄文人、アイヌ人、オホーツク人、和人などが現れ、それぞれの文化を築き、大地の記憶に刻まれることとなった。彼らは局地的に小さな集団で暮らしながらもその交流は行われ、時に影響を受け、時に吸収されて来た。そして、その流れの中で大きな転機となったのは松前藩の誕生だろう。16 世紀当時、彼らが支配するのは道南だけであり、その他の土地についてはアイヌが自由に暮らしを営んでいた。従って和人の活動範囲は狭く、道内その他の事情についての知識は少なかった。道東や千島のアイヌは活発に交易を行い、松前また東北まで足を伸ばしたが、松前藩は交易品には強い関心を示したが、交易地の環境については疎かった。それでは幕府に蝦夷地の支配者として合わせる顔がないので、アイヌの助けを借りながら道内を調査し始めた。そのあまり熱心とは言えない探検・調査活動において、千島列島まで足を伸ばし持ち帰ったのが先の狩場神社のグイマツではないか。その案内板では「当時、純粋種のグイマツは大変珍しかったことから、安全に航海できたお礼に奉納した」とある。かつて—数万年前—は、道南もグイマツを主とする亜寒帯針葉樹林に区分されていたが、もちろんそんなことを覚えている人はいない。松前から遠く離れた厳しい気象条件の千島列島に自生する落葉松は、異国の手土産としてとても価値があっただろう。ただ政治の世界では、大国ロシアの足音はすぐそばまで迫っていた。

その数年後の 1778 年・1779 年にロシアのシャリバン*9 らが根室とアッケシに渡来し、通商を求めた。松前藩は幕府に報告しなかったが、大きな問題とはならなかった。しかし江戸にも激震が走ること

となる。1792(寛政4)年ロシア使節アダム・ラクスマンがエカテリーナ号で根室湾の茨散ばらさんに現れた。西別の番人がアイヌたちにどこの船なのか確認させようとしたが、その大砲が放つ音に恐れ慄くだけだった。逆にロシア側からボートが下ろされ、茨散に上陸して来た。彼らは通交や通商を求めたが、その場の番人らでは相手にならない。その詳細は松前藩に伝えられ、また幕府にも届けられたが、彼らの本音は時間稼ぎをして嵐が収まるのを待つだけだったろう。鎖国下の日本ではそれが精一杯の抵抗だった。

ただ、この事件は当時の蝦夷がどのように扱われていたかを知る格好の資料となる。江戸幕府は海外との交易や通信を長崎の出島だけに制限し、厳しく管理していたが、ラクスマンは根室に住居を建て、8ヶ月も暮らしている。当時の老中松平定信は手記『魯西亜人取扱手留てどめ』でラクスマンの大胆不敵な行動を次のように分析している。「日本の地ではないので、追い払われないことを知っているから根室で知らせを待つというのだ」と記し、幕府の最高責任者である定信が、江戸から遠く離れた根室を日本国の領地とは考えていなかったことを物語っている*10。

その頃江戸では民衆の間に強い危機感が広がり、蝦夷地や北辺に対する関心が急速に高まっていた。未知の領域を調査しようと和人が次々と渡海した。幕府西丸同心画工 小林源之助(豊章)は寛政3(1791)年、最上徳内と共に松前に来て、さらに樺太へ渡り、クシュンナイまで踏査した*11。この時に観察した植物をスケッチし、彩色したものを「蝦夷草木写生図」ならびに「蝦夷草木図抄」として出版した。そしてこの中に樺太ナヨロ(南樺太中部)で写生したグイマツが載せられている。そして「クイ」も記入されている。グイマツという名はアイヌ名クイから来ている。

その後は北方警備の重要性から幕府に派遣された近藤重蔵の話とつながるが、時代が幕末から明治に移ると、政府の役人や商人ではなく、一般の人々(道東に移住して来た漁民たち)も同じようにグイマツを色丹や択捉から持ち帰り、植栽するようになる。尾岱沼おだいとうでは、「蠟山ろうやまの松」として樹齢130年を越し、高さ7m以上のグイマツが有名だ。先代の蠟山吉太郎氏がホタテ漁で訪れた色丹島で3本のグイマツを持ち帰り、2本は野付神社に寄与し、残りの1本を自宅に植えたものが今も健在だ*12。



写真-1 グイマツ炭化木



写真-2 本別海一本松(グイマツ)

そして、そうした手植えのグイマツに本別海一本松(写真2)がある。別海町の指定文化財で、西別川河口にひっそりと佇んでいる。今その周辺は草原が広がっているが、明治の初め、この辺りに住みついた漁民たちが植えた数本のうち1本だけが生き残った。樹齢は140年を越しているだろう。冬は雪で周りがすべて埋まり、白い地平線に屹立し、渡り鳥の休憩所になっているようだ。オジロワシが樹冠に留まる姿が写真家に好まれている。[以下次号に続く]

注釈および文献

- *1 「スタンダード版 APG 樹木図鑑」(北隆館) 種形容語 *Kaempferi* は江戸中期に日本に来たケンフェルの、意味。
- *2 「同上」 種形容語 *gmelinii* はドイツの分類学者 K. C. グメリンの記念名である。
- *3 p57 「2018 北海道の巨樹・名木 150 選—樹木医が巡る巨樹・名木の世界—」 今田秀樹著
- *4 p116 「同上」
- *5 p1 「花粉化石から探る森林の歴史」—北海道の3万年間— 五十嵐八枝子 日本林学会北海道支部論文集 第38号
- *6 「クッタラ火山群は、約8～4万6千年前までの期間に複数の火口で火砕流を伴う大規模な噴火を繰り返し、約4万4千年前までの活動により直径3kmの円形のカルデラとなりました(倶多楽湖)。地獄谷などの登別火山は、クッタラ火山の後カルデラ火山で、現在も噴気や熱水活動が続いている」登別市郷土資料館『登別化石林はどうやってできたの?』より
- *7 炭化林のグイマツは北海道博物館、トドマツは登別市郷土資料館に展示されている。
- *8 そもそも当時北海道やカラフトはシベリア大陸と陸つづきだった。間宮海峡、宗谷海峡はまだ陸でつながっていた。北半球は厚い氷河におおわれていたため、その分だけ海水面が低下し、現在の海水面より140メートルもさがっていた。北海道や樺太が大陸から切り離されたのは約1万3千年前だろうと考えられる。
- *9 ドミトリー・ヤコウレヴィチ・シャリバン。イルクーツクの商人で同地商業協同組合長。
- *10 p39 「流亡 日露に追われた北千島アイヌ」 小坂洋右
- *11 p18 「蝦夷地の外人ナチュラリストたち」 村元直人 当時、北海道と樺太の区分がはっきりしていなかったため、両方をあわせて蝦夷と呼んでいた。
- *12 ホームページ「別海町」町指定文化財より

ヤドリギが北海道の巨樹・名木に仲間入りをした日？

今田 秀樹 (25 期)

はじめに

2015 年、私は樹木医になってから北海道の巨樹・名木を見る機会が多くなりました。しかしこれらの樹に寄生しているヤドリギについてはあまり興味がありませんでした。言い換えれば、私の中では北海道を代表するカツラやミズナラなどの巨樹・名木はメジャーな存在で、ヤドリギはマイナーな存在でした。ところが昨年、街路樹診断で見つけた 1 本? のヤドリギがきっかけとなり興味が湧いてきたので紹介します。

1 街路樹診断で見つけた幸運なヤドリギ

2020 年 6 月 17 日、札幌市白石区で街路樹診断をしていたとき、ナナカマドの幹に小さなヤドリギを見つけました (写真 1)。たぶん鳥がヤドリギの実をどこかで食べ、糞とともに出てきた種子が偶然このナナカマドの幹についたのだと思います。普通の樹の種子であれば間違いなく地上に落ちていたと思う場所に、ヤドリギの種子は驚異的な粘りで、しっかりとナナカマドにくっついて発芽したのです。写真のように種子が幹に張り付いてから最初の葉が開くまで 3 年以上かかるそうです。もし地面に落ちていたら、間違いなく繁殖はできなかつたでしょう。まさに幸運なヤドリギだったのです。一方、ナナカマドにとっては迷惑だったかもしれません。



写真1 幸運なヤドリギ

ナナカマドの診断結果は「要観察」だったので、何もしなければしばらくの間、伐採されることはないと思います。ヤドリギをこんな身近なところで見るとはめったにないことなので、私にとっても幸運なことでした。今後、ヤドリギがどう成長していくか興味が湧いてきたので観察を続けていきたいと思っています。

2 木を見てヤドリギも見て森も見る

昨年、新型コロナウイルスの感染拡大防止のため 3 密 (密閉、密集、密接) を避け、人の多いところには行かないように意識していましたが、8 月に入り樹木診断の仕事がほぼ落ち着きはじめると、どこか遠くに出かけたくくなりました。しかし、道内では札幌の感染者が多く遠くには行けないと思い、家の近くで人があまり集まらない場所、そしてコロナに負けない体力づくりができる場所と思い、藻岩山 (標高 531m) に登りながら樹木観察をすることにしました。



写真2 藻岩山のヤドリギ

8 月の夏真っ盛りの藻岩山登山です。慈恵会病院側の登山口から山頂まで約 3 km、私の足で登り 1 時間弱、下りはゆっくりと樹木観察や写真撮影などの道のりです。

8 月には緑一色だった山も 10 月中旬には紅葉し、11 月になると葉が落ちて見通しが良くなりました。すると夏にはわからなかったカツラやハルニレなどの大きな樹が現れ、太いものでは幹周が 6 m を超えるカツラが見られました。また、見通しが良くなったことでヤドリギも見られるようになりました (写真 2)。ヤドリギは、「これからは私の季節よ」と言わんばかりに緑色の玉をハルニレの樹上に輝かせていました。8 月から十数回藻岩山を登ってきましたが、夏の間はヤドリギの存在にまったく気がつきませんでした。「木を見て森を見ず」ではなく、「木を見てヤドリギを見ず」でした。これからは「木を見てヤドリギも見て森を見る」樹木医になるよう努めます。

3 都会の真ん中で暮らすヤドリギ

街路樹や藻岩山でヤドリギを見つけたことで興味が湧いてきたので、札幌の中心部にある大通公園にもヤドリギが見られないかと思い、昨年11月24日、1丁目のテレビ塔をスタートして13丁目の札幌市資料館裏まで往復して調べることにしました。往路は大通公園の南側、復路は北側を見て歩きました。南側にヤドリギは発見できず、北側の復路に向かいました。そして、12丁目のシナノキに丸い緑色をしたヤドリギを発見しました。「都会の真ん中で暮らすヤドリギ」です(写真3)。大きさは60cm前後かと思いますが、何とも優雅にまるまると大きな姿で札幌の一等地に暮らしていました。また、同じ12丁目のイタヤカエデとシナノキにも都会暮らしのヤドリギを見ることができました。



写真3 都会の真ん中で暮らすヤドリギ

4 「2018 北海道の巨樹・名木150選」に写っていたヤドリギ

12月に入り雪も降りだし外出する機会も少なくなった頃、改めて私の出版した本「2018 北海道の巨樹・名木150選」を見てみると、ヤドリギがこの本の78ページにある「義経神社の栗」(写真4)、更に「池売りのニレ」(P80)、「茅部の栗林」(P94)にも写っていました。

当時、私は巨樹・名木の事ばかり考えていたためヤドリギの存在すら気にかけていませんでした。私にとってヤドリギはマイナーな存在だったのでなおさらです。しかし、ヤドリギは私の意に反して、この本に寄生し既に3年前にメジャーな存在となっていたのです。

ひょっとしたら、過去3回出版(2016 樹守 No25 真田勝ほか参照)された「北海道の巨樹・名木」(1993)などの本にもヤドリギが写っていないかと思い調べましたが見つかりませんでした。このことからヤドリギが北海道の巨樹・名木に仲間入りをした日は、私が本を出版した2018年11月22日のようです。こうして調べていくと、ヤドリギは意外と身近なところで見られることがわかりました。

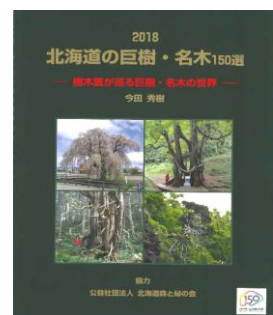


写真4 巨樹・名木に写っていたヤドリギ

おわりに

ヤドリギ(宿り木・宿木・寄生木)は、ビャクダン科ヤドリギ属に属する植物で、ヨーロッパや西部・南部アジアが原産地です。寄生植物で地面には根を張らず、他の樹木の枝の上などに生育する常緑の多年生植物です。ヨーロッパなどに分布するセイヨウヤドリギ *Viscum album subsp. album* と、日本のヤドリギ *Viscum album subsp. coloratum* とでは種類が異なり、セイヨウヤドリギの実は大きくて白く、日本のヤドリギは実が淡黄色です。まれに橙黄色になるものがあり、アカミヤドリギ *Viscum album subsp. coloratum f. rubroaurantiacum* と言われています。葉だけではヤドリギとアカミヤドリギを区別するのは難しいようですが、本州にくらべて北海道にはアカミヤドリギのほうが多いようです。

今回、私が見たヤドリギには実がついていなかったもので、どちらのヤドリギかは不明でした。ヤドリギはヨーロッパや日本でも神聖なパワーをもつ縁起のよい植物とされ、その花言葉は「困難に打ち勝つ」と言われています。2020年1月に日本で新型コロナウイルス感染者が出て、いまだに感染拡大が収まらない状況ですが、ヤドリギの花言葉のように「困難に打ち勝つ」日が早く訪れることを切に願うばかりです。

2020 樹木医活動の報告

木戸口 和裕 (27 期)

2020 年 (令和 2 年) は、「コロナ禍」であったが、私の樹木医活動は少人数・屋外作業で行うことが多く、いわゆる「三密」が回避できたことは、せめてもの救いであったと思っている。

私は、建設コンサルタント業である国土防災技術北海道㈱に勤務し、主に緑に関する技術営業や CSR 活動を担当しているが、その内容は必然的に樹木医色の強い企画が多い。この紙面を借りて、当社の CSR 活動を通して、2020 年における主な樹木医活動を振り返ることとする。

なお、紙幅の関係から、胆振東部地震災害地での緑化試験、松前町での孟宗竹林の間伐は別の機会に報告することとする。

1 スマート林業への挑戦・ドローンによる植物活性剤散布

2020 年 6 月 4 日 (木)、当社は、空知総合振興局との覚書に基づき、当別町所在の道有林空知管理区内の 2019 年 (令和元年) トドマツ植栽地において、ドローンを活用して、フルボ酸の植物活性剤「フジミン[®]」(以下「フジミン」という。)の希釈液を散布する試験を行った。

植栽後 1 年のトドマツに、フジミンの希釈液を 2 m 程度上空から散布することで、初期成長を促進して、下刈り期間を短期間 (例: 7 年 → 4 年) にすることが可能かを検証するための試験である。造林作業の省力化、労働安全の確保、ICT 技術を活用した生産性の向上のため、ドローンを活用した新たな森林造成技術の確立、スマート林業への一助を目指したものである。

フジミンには、土壌中のミネラル (肥料分) を樹体内に吸収されやすい状態で受け渡す「キレート作用」があり、光合成量を高めることができる。

また、pH 緩衝能もあるため、フジミンは、東日本大震災の津波による塩害地や JICA の SDGs 事業で南米パラグアイの強アルカリ性土壌等の農地の土壌改良に使用されている。私は、このフジミンが世界の食糧危機を救う一助となる製品ではないかと期待している。

今回、5 L を運べるタイプの農業用ドローンを使用した。霧状に散布すると風に流されてしまい、トドマツの上部に散布されないことから、雨粒状に散布した。

一度にもっと多くの材料を運べるよう、ドローン大型化・汎用化が必要なことや、1 回のフライトで、リチウムイオンバッテリーが 12 分程度しか持たなかったため、バッテリーの大容量化小型化軽量化も必要であることなど、多くの課題があると感じた。



写真-1 ドローンによるフジミン散布状況

今後、2年散布、3年散布を行っていき、1年散布も含めてトドマツの成長量を調査していくこととしている。

なお、詳しくは、次の URL の当社 CSR ホームページ記事のとおり。

<https://jce-hokkaido.co.jp/csr/1369/>

2 「北海道さくらセミナー・2020」の開催企画、そして延期

「北海道さくらセミナー2020」は、北海道さくらの会（会長 富原亮）、公益社団法人北海道森と緑の会（理事長 堀達也）、NPO 法人北海道に森を創る会（理事長 石子彭培）、そして私の所属する国土防災技術北海道㈱（代表取締役 小野由紀光）の4者で構成している実行委員会が企画している。

同セミナーの開催モチーフは、①2020年10月に第44回全国育樹祭が北海道で開催されること、②2020年が北海道植樹の日・育樹の日条例の施行から1周年を経たこと、これらを記念するとともに、③北海道では多くの植樹イベントが行われ、「さくら」はそのうち最も植栽されている樹種であるものの、その育樹には大きな課題があること、などを踏まえて、「さくら」を通して育樹の大切さを普及することを目的としている。

当初は、2020年3月19日に札幌市で開催することとし、1月7日開催の林業人新年交礼会を皮切りに、標記セミナーの参加者を広く呼びかけていた。

しかしながら、新型コロナの関係で、開催日を同年6月25日に変更し、その後、6月25日の開催も断念し、開催時期を定めない延期を行った。同年6月26日付けで第44回全国育樹祭の1年延期が決定されたことを踏まえ、同年7月に2021年（令和3年）夏期を目途に開催予定とすることとして、現在に至っている。より安心安全な中で開催したい、第44回全国育樹祭のプレイベントとして、「育樹」の普及を図りたい、との思いからの延期である。

なお、講演は、「北海道のサクラ類の樹勢回復について」との演題で、日本樹木医会北海道支部長（依頼当時は副支部長）の金田正弘樹木医（11期）に依頼している。

当該セミナーは、金田正弘樹木医の技術を学ぶ機会となるが、むしろ「樹木医としての生き方」を学ぶ機会になるのではないかと考えている。

また、講演の前に、『北海道のさくら』に関する林業試験場におけるこれまでの取り組み」との演題で、林業試験場道東支場長の脇田陽一氏に報告を依頼している。同氏は、桜をはじめとする樹木の香り研究の第一人者で、シラカバ花粉のアレルゲンの分析、クロミサンザシのDNA分析などの研究も行い、振動を用いた「樹木内部欠陥簡易診断装置」の開発にも関わっている方である。

樹木の香りで食品の付加価値の向上を図るなど、樹木という地域資源を地域振興に生かす取り組みを行っているので、樹木医活動の領域を広げる大きなヒントをいただける報告になるのではないかと考えている。

「コロナ禍」ではあるが、状況が許せば、当該セミナーを予定どおり、本年、夏には開催したいと考えており、開催日決定次第、日本樹木医会北海道支部事務局に開催のお知らせをするので、興味のある方は、参加いただきたい。

3 旅雑誌「H0」で松前の桜に関する情報提供

旅雑誌「H0」の2020年5月号「ときめき道南春の旅」に、「木戸口樹木医が語る浅利政俊氏と子どもたちが育てた世界で愛される松前桜のものがたり」と題した内容が4ページにわたって掲載された。

私が「HO」誌記者から取材を受け、写真や経緯などの情報を提供したものがもとになっている。伝えたかった内容は次のとおり。

- ①松前町の松城小学校の教員であった浅利政俊氏は子どもたちとともに多くの桜の栽培品種（以下「品種」という。）を創生したこと。
- ②浅利氏は、太平洋戦争での贖罪の意味をこめて、園芸大国の英国へ桜 58 品種を送付した。このうち、56 品種が活着し、19 品種が、王立園芸協会（RHS）から優れた品種であると高く評価され、AGM（Award of Garden Merit）を受賞している。日本文化の特徴である「多様性」が評価されたものとする。
- ③英国からヨーロッパ各地へ、そして世界へと松前桜は広がっている。

当該「HO」誌では、AGM 受賞桜のうち、早咲き（「紅豊」など）、中咲き（「幸福」など）、遅咲き（「富貴」など）別に各 3 品種ずつ、計 9 品種が掲載されている。

AGM 受賞桜以外で、私がお薦めの桜として早咲き（「桑島桜」）、中咲き（「万里香」）、遅咲き（「薄紅深山」）の 3 品種も掲載されている。

2020 年は、「松前さくらまつり」が中止になったが、本誌を片手に AGM 受賞桜などを見ていただける日が早く来ることを願うばかりである。



写真-2 AGM 受賞桜「紅豊」(*Prunus lannesiana* cv. 'Beni-yutaka')

4 幹回り北海道一の大山桜・浦河町の「オバケ桜」

2020 年は、松前公園の桜、新ひだか町二十間道路桜並木、室蘭市幌萌の大桜、浦河町「オバケ桜」等の桜類のほか、当別町開拓記念木のイチイ、和寒町ふれあいの森のシラカバ等の樹勢回復を行った。ここでは、浦河町の「オバケ桜」についてのみを紹介する。

2020 年 11 月 18 日（水）、浦河町西舎の「優駿さくらロード」の奥にある日本中央競馬会日高育成牧場（以下「JRA」という。）の所有地内にある「オバケ桜」の樹勢回復措置を行った。

当該桜は、金田正弘樹木医から昨年の「樹守」に既に紹介されている。同氏から、「浦河町には、『優駿さくらロード』の桜以外にも観光資源となりうる貴重な桜がある。」との話がきっかけとなって、観光資源としてのブラッシュアップを図る目的で CSR 活動を企画した。金田樹木医には私どもの活動について地元調整を行っていただき、感謝申し上げます。

当該樹勢回復措置の参加者は、金田樹木医及び同氏御子息、地元の協力会社(株)グリーンマインド 6 名、浦河町 1 名、当社から 2 名の計 11 名である。

「オバケ桜」は、J R A所有の草地内にある、幹周 490cm、樹高 15.6m のオオヤマザクラ (*Prunus sargentii* Rehder var. *sargentii*) の巨樹で、環境省の「巨樹・巨木林データベース」に登録済みであり、その登録ベースで見ると、オオヤマザクラの幹周では、全国第3位、道内第1位となっている。

この桜の名は、浦河町の要請を受けてJ R Aが命名しており、日高幌別川の支流オバケ川がすぐ近くにあるため、生立場所を示すとともに、この桜の巨大さも感じさせるという、絶妙なネーミングであると思われる。

2018年に、この桜の存在と観察のための周辺整備の話が出て、2019年11月に金田樹木医と協力会社の方々が、サクラ類てんぐ巣病 (*Taphrina wiesneri* (Rathay) Mix) 罹患枝の除去や根の周辺のササの除根、施肥を行い、桜の周辺に木製の立ち入り防止柵が設置されていた。

今回は、本格的な土壌改良として、木柵の内外に縦穴式土壌改良法等を行った。縦穴の充填材には、「フジミン」や稚内珪藻土を使用している。アースオーガによる縦穴の掘削では、ササの根が何度もじゃまをし、オーガのキックバックが何度も生じた。ササの退化には、あと3年程度は必要と考えている。



写真-3 オバケ桜 (2020.05.06)

J R A事務所は、旧農林水産省の日高種畜牧場の敷地にある。この日高種畜牧場は、戦後間もない昭和22年(1947)に開設された「農林省日高種畜牧場」が嚆矢で、その前身は、明治40年(1907)年の「日高種馬牧場」まで遡る。内閣直属の馬政局が、軍馬の資質向上のための種馬の改良繁殖を行うために「日高種馬牧場」を開設している。

J R A事務所の敷地内には、「西舎の大霞」「寄り添い桜」といった霞桜、北海道では珍しい「枝垂桜群」ともいふべき秘宝があり、これらも同様に今後ブラッシュアップしていく必要があると考えている。

浦河の旧日高種馬牧場と新ひだか町の旧新冠御料牧場、この二つの牧場は、今日の日高管内の軽種馬生産の発展の礎になり、その歴史の生き証人として「浦河優駿さくらロード」や「オバケ桜」などや「二十間道路桜並木」が残されている。これらの桜を保全していくことは、地域の観光振興につながるものと考え、当面、C S R活動を続けていきたいと考えている。

なお、詳しくは、次のURLの当社C S Rホームページ記事のとおり。

<https://jce-hokkaido.co.jp/csr/>

私の仕事

豊島 幸信 (29期)

私の勤めている会社は、緑化樹木、花木の生産卸を営んでいます。約30年前に当社の現会長が創業した会社です。会長は創業前も樹木に携わる会社に20年以上勤めていました。江別市角山にあり、遠軽に本社を置いていた佐々木産業という会社でした。その当時会長は、現在樹木医の養成認定を行う日本緑化センターの職員も兼務していました。私は一昨年に樹木医の認定を頂きましたが、そのはるか以前からご縁があったようです。

生産・卸の仕事は現在、篠路の事務所周り・江別角山・遠軽の苗畑で養成しています。その苗畑も一部は樹木圃場として40年を超える箇所もあり、気候の変動はもとより、長年の使用による土地の様々な老朽化、肥効が悪くなった、病害虫の発生期が読めなくなった、増えたなどがあり生産・養成改善のため樹木医の資格取得を目指しました。

資格取得のために得た知識は大変役立つものばかりで、現在苗畑改善のため色々画策中です。苗畑での生産卸の品目は主に公園や街路樹、マンションや商業施設の外構に使用される緑化樹木で、それより少なく、庭木となる花木や若干の宿根草なども取り扱っています。

緑化樹木は、山林種苗の生産者が取り扱う樹木の規格が0.3~1.0m程度であるのに対し、主に注文が多い規格帯は樹高0.5~5.0m程度で取引先から注文や移植依頼があり、掘り取り運搬が可能であれば最大樹高10m程度までは取り扱います。

近年、生産・増殖については、難度の高い樹種や方法はあまり行わなくなりました。その理由を簡単に述べてしまえば、「生産・増殖の難しいものは利益が出せない」。私個人としては魅力的な樹木の増殖を試行錯誤するのは楽しいのですが、野菜や花と違い、樹木の増殖は経費と時間（特に）がかかってしまいます。樹木の販売単価は10年前から見れば全ての品目が総じて1.5倍以上になっています。反して出荷量は10年前の1/3となっており、売り上げは大きく落ちています。そこに労賃や資材単価の上昇がのしかかり利益率が大きく下がってしまいます。ですから会社としては確実に、しかも早く増殖出来るものに偏ってしまいます。増殖の偏り→偏った在庫増加→増加在庫による苗畑面積圧迫→苗畑面積圧迫による取扱い品目の減少→多彩な注文ニーズに答えられない→売上減→増殖の偏りに戻る、という完全に負のサイクルにどっぷり浸かっているところです。

サイクルから抜け出そうと面白そうな木を色々仕入れたりすると、稀に良く売れることもありますが、大体は苗が売れずに圃場で大きくなってしまい売れ残ってしまいます。簡単な商売なんてないのかもしれませんが、緑化樹木の取り扱いも難しい商売だと感じます。仕入れの失敗、在庫が売れていかない、この難しさで生産者はどんどん減少してきました。

ひと昔前は沢山の生産者の方が色々なところにおられました。大手企業から森林組合、林野弘済



処分せざるを得なくなったハルニレ

会、個人の方、兼業農家の方もいらっしゃいました。生産者同士のコミュニケーションも多く、在庫の有無や、品種の特性、市町村や工事での樹木の使用計画の情報共有、くだらない世間話も今考えれば有益な内容と時間でした。以前、札幌近郊のあちこちにあって集出荷に追われた生産者・道有林・森林組合の苗畑も、野菜畑やパークゴルフ場、ソーラー発電パネル畑に替わってしまいました。他の生産者との馬鹿話で「あそこに木入れるのに夜間運搬で通行止めかけてようやくよ」、「あそこに木入れるのにヘリで運んだ」なんてすっかり嘘みたいな昔話になりました。いつのまにか私達の業種は、すっかり希少な業種になっていました。

最近、その希少性をさらに強く再認識したきっかけがありました。毎年林業試験場から全道の緑化樹生産業者に依頼される「緑化樹養成・払出調査」です。この調査はその年に、どの緑化樹木のどんな大きさの物を道内及び道外に売ったか？と、どの樹木のどんな大きさの物を道内、又は道外から仕入れ養成しているか？を全道各地の生産事業者から聞き取り、まとめ、それを官公庁や生産業者に公表する調査です。調査対象になった生産事業者の形態、名称や所在を公表しています。

私がこの調査を当社で担当し始めた20年前、調査対象生産者は100件以上ありました。それが平成28年には32件、令和2年度の調査依頼を受けた方の数は20件。林業試験場の調査担当者も20年前と比べたら調査、集計が楽になってしまいました。昔は紙の調査票に手書きしたものを試験場に郵送、それを冬中かけ集計されていましたが、今は集計量が大きく減った上、パソコンで数量自動計算、メールで提出です。

自分の仕事の先の暗い話を長々書いてしまい申し訳なかったのですが、こんな厳しい時代で希少業種になってしまった当社にも、夢を持った若者が勤めてくれています。少ない職員のなかに20代前半が2名、今春からは3名になる予定です。

現在、全売上中で生産販売業務の売上比率は、以前に比べると下がっています。一方で公園や街路、マンションや個人宅の一般維持管理と植栽工事の売上比率が上がってきています。そのため、若い彼らに卸の仕事や樹木養成・増殖を教える時間が多くとれません。仕事をしてメインとなる作業は掘取、草刈など体力任せのキツイ作業が多くなります。

そんな苗畑での厳しい作業でも、彼らは（私を含め）わずかながら心やすまると感じているようです。自分たちの手で植付けした苗畑ですので、空気が良いとか、自然環境がどうか大げさなことは言いませんが、きっと植物には触れると心穏やかになる効果があると思います。

毎年、木を害する毛虫やネズミやカミキリムシ、倉庫や枝に巣作るスズメバチやアライグマとの戦い、干ばつ、大雨や大雪になっても苗畑作業は続きます。大変な仕事ですが、職員は「苗畑作業は大変だけど、ここが好きだ」と言っています。

私が古い、この仕事が出来なくなっても、触れた樹木はどんどん大きくなり、私が死んだ後でも樹木が長い時間を生きていくのは、嬉しいような、切ないような不思議な気持ちです。そんな先の想像さえさせてくれる、樹木に携わる私の仕事、悪くないです。



エゾヤマザクラ苗木の養成状況

菡齋松（かんさいまつ）—函館・亀尾町の名木—

吉田 一雄（29期）

1. はじめに

生前、齋藤晶先生から、「ヨシダくん、菡齋松（かんさいまつ）について調べようと思ってるんだが、君は函館出身なんだから何か知らないか」と問われ、何も知らないと答えたままになっておりました。今田樹木医の「北海道の巨樹・名木 150 選」の中には残念ながら、函館の菡齋松のことは書かれておりませんでした。今回、北海道の名木にぜひ加えていただきたく、菡齋松について調べてみました。本報文を齋藤晶先生にお見せしたら、叱られることばかりかと思いますが、その報告をしたいと思います。なお、菡齋松の樹高等を測定したところ、幹周：2.09m、樹高：4.5m、枝張り：南側 5.0m、北側 5.5m、東側 7.2m、西側 4.0mであり、樹勢は十分あるという状況です。

2. 菡齋松とは

菡齋松の菡齋とは、庵原菡齋（いはらかんさい）のことです。庵原菡齋は、江戸時代中期から後期にかけて活躍した江戸幕府の幕臣です。いおはらかんさい、という読み方もあり、そのため庵原町（いはらちょう）という町名も残っております。他に、いばらかんさい、という読み方もありますが、本文では、いはらかんさい、で統一したいと思います。菡齋に因んだアカマツが、菡齋松と呼ばれ、函館市亀尾町の、今は廃校となった亀尾小中学校のグラウンド脇に植えられてあるのです。



写真1 菡齋松(かんさいまつ)

そばに立てられている解説板にあるものをそっくり書き出してみますと以下のとおりです。

「命名 昭和 61 年 2 月 吉日 安政元年 1854 年 庵原菡齋が箱館奉行の命でこの地に御手作場を開設した。その翌年この近くの地理掛産物会所が設けられた。この松はその跡地に植えられたものである。」この辺りに、御手作場という模範的な農場が設けられたということです。

今回まとめるにあたって参考にしたのは、日本農書全集全 72 巻に収められている「亀尾疇圃栄」（かめおちゅうほのさかえ）という本です。この本は、無役の普請役であった、庵原菡齋が、本州とよく似た気候の道南において、江戸時代の進んだ農業によって試作した農業結果を報告したものです。試作したのはわずか一年ですが、この力作を後世に残そうと、箱館奉行竹内下野守により報告を命じられ著したものです。そのためか最初に、箱館奉行竹内下野守の序文が記されています。そして、この本については、北海学園学長をつとめられた高倉新三郎氏が解説をされており、それには、亀尾疇圃栄の時代的背景から、庵原菡齋のこと、そして庵原家のことも書かれております。

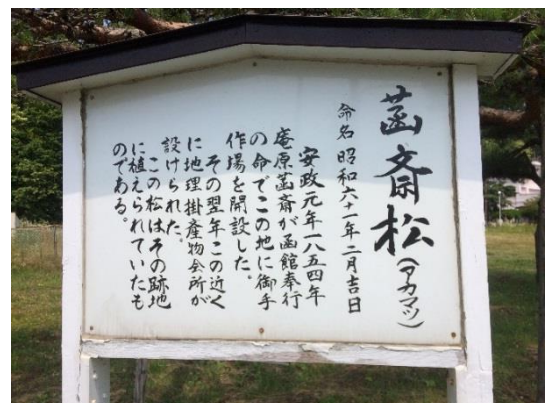


写真2 案内板

御手作場を一言で言いますと江戸幕府経営の開墾地です。この仕組を作ったのは、庵原菡齋です。農作の適地として亀尾の地を選び、田：約 68 アール、畑：約 65 アール、苗代：約 1 アールを拓きました。田には各種のコメ・アワ・ヒエ・ソバ、畑にはダイコン・カボチャ・ホウレンソウ等たくさんの農作物を試しています。とくにダイコンは、尾張のものや武州練馬のダイコンを試して好成績をあげています。さらにタバコも試しています。当時、北海道で庶民が常用していたのは阿波のタバコでしたが、水戸老公からいただいたタバコの種を植えたところ、阿波のタバコよりもうまいという記載があります。

これ以前の稲作と言えば、道南の大野平野にある、北海道水田発祥の地の碑文にあるとおり、元禄五年（1692 年）に大野村文月で野田作右衛門がコメを収穫したのですが、稲作は続けることができなくて、結局、コメに年貢を科すことができずじまいであったということです。その後コメ作りに本格的に取り組んだのは、この亀尾の御手作場が最初です。庵原菡齋は年貢を納めさせることはせず、自立するまでのお米と味噌を支給し、最初の三年間は常雇で耕作に従事させ、水田を耕作する者には 1 反歩につき一兩二分を与えたというのです。自立できるようになると、耕作地を無条件で与えました。

3. 庵原家と北海道

庵原家と北海道のつながりと言いますと、庵原菡齋の養祖父である、庵原弥六から始まります。天明五年（1785 年）とその翌年にかけて、幕府は大々的に蝦夷地探検を行いました。そのメンバーの中に庵原弥六という幕臣がおりました。当時ロシア船がたびたび蝦夷地に來航し、ロシアの南下政策に基づき開国を迫っており、これに対抗して蝦夷地探検が行われたのです。弥六らは、天明六年（1786 年）三月に病死してしまいます。その後、老中が田沼意次から松平定信に変わったため、蝦夷地調査は打ち切られ、庵原家は嫡嗣がなかったため、お家が断絶されてしまうのです。

それから十二年後、再び蝦夷地調査が行われますが、三橋藤右衛門が、「辺境の地に調査に行って死んだのは戦死に等しい」として、江戸に戻ってから庵原家の再興を建議した結果、庵原菡齋の父、直一が庵原家を継ぎます。直一は弥六の墓碑を建立し直一亡き後、庵原菡齋が庵原家を継ぎました。菡齋はその後幕府から江戸霊岸島の蝦夷地会所詰めを仰せつかり、たびたび蝦夷地に赴任しております。江戸での御普請方下奉行を最後に過労で倒れ、息子に家督を相続します。亀尾疇圃栄が著されたのは、隠居後のことだそうです。

庵原菡齋が亡くなってからも、幕府の御手作場事業は続きました。最後の御手作場となったのは、元村の御手作場です。その農業用水路は、現在では鴨々川となって、札幌市街の中心を流れています。その開墾した方の銅像がテレビ塔近くにあることを私は最近知りました。

4. おわりに

菡齋の功績を辿りましたが、菡齋松が植えられたのが、いつであったのかはわからずじまいです。しかし、道南の亀尾の地で、江戸時代から農業による北海道振興が始まったことを知りました。その成果が今日の農業にどれほど影響があったかは不明です。明治から近代農業が始まりましたが、それ以前から北海道開発に身命を賭してきた人たちがいたことを、この菡齋松を調べてわかりました。地元にある名木を保全していけるよう、今後も調べていきたいと思えます。

参考図書 日本農書全集全 72 巻のうち第二巻「亀尾疇圃栄」 農山漁村文化協会 刊

一般社団法人 日本樹木医会北海道支部 会員紹介

樹守創刊30号を記念して、支部会員の自己紹介を特集しました。おなじみの方も「はじめまして」の方も、これからの会員交流・情報交換などを深めるためにご活用ください。

※1期生および3期生の橋場会員は、今年度をもちまして退会のため、本頁では氏名・登録番号のみ掲載しております。これまでの支部の活動への御貢献、心から感謝申し上げます。

北海道支部会員 自己紹介

<p>1期 No.17 おだじま こう 小田島 晃 (札幌市)</p>	<p>1期 No.40 たて かずお 館 和夫 (函館市)</p>	<p>3期 No.213 はしば かずゆき 橋場 一行 (江別市)</p>
<p> 3期 No.161 いとう つとむ 伊藤 務 (札幌市) 一番好きな業種は、山林の樹木調査と庭木調査です。傘寿を迎えましたので、今は裏庭の手入れと、趣味の彫刻、本等を読んで過ごして居ります。</p>	<p> 3期 No.192 すずき じゆんさく 鈴木 順策 (北見市) 巨樹・名木・保存樹木等の総合診断・外科治療、桜の名所づくりアドバイザー (公財 日本花の会)、森林環境教育。冬の風物詩サロマ湖でチカを釣り珈琲を飲む至福の時を過ごします。</p>	
<p> 4期 No.255 くぼた しんさく 窪田 信作 (旭川市) 自宅敷地内に推定樹齢550年生のイチイの樹木があります。癒し、励まされるオーラがあります。</p>	<p> 5期 No.392 やまのえ かつし 山上 勝治 (函館市) 造園業に携わって40年近く経過しました。函館市、道南周辺、他地域で公園・街路・保存樹木・建設工事に係る樹木診断、樹勢回復、樹木治療全般に携わっています。</p>	
<p> 7期 No.550 よしだ けんいち 吉田 憲一 (南幌町) 会社設立から20年目。樹木の調査診断から自然環境教育活動の実践にシフトしていきます。「木」から「木+子」の保育へ。人生最終コーナー。山・川・海との新たな挑戦です。</p>	<p> 8期 No.591 さなだ まさる 真田 勝 (札幌市) 土壌調査、樹木・植生調査、育苗・植栽を得意としています。趣味は庭仕事、ツツジ・シャクナゲ・ミヤマキリシマの増殖、山歩き、山菜、旅行 (47都道府県制覇)。</p>	

 <p>8期 No.597 <small>たかくら こうぞう</small> 高倉 康造 (江別市)</p> <p>現在介護施設でガーデニングボランティアをしています。得意分野は接ぎ木やさし木などでの樹木の増殖と果樹の病虫害診断です。趣味は小説を書くことで新人賞に応募しています。</p>	 <p>9期 No.684 <small>どうかい たくじ</small> 百海 琢司 (厚岸町)</p> <p>公園の維持管理と町のサクラ並木再生やサクラの後継樹・新品種の育成を目標にサクラの保護育成等の活動をしています。サクラに関して皆様と情報交換できれば嬉しいです。</p>
 <p>10期 No.768 <small>とだ みちひろ</small> 戸田 道弘 (札幌市)</p> <p>4月よりフリーになります。今後の計画として、北海道の自然を見て回り、もう一度勉強しなおすつもりです。好きな樹木はサクラ。木工クラフトでカトラリー作りを勉強中。</p>	 <p>11期 No.815 <small>おぐら ごろう</small> 小倉 五郎 (伊達市)</p> <p>伊達市を中心に西胆振地域で樹木治療・調査をしています。また伊達市の「樹木講習会」や、理事をしているNPO法人で地域の樹木案内をしています。</p>
 <p>11期 No.818 <small>かねた まさひろ</small> 金田 正弘 (苫小牧市)</p> <p>道内各地でサクラ類の樹勢回復処置に従事。野生種10、園芸種300以上あるサクラの普及活動を継続。グリーンコンサルタント緑の総合研究所で息子と活動中。</p>	 <p>11期 No.847 <small>とよだ さかえ</small> 豊田 栄 (小樽市)</p> <p>公園・緑地樹木、庭園樹木等の診断及び樹木保護管理、個人庭園等の植栽計画・アドバイスをしています。体重9.5kgのやや太めのネコを1匹飼っています。</p>
 <p>12期 No.875 <small>あべ しょうたろう</small> 阿部 正太郎 (札幌市)</p> <p>得意分野：樹木診断とキノコ。仕事は楽しくがモットー。好きな言葉：継続は力なり。いつまでも元気で活動出来るように、運動しています。趣味は釣り・ゴルフ・麻雀です。</p>	 <p>12期 No.878 <small>いぐち かずのぶ</small> 井口 和信 (富良野市)</p> <p>東京大学・北海道演習林に技術職員として勤務しています。森林保護、特に森林施業と昆虫の関心に興味があります。樹木医としての活動は、危険木診断の依頼を時々受けています。</p>
 <p>12期 No.951 <small>なかむら てつよ</small> 中村 哲世 (小樽市)</p> <p>都市公園の実施設計、作庭、庭園管理、樹木の診断・治療を行っています。樹木のほかに日本庭園の技術継承を目指しています。仲良しの妻とアジアアロワナ2匹が居ります。</p>	 <p>12期 No.986 <small>やくろ えつお</small> 矢黒 悦生 (室蘭市)</p> <p>地元の会社に勤めております。現在の仕事内容は緑化関係ではないのですが、今後も緑化の勉強を積み重ねて、市内のアドバイザー的存在を目指します。</p>

 <p>13期 No.1009 <small>うすい みき</small> 薄井 美樹 (札幌市)</p> <p>山林木、川辺、緑地帯、庭木等の調査を専門に、道内随所に行っております。以前は樹木外科治療を行っていましたが、最近のご無沙汰しております。感謝の気持ちを大切にしています。</p>	 <p>13期 No.1031 <small>くまがい こうき</small> 熊谷 恒希 (札幌市)</p> <p>令和2年まで公園の維持管理作業に従事していましたが今年から完全にフリーになりました。治療に至る前の予防医学的な観点からの樹木の健康管理を目指し研鑽中です。</p>
 <p>15期 No.1286 <small>さくらだ みちお</small> 桜田 通雄 (森町)</p> <p>現在、樹木医活動はほぼ無し。日常では樹木医視点で眺め・発想することは多い。長年の弦楽器演奏・木工からは、生木と製材素材の関連や様子を興味深く楽しんでいる。</p>	 <p>15期 No.1287 <small>ささき いちろう</small> 佐々木 一良 (札幌市)</p> <p>公園や街路樹の維持管理、街路樹診断を行っています。運動不足解消のため、北大の校内を散歩して、花や種子を探しています。</p>
 <p>15期 No.1299 <small>すがの のぶはる</small> 菅野 信治 (江別市)</p> <p>樹勢および危険木診断、樹勢回復、緑化技術普及活動、緑化維持管理の実施。風景や草花、昆虫などの撮影データをパソコンを使用して表現するのが趣味。</p>	 <p>16期 No.1372 <small>いけの や しげお</small> 池ノ谷 重男 (江別市)</p> <p>平成30年度から支部事務局を担当しています。前職では森林保護(病害虫等対策)に関する仕事を長くやっていました。樹木害虫の発生がありましたら、情報の提供をお願いします。</p>
 <p>16期 No.1403 <small>きたうら みか</small> 北浦 みか (札幌市)</p> <p>「緑のカーテン」やグリーンインフラなど都市緑化に興味があります。最近では自宅庭でブドウやりんごの剪定法を試して、楽しんでいます。</p>	 <p>16期 No.1415 <small>さめしま むねとし</small> 鮫島 宗俊 (札幌市)</p> <p>薩摩出身。造園業にどっぷり漬かって早半世紀。未だ奥の深さに到達できず。皆を魅了させる庭造りを目指し生涯現役を続行中のため得意分野は無い。趣味は仕事。好物は芋焼酎。</p>
 <p>16期 No.1462 <small>ほそみ さとこ</small> 細縦 聡子 (札幌市)</p> <p>公園・街路樹の緑地維持管理・街路樹診断・藻南公園花壇ボランティアコーディネーターを行っております。イラストが得意です。ネコを2匹飼っています。</p>	 <p>16期 No.1464 <small>ほりつか やすひろ</small> 堀束 恭弘 (札幌市)</p> <p>苗木の育成試験、苗畑管理、様々な植栽手法の調査、研究、実践、緑化困難地森林造成のための調査(樹種選定、植栽基盤造成計画)等に多く関わってきました。</p>



17期 No.1497

いとかわ ただし
糸川 忠志 (札幌市)

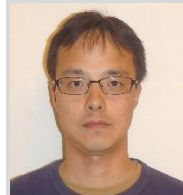
大阪出身。大阪の環境緑地コンサルの設計業務を経て植木屋修行。札幌の造園施工会社で勤務後独立。主に個人邸の管理を柱に緑地の設計・施工・管理など。



17期 No.1536

しみず はじめ
清水 一 (三笠市)

荒廃地の緑化・苗木づくり・樹木の維持管理を行っております。市町村観光パンフレットや切手収集、化石掘りを細々としております。



17期 No.1547

たちもり しん
日月 伸 (帯広市)

帯広の森の拠点施設の運営に携わっています。地域の樹木医として貢献できるよう日々精進。最近、心を奪われたものはほころびかけのナナカマドの花です。



18期 No.1612

あきもと まさひろ
秋本 正信 (美唄市)

かねてより樹木の病気に関心があります。兵庫県姫路市出身の「団塊の世代」で無職です。趣味は登山と剣道です。



18期 No.1624

いわせ さとる
岩瀬 聡 (札幌市)

樹木医補資格養成機関の札幌工科大学造園緑地科で造園・森林に関する教育を行っています。より実践的な樹木医教育のため、皆様のご協力をお願いしたいと思います。



18期 No.1665

たかはし てるお
高橋 照夫 (石狩市)

現在は社員 10 人ほどを抱え札幌市などの街路樹診断、各施設の庭園管理などの仕事をしております。昨年は久しぶりにアカマツ、福山石で石組みをした日本庭園を作庭しました。



19期 No.1738

いしやま りゅう
石山 隆 (札幌市)

樹木の剪定ほか造園業全般。腐朽部分取り除き等庭木の樹勢回復に力を入れています。街路樹診断も。新しもの好きで、今はドローンを上手く活用できないか試行錯誤中。



19期 No.1803

たかや としかず
高谷 俊和 (札幌市)

測量会社で設計・積算等を行っています。カラマツ・イチョウの黄葉や晩秋のカツラが好きです。最近では樹木医らしいことをしていないので、調査など何かあればお声かけください。



19期 No.1808

ただ みつよし
多田 光義 (札幌市)

最近では海浜植物の保護ボランティア活動の傍らで海岸近傍の半自然草原の植生、特にロゼット植物に関心を持ち、情報を集めています。



19期 No.1846

わたなべ あつし
渡邊 温 (札幌市)

(株) 地域環境計画で植物調査、街路樹診断等を担当しています。昨年はサクラを中心に診断。ダメージが多く気の毒でした。一昨年庭に植えたチシマザクラ、今年の開花が楽しみです。

 <p>20期 No.1860</p> <p>うちだ のりひこ 内田 則彦 (旭川市)</p> <p>祖父の代から 96 年続く造園業の 4 代目代表をしています。家には元気な大型犬 2 匹と小型犬 1 匹がいます。元気すぎて創業 100 年を迎える時は私の体がぼろぼろなのではないかと心配です。</p>	 <p>20期 No.1873</p> <p>かわぐち はるひこ 川口 治彦 (札幌市)</p> <p>札幌市豊平区にある豊平公園で緑の相談員をしています。四季折々に変化する樹木や草花を観察して、「樹まぐれ日記」というブログを書いています。変</p>
 <p>20期 No.1892</p> <p>すずき あつみ 鈴木 淳己 (札幌市)</p> <p>植生管理や自然環境保全に関する調査・計画、ビオトープや緑化の計画・設計、街路樹の再整備や、維持管理の提案などを行っております。趣味はサイクリング、キャンプ、魚釣り等。</p>	 <p>20期 No.1893</p> <p>すずき たかし 鈴木 隆 (豊浦町)</p> <p>山林種苗の事務局、林業グループの代表。家庭木の治療依頼に対応する。森林樹木を 40 年間観察し続けている。好きな樹木はハリギリ。趣味は歩くスキー。</p>
 <p>21期 No.1988</p> <p>かさくら のぶあき 笠倉 信暁 (小樽市)</p> <p>自然観察会等で森林・樹木に関する普及啓発を年 2~3 回、参加者と共に楽しんでいます。最近、合気道にはまっています。目指せ初段。好きな木はハクウンボク。</p>	 <p>21期 No.2045</p> <p>はまだ ひらく 濱田 拓 (札幌市)</p> <p>自然環境の調査を行うコンサルタントに勤務しています。街路樹よりも森の木のほうが得意です。樹木治療や造園的な経験は皆無なので皆様から教えていただきたいと思います。</p>
 <p>23期 No.2247</p> <p>こん だいすけ 近 大輔 (札幌市)</p> <p>美唄市の道総研林業試験場に駐在している道庁の林業普及指導員です。森林保護担当で森林被害の相談や技術指導が業務です。鳥獣害対策を学ぶため銃猟免許を取りました。</p>	 <p>23期 No.2293</p> <p>ひろた よしみ 廣田 善己 (富良野市)</p> <p>現在、東京大学北海道演習林の樹木園に勤務しています。育苗業務で、病虫害について学び直しています。皆さんに、教えていただくこともあると思います。よろしく願いいたします。</p>



 <p>24期 No2357</p> <p>かとう まき 加藤 真樹 (札幌市)</p> <p>今は造園の手伝いを少しと、ほとんどの時間一特に冬は一文献、資料の収集と分類、そして創作をしています。テーマは「北海道の歴史、樹木の物語」です。</p>	 <p>24期 No2369</p> <p>くろさき あきこ 黒崎 暁子 (苫小牧市)</p> <p>出身は福岡県です。苫小牧市サンガーデンで緑化相談員をしています。樹木内部診断装置、THCを所有しています。造園の現場作業を行えます。</p>
 <p>25期 No2447</p> <p>あさの ひであき 朝野 英昭 (札幌市)</p> <p>森林の保全・創出にかかわる全体計画・調査設計が専門です。風景写真を撮ること、映画を観ること、ギターを弾くこと、全国各地の地酒を嗜むことが大好きです！</p>	 <p>25期 No2458</p> <p>いまだ ひでき 今田 秀樹 (札幌市)</p> <p>街路樹、記念保護樹木などの樹木診断や立木調査を行っています。趣味は道内各地に出かけて巨樹・名木などの写真撮影、登山、旅行です。</p>
 <p>25期 No2546</p> <p>まえだ たかし 前田 敬 (札幌市)</p> <p>建設コンサルで調査、緑化河川計画に携わっています。ヤナギ以外の樹木に関わる仕事が少ないのが悩み。植物分類します。カラオケ好き。目下の興味は転職。</p>	 <p>25期 No2561</p> <p>やました ゆうじ 山下 雄志 (札幌市)</p> <p>現在、民間会社の社有林管理部門に勤めており、持続可能な森林経営に取り組んでおります。樹木について皆様から教えていただきたいと思っております。よろしくお願ひいたします。</p>
 <p>25期 No2563</p> <p>よしむら ふみあき 吉村 史明 (札幌市)</p> <p>造園関連全般、樹木調査、園芸資材販売の仕事をしております。高所作業車が使用不能な場所での、ツリークライミング技術による大径木の剪定や伐採が趣味になっております。</p>	 <p>26期 No2606</p> <p>さかもと としたか 坂本 俊隆 (札幌市)</p> <p>個人事業主として主に個人宅のお庭の管理の剪定を中心に行っております。好きな樹木はマツです。趣味はジョギングやお庭めぐりを目的とした旅行です。</p>
 <p>26期 No2607</p> <p>さきかわ てついち 崎川 哲一 (札幌市)</p> <p>子どものための森林調査・木製玩具の販売・自然体験や木育活動・若者のボランティアコーディネート等をしております。樹木医の諸先輩方にぜひ学ばせていただきたいです。</p>	 <p>27期 No2701</p> <p>きどぐち かずひろ 木戸口 和裕 (札幌市)</p> <p>技術士(森林部門)。勤務するコンサル会社で航空緑化など緑の技術を担当。同社CSR活動では、桜等の樹勢回復、木育などを展開中。趣味は桜の栽培品種の保全・育種など。</p>

 <p>28期 No2807 <small>くの こう</small> 久野 航 (札幌市)</p> <p>自然環境調査のコンサルに勤務しています。植物調査や、民間企業の生物多様性保全活動の支援などを担当しています。植物の同定のほか、画像編集ソフト等を用いたデザインができます。趣味は狩猟です。</p>	 <p>29期 No2902 <small>しらとり けいこ</small> 白鳥 桂子 (札幌市)</p> <p>札幌市の街路樹診断、百合が原及び中島公園の維持管理を担当。得意な分野は公園・緑地計画、GIS。好きな木はサクラ、カツラ。趣味はクロスカントリースキー、ピアノ。</p>
 <p>29期 No2924 <small>さいとう やすつぐ</small> 齋藤 保次 (函館市)</p> <p>東京から北の大地に戻って早5年。市内の公園樹・街路樹の調査や診断、また公園活用の一環として自然案内を行っております。趣味は蕎麦打ち、ソロギター。</p>	 <p>29期 No2937 <small>とよしま ゆきのぶ</small> 豊島 幸信 (札幌市)</p> <p>樹木生産、販売の会社に勤めております。全道、全国に取引先があります。趣味は釣り、山菜採りなどです。</p>
 <p>29期 No2979 <small>よしだ かずお</small> 吉田 一雄 (函館市)</p> <p>水源林、河畔林などの森林（保護）計画や、サクラの樹勢回復計画を行っております。趣味はタップダンス。ステップを踏むというより地団太を踏んでいる感じです。</p>	<p>道外支部会員 25期 No2533 <small>あべ けいこ</small> 阿部 敬子 (名古屋市)</p> <p>愛知県支部所属の会員であるが、北海道支部に「道外支部会員」として所属。</p>

賛助会員

株式会社 コクサク	(札幌市)
一般財団法人 北海道森林整備公社	(札幌市)
株式会社 桔梗造園	(函館市)
株式会社 曾我造園	(厚真町)
株式会社 有末造園	(札幌市)
有限会社 大宮造園土木	(苫小牧市)



令和2年度 日本樹木医会北海道支部の活動報告

事務局

日本樹木医会北海道支部は、北海道に住所を有する支部正会員及び北海道支部の会員になることを希望する道外支部会員（一般社団法人日本樹木医会の会員）と賛助会員（緑化・造園関係者）によって構成されており、令和2年4月1日現在の会員数は、正会員62名、道外会員1名、賛助会員6名（団体）である。令和2年度における支部の主な活動は、次のとおり行った。

1 日本樹木医会の行事に関すること

(1) 令和2年度一般社団法人日本樹木医会第1回理事会

新型コロナウイルス感染症の影響で書面議決となった。議案は、令和2年度定時社員総会開催方法の変更ほか（ニュース124号参照）。

(2) 令和2年度一般社団法人日本樹木医会定時社員総会・第2回理事会

令和2年6月20日（金）日本樹木医会事務所において開催。正会員総数2,387名中、書面決議提出者1,458名で、定款20条に規定する定足数を満たした。議事は令和元年度の事業・決算報告、令和2年度の事業計画・予算（案）、役員改選等を審議し、原案どおり承認・議決され審議が終了した。

第2回理事会は、総会終了後同会場において、役員改選を議題として開催された（ニュース124号参照）。

(3) 令和2年度一般社団法人日本樹木医会第3回理事会・第1回業務執行理事会合同会議

令和2年9月12日（土）東京都北区王子「北とびあ」で書面議決を併用し開催された。審議された主な議案は、人事に関する事項、今年度の事業執行の課題、関係団体の活動状況報告、部会・委員会活動等について、各理事から出された要望や意見についての質疑応答が行われた。（ニュース125号参照）。

2 北海道支部の総会・役員会

(1) 総会

新型コロナウイルス感染症拡大防止のため開催を中止し、書面表決とした。議案は、令和元年度の活動報告と決算報告、令和2年度の事業計画と収支予算（案）、支部規約の改正、役員改選で、会員総数62名中提出者56名の提出があり、全てが原案どおり承認された。さらにグリーンコーディネーター（10名）の推薦について承認された。

(2) 役員会

第1回理事会を令和2年11月2日（月）かでの2・7で開催し、冬期事例発表会や「樹守」No.30（記念号）の発行等について打合せ、協議を行なった。

第2回理事会は、令和3年3月19日（金）かでの2・7で開催し、令和3年度通常総会の開催、技術研修会の内容、支部活動計画、「樹守」No.30（記念号）の配付先等について協議を行なった。

3 講演会・研修会

講演会及び技術研修会は、新型コロナウイルス感染症対策のため中止した。

4 行事・活動に関すること

- (1) 北海道支部会報「樹守」No. 30（記念号）を発行し、支部会員（正会員・道外会員・賛助会員）と関係機関等へ配付した。
- (2) (公社)北海道森と緑の会のグリーンコーディネーター派遣事業について、会員の中から10名の推薦を行なった。
- (3) 日本樹木医会の会誌「TREE DOCTOR No. 27 並木」を賛助会員7法人に配付した。(2020. 8. 5)
- (4) 「道民森づくりの集い in 赤れんが」が道庁赤れんが前で開催され、北海道支部として「樹木相談コーナー」を開設し、会員6名で8件の相談に応じるとともに木育活動を行った。
(2020. 10. 17)
- (5) 試験研究機関や関係団体等が開催するイベントへの参加を呼びかけた。

日本樹木医会北海道支部役員一覽

年度	会員数	願	問	支部長	副支部長	事務局長	幹事・理事						監事	樹守発行 編集者
1992	4			中内武五郎	小田島 悦	館 和夫								
1993	6			中内武五郎	小田島 悦	館 和夫								1,2(館)
1994	7			中内武五郎	小田島 悦	館 和夫								3(館)4(橋場)
1995	9	中内武五郎		小田島 悦	齊藤 晶	橋場 一行								5(小田島)
1996	9	中内武五郎		小田島 悦	齊藤 晶	橋場 一行								6(館)
1997	10	中内武五郎		小田島 悦	齊藤 晶	橋場 一行								7(館)
1998	12	中内武五郎		小田島 悦	齊藤 晶	橋場 一行								8(橋場)
1999	14	中内武五郎		小田島 悦	齊藤 晶	橋場 一行								9(橋場)
2000	17	中内武五郎		小田島 悦	齊藤 晶	橋場 一行								10(橋場)
2001	19	中内武五郎	小田島 悦	齊藤 晶	鈴木 順作	橋場 一行	吉田 憲一	阿部正太郎	佐々木雅人	金田 正弘	中村 哲世		館 和夫	11(真田)
2002	22	中内武五郎	小田島 悦	齊藤 晶	鈴木 順作	橋場 一行	吉田 憲一	阿部正太郎	佐々木雅人	金田 正弘	中村 哲世		館 和夫	12(真田)
2003	25	中内武五郎	小田島 悦	齊藤 晶	鈴木 順作	橋場 一行	吉田 憲一	阿部正太郎	佐々木雅人	金田 正弘	中村 哲世		館 和夫	13(真田)
2004	28	中内武五郎	小田島 悦	齊藤 晶	鈴木 順作	橋場 一行	吉田 憲一	阿部正太郎	佐々木雅人	金田 正弘	中村 哲世		館 和夫	14(真田)
2005	28	齊藤 晶	小田島 悦	橋場 一行	真田 勝	齊藤 満	福士 正明	伊藤 務		福士 正明	伊藤 務			15(真田)
2006	30	齊藤 晶	小田島 悦	橋場 一行	真田 勝	齊藤 満	福士 正明	伊藤 務		福士 正明	伊藤 務			16(真田)
2007	35	齊藤 晶	小田島 悦	橋場 一行	真田 勝	齊藤 満	福士 正明	伊藤 務		福士 正明	伊藤 務			17(真田)
2008	38	齊藤 晶	小田島 悦	橋場 一行	真田 勝	齊藤 満	福士 正明	伊藤 務		福士 正明	伊藤 務			18(真田)
2009	43	齊藤 晶	小田島 悦	橋場 一行	真田 勝	橋場 一行	福士 正明	伊藤 務		福士 正明	伊藤 務			19(真田)

(注: H19年までは会員全員が幹事)

(-) 一般社団法人に移行														
2010	44	齊藤 晶	小田島 悦	鈴木 順作	真田 勝	阿部正太郎	吉田 憲一		佐々木雅人	金田 正弘	中村 哲世	志藤 純一	伊藤 務	20(真田)
2011	48	齊藤 晶		鈴木 順作	真田 勝	阿部正太郎	吉田 憲一		豊田 栄	金田 正弘	中村 哲世	志藤 純一	伊藤 務	21(真田)
2012	50	橋場 一行		鈴木 順作	豊田 栄	阿部正太郎	吉田 憲一	熊谷 恒希	清島美也子	金田 正弘	中村 哲世		堀東 恭弘	22(清島)
2013	50	橋場 一行		鈴木 順作	豊田 栄	阿部正太郎	吉田 憲一	熊谷 恒希	清島美也子	金田 正弘	中村 哲世		堀東 恭弘	23(清島)
2014	52	橋場 一行		鈴木 順作	豊田 栄	阿部正太郎	吉田 憲一	熊谷 恒希	高倉 康造	金田 正弘	中村 哲世		堀東 恭弘	24(熊谷)
2015	54	橋場 一行		鈴木 順作	豊田 栄	阿部正太郎	吉田 憲一	熊谷 恒希	高倉 康造	金田 正弘	中村 哲世		堀東 恭弘	25(熊谷)
2016	58	橋場 一行	真田 勝	鈴木 順作	豊田 栄	阿部正太郎	吉田 憲一	熊谷 恒希	日月 伸	秋本 正信	中村 哲世	鮫島 宗俊	菅野 信治	26(熊谷)
2017	59	橋場 一行	真田 勝	鈴木 順作	豊田 栄	阿部正太郎	吉田 憲一	熊谷 恒希	日月 伸	秋本 正信	中村 哲世	鮫島 宗俊	菅野 信治	27(熊谷)
2018	58	橋場 一行	真田 勝	鈴木 順作	豊田 栄	阿部正太郎	川口 治彦	熊谷 恒希	日月 伸	秋本 正信	中村 哲世	鮫島 宗俊	菅野 信治	28(熊谷)
2019	59	橋場 一行	真田 勝	鈴木 順作	豊田 栄	阿部正太郎	川口 治彦	熊谷 恒希	日月 伸	秋本 正信	中村 哲世	鮫島 宗俊	菅野 信治	29(熊谷)
2020	61	豊田 栄	真田 勝	鈴木 順作	金田 正弘	阿部 正太郎	川口 治彦	今田 秀樹	日月 伸	秋本 正信	中村 哲世	鮫島 宗俊	菅野 信治	30(真田・細紙)

日本樹木医会北海道支部会員動向

期	年度	登録番号	氏名	市町村	動 向
1	1991(3)	17	小田島 悦	札幌市	R3.3.31退会
		32	斉藤 晶	函館市	H26.4.1退会
		40	館 和夫	函館市	R3.3.31退会
		44	中内武五郎	美唄市	H18.2.15死去
3	1993(5)	192	鈴木 順策	北見市	R2.5.31退会 R2.11.6死去 H13.5滋賀県支部より転入 H27.11.10死去 H11.9.8大阪府支部より転入
		213	橋場 一行	江別市	
		159	有田 勝彦	白老町	
		161	伊藤 務	札幌市	
4	1994(6)	255	窪田 信作	旭川市	
5	1995(7)	350	佐々木 雅人	札幌市	H23.1.26死去
		392	山上 勝治	函館市	
6	1996(8)	457	福士 正明	岩見沢	H30.2.4死去
		463	前田 吉彦	札幌市	H13.7退会
7	1997(9)	550	吉田 憲一	南幌町	
8	1998(10)	591	真田 勝	札幌市	
		597	高倉 康造	江別市	
9	1999(11)	666	佐藤 敬夫	札幌市	H17.3.5死去
		643	大塚 宏二	札幌市	H22退会
		635	明島 直行	札幌市	H22埼玉県支部より転入 H29.4埼玉県支部に転出
		684	碧海 琢司	厚岸町	H31.3岐阜県支部より転入
10	2000(12)	749	斉藤 満	札幌市	H21退会
		768	戸田 道弘	札幌市	
11	2001(13)	802	石川 忠雄	釧路市	H31.2.2死去
		815	小倉 五郎	伊達市	
		818	金田 正弘	苫小牧市	
		847	豊田 栄	小樽市	H17.10千葉県支部より転入
12	2002(14)	875	阿部 正太郎	札幌市	
		878	井口 和信	富良野市	
		951	中村 哲世	小樽市	
		986	矢黒 悦生	室蘭市	H15.9神奈川県支部より転入
13	2003(15)	1009	薄井 美樹	札幌市	
		1031	熊谷 恒希	札幌市	
14	2004(16)	1132	泉 征三郎	岩見沢市	H26.6退会
		1184	志鎌 純一	札幌市	H24.4福島県支部に転出
15	2005(17)	1286	桜田 通雄	森町	H21.4千葉支部より転入
		1287	佐々木 一良	札幌市	
		1299	菅野 信治	江別市	
		1360	涌島 美也子	札幌市	H26.4兵庫県支部に転出
16	2006(18)	1372	池ノ谷 重男	江別市	
		1403	北浦 みか	札幌市	
		1415	鮫島 宗俊	札幌市	
		1462	細樅 聡子	札幌市	H26.4東京都支部より転入
1464	堀東 恭弘	札幌市			
17	2007(19)	1497	糸川 忠志	札幌市	
		1536	清水 一	三笠市	
		1547	日月 伸	帯広市	
18	2008(20)	1612	秋本 正信	美唄市	H25.4 加入
		1619	石谷 成規	網走市	H29.3退会
		1624	岩瀬 聡	札幌市	
		1665	高橋 照夫	石狩市	
		1694	藤野 敏秀	千歳市	H25.4死去
19	2009(21)	1738	石山 隆	札幌市	
		1772	小倉 誠二郎	札幌市	H25.2東京都支部より転入 H30.11東京都支部に転出
		1803	高谷 俊和	札幌市	
		1808	多田 光義	札幌市	H28.8東京都支部より転入
1846	渡邊 温	札幌市			
20	2010(22)	1860	内田 則彦	旭川市	
		1873	川口 治彦	札幌市	
		1892	鈴木 淳己	札幌市	H28.4東京都支部へ転出 H31.3再転入
		1893	鈴木 隆	豊浦町	

日本樹木医会北海道支部会員動向

期	年度	登録番号	氏名	市町村	動 向
21	2011(23)	1988	笠倉 信 暁	小樽市	H27.10東京都支部より転入 R2.3退会 H27.4宮城県支部から転入 H30.4退会
		1998	木村 恒 太	富良野市	
		2045	濱田 拓	札幌市	
		2071	村木 達 男	札幌市	
22	2012(24)	2170	成田 裕 樹	札幌市	退会
23	2013(25)	2293	廣田 善 己	富良野市	
		2247	近 大 輔	釧路市	
24	2014(26)	2357	加藤 真 樹	札幌市	H26.5福岡県支部より転入
		2369	後藤 暁 子	苫小牧市	
25	2015(27)	2447	朝野 英 明	札幌市	H28.5埼玉県支部より転入 道外会員（愛知県支部所属）
		2458	今田 秀 樹	札幌市	
		2546	前田 敬	札幌市	
		2561	山下 雄 志	札幌市	
		2563	吉村 史 明	札幌市	
26	2016(28)	2606	坂本 俊 隆	札幌市	
		2607	崎川 哲 一	札幌市	
27	2017(29)	2701	木戸口 和 裕	札幌市	
28	2018(30)	2807	久野 航	札幌市	
29	2019(31)	2902	白鳥 桂 子	札幌市	
		2924	齋藤 保 次	函館市	
		2937	豊島 幸 信	札幌市	
		2979	吉田 一 雄	函館市	



技術研修会実施一覽表

年度	月日	研修場所	講師	演題	実習講師	研修内容	参加者数
1999(11)	11/9/16~17	道立林業試験場 美明市東明公園	佐藤 孝夫(道立林業試験場) 原 秀類(道立林業試験場) 堀 勝次(道立林業試験場)	緑化樹木に関わる研究成果～樹木の増殖と成長～ ハイオクテクノロジーによる樹木の繁殖 北海道の樹木の蓄積リスト 緑化樹木に関する研究課題	○中内 武五朗 ○真田 勝	脚・枝切れ性開閉によって変化したサクラの治療方法 樹木の生長と土壌改良	正会員 19名
2000(12)	12/9/7~8	森林総合研究所北海道支所	猪瀬 光雄(森林総合研究所) 丸山 温(森林総合研究所) 小泉 力(森林総合研究所) 坂本 泰明(森林総合研究所)	森林総研の研究概要 樹木の生理障害 緑化樹木の虫害 緑化樹木の病害	○橋場 一行 ○橋場 一行 ○真田 勝	腐朽により変化したサクラの治療 樹木の障害と治療 研究施設見学	正会員 19名 賛助委員 9名
2001(13)	13/9/13~14	道立林業試験場	駒丸 哲司(道立林業試験場) 長坂 晶子(道立林業試験場) 清水 一(道立林業試験場)	増長株抄 北海道の主な河川林の種別と造成方法 荒廃地の樹木導入方法と維持管理	○中内 武五朗 ○高倉 康彦	変化した樹木の樹勢回復技術の実習(接木・根接ぎ)	正会員 19名 賛助委員 5名
2002(14)	14/9/5~6	王子森林博物館 栗山町立角田小学校 岩見沢市緑のセンター	幸沢 和彦(道立林業試験場) 幸田 秀穂(王子森林博物館)	ウダイカンパの山火事発生時の樹冠枯損の要因について 龍長株抄・森林博物館の概要	佐藤 孝夫(道立林業試験場) 永田 義明(王子森林博物館) 眞田 貴彦(王子森林博物館) ○伊藤 務 ○鈴木 順作 ○藤木 基一・岩田 剛彦・夏田 晴彦 ○堀土 正明	研究施設見学(緑化樹木本林・苗畑) 「王子の森」苗畑・各種試験林などの解説・見学 樹木園によるエノヤサクラの治療 栗山町角田小学校のシダレヤナギの診断と治療 土壌調査・改良(公開治療)	正会員 19名 賛助委員 2名 特別参加 3名 (岩見沢、道庁、大坂 府各支部1名)
2003(15)	15/9/5~6	森林総合研究所北海道支所	志水 俊夫(森林総合研究所) 佐山 謙彦(森林総合研究所) 宇都木 玄(森林総合研究所)	支所長株抄 森林生産力に対する林冠構造の影響及び林冠における炭酸ガス収支課題について	北村 謙三(森林総合研究所) 山口 岳広(森林総合研究所)	〇2階期タワー・見学案内 樹木の腐朽病害診断について	正会員 20名 賛助委員 2名
2004(16)	16/9/10~11	東大北海道演習林 富良野市山部	酒井 秀夫(東大北海道演習林) ○井口 和彦 高橋 郁雄(東大北海道演習林)	林長株抄「演習林の植樹学的意義」 演習林と樹木の関わり・樹木の個体管理と調査について 増長株抄	○井口 和彦 新橋 明夫(東大北海道演習林)	演習林内見学・解説 富良野生道習習センター見学、どう電先主コーナーなど解説	正会員 22名 他支部 1名
2005(17)	17/9/9~10	道立林業試験場 美明市東明公園	原田 賢治(道立林業試験場) 木幡 靖夫(道立林業試験場) 原 秀穂(道立林業試験場) 清水 一(道立林業試験場) 佐藤 孝夫(道立林業試験場)	試験研究課題と成果 北海道の樹木害虫と生態 台風18号による都市樹木被害の特長 緑化樹木園の概要	参加者全員	美明市東明公園にて 「サクラの樹勢診断と回復技術」～診断・治療・土壌改良についての検討と 実習・体験～	正会員 21名 賛助委員 3名
2006(18)	18/10/13~14	北大吉小牧演習林	清水 道(道立林業試験場) 日浦 勉(北大吉小牧演習林)	緑化樹木園の見学 研究林の概要	○金田 正弘 ○真田 勝	サクラこぶ病、幼果腐落病などの診断・治療などの解説・技術実習	正会員 19名
2007(19)	19/9/7~8	吉小牧サングレーン 森林総合研究所北海道支所	西田 篤重(森林総合研究所) 丸山 温(森林総合研究所) 小坂 肇(森林総合研究所) 上田 明良(森林総合研究所) 高橋 謙(道立林業試験場) 石井 弘之(道立林業試験場) 原 秀穂(道立林業試験場) 佐藤 孝弘(道立林業試験場)	支所長株抄 北海道支所の試験研究成果 樹木の環境ストレス 北海道への導入を境界すべき樹木障害 ヤツハキイムシ類による樹木の枯損 増長株抄 腐朽の原因とした緑化樹折損危険除木診断技術 北海道の樹木の害虫 森林教育プログラム	○真田 勝 ○真田 勝	吉小牧地方特有の火山性赤土層について解説、改良法などの検討 「樹木の健康診断」 構内の樹木観察と安全・保護について、会員相互の意見交換を行うとともに、 処置方法等の検討	正会員 18名
2008(20)	20/9/19~20	道立林業試験場	田之畑 忠年(林木育種センター) 形須 仁也(林木育種センター) 田村 明(林木育種センター) ○高倉 康彦	増長株抄・北海道育種場の業務概要 北海道育種場の研究課題と実績 高炭素固定能力林木品種の開発 樹木の増殖方法(開発品種の増殖・挿木・挿し木)	○清水 一 ○高倉 康彦	樹木の増殖と育成技術 道立林業試験場の試験研究成果について	正会員 24名 賛助委員 1名
2009(21)	21/9/19~20	林木育種センター北海道育種場	田之畑 忠年(林木育種センター) 形須 仁也(林木育種センター) 田村 明(林木育種センター) ○高倉 康彦	増長株抄・北海道育種場の業務概要 北海道育種場の研究課題と実績 高炭素固定能力林木品種の開発 樹木の増殖方法(開発品種の増殖・挿木・挿し木)	○高倉 康彦	苗木生産と林木品質の保存 (苗木生産上の課題、保存樹木の管理)	正会員 18名

技術研修会実施一覧表

年度	月 日	研修場所	講師	演 題	実習講師	研修内容	参加者数
2010(22)	22/9/17～18	札幌ドーム構内 雪印種苗本社	入山 義久(雪印種苗) 篠田 美史(雪印種苗)	野生逸脱と管理 土壌肥料の基礎知識	船谷 正人(雪印種苗) ○重田 栄	札幌ドーム構内の緑化植物と樹木の植栽についての検討 「熊鷹農林の地」緑化施設・花木園見学	正会員21名 賛助会員1名
2011(23)	23/9/16～17	道民の森	梅井 敬明(森林整備公社) ○池ノ谷 重男 ○阿部 正太郎 JFEホールKK ○浦島 美也子	「道民の森」の概要説明 当別小学校のアカマンの保存対策検討 水源地の森林整備 ドワン・ワッツのツモ・見学 園内の問題木の指摘解説	杉浦 薫(道民の森ボランティア協会) ○阿部 正太郎 ○金田 正弘	ボランティア等による現地案内 水ナラの保全対策の検討 「サクラの森」の衰退しているサクラ群の管理方法の検討	正会員17名
2012(24)	24/10/12～13	札幌 円山公園 ※札幌市公園緑化協会と共催	○浦島 美也子	園内の問題木の指摘解説	○村木 運男 ○金田 正弘 ○阿部 正太郎ほか ○浦島 美也子	レジストグラフによる腐朽木の診断 エノヤザクラの不定根誘導法の実習 エノヤザクラの腐朽治療	正会員22名
2013(25)	25/7/6	森林総合研究所北海道支所	牧野 俊一(森林総合研究所)	ミニ研修 腐木の剪定技術	○船島 宗俊	モントナツ、エノヤザクラ、ヒムロの3樹種の剪定の指導を受け討論	正会員17名
2013(25)	25/9/13～14	森林総合研究所北海道支所	○秋本 正信 ○清水 一	実所長挨拶	相沢 州平(森林総合研究所) 橋本 透(森林総合研究所) ○真田 勝 ○重田 栄 ○金田 正弘	道産地土壌と森林土壌の比較 造成された樹木園土壌とミズナラを主とする森林土壌の観察記録法の解説	正会員27名
2014(26)	26/9/26～27	道総研林業試験場	中島 俊明(道総研林業試験場) ○池ノ谷 重男 小久保 亮(道総研林業試験場) ○秋本 正信 ○清水 一	場長挨拶 最近発生している樹木の害虫と農薬の取り扱い 音響による簡易腐朽測定器の紹介 最近発生している樹木について 腐朽実部の事例紹介、林業試験場の緑化樹事業	○真田 勝 ○重田 栄 ○金田 正弘 小久保 亮(道立林業試験場) ○池ノ谷 重男 ○秋本 正信 ○清水 一	簡易測定器の実演 フィールドの緑化樹見学と害虫、樹病について巡回解説	正会員30名
2015(27)	27/9/18～19	道民の森 石狩市浜益区国有林	大橋 由織(帯広市役所) ○日月 伸 小池 正徳(帯広畜産大学) 橋本 瑠(帯広畜産大学) 榊野 康夫(元帯広畜産大学)	帯広市の緑化の取組 帯広の森・十勝の郷土の森の復活について 北海道内のサクラてんぐく巣箱の発生状況 森林の生態系の生態 十勝森林(天森林)について 二十間道路のサクラ並木について	○秋本 正信 ○清水 一 ○真田 勝 ○重田 栄 ○秋本 正信 ○金田 正弘 ○鈴木 順作 ○吉田 薫一 ○真田 勝 ○日月 伸 榊野 康夫(元帯広畜産大学)	集約の管理方法 病虫予防療法と剪定法など 多量発生での樹病 サクラ樹群の管理 ミズナラ巨木の管理 黄金山山麓のイチイの巨木と送毛山道の千本ナラの見学 十勝の天然林について(帯広農高構内学校林)	正会員19名 参加者21名
2016(28)	28/10/7～8	帯広真駒原園 帯広の森「はくくーむ	○日月 伸 小池 正徳(帯広畜産大学) 橋本 瑠(帯広畜産大学) 榊野 康夫(元帯広畜産大学)	帯広の森・十勝の郷土の森の復活について 北海道内のサクラてんぐく巣箱の発生状況 森林の生態系の生態 十勝森林(天森林)について 二十間道路のサクラ並木について	○真田 勝 ○阿部 正太郎 ○阿部 正太郎 ○吉田 薫一 藤田 陽一(道総研林業試験場) ○真田 勝 ○今田 秀樹 ○真田 勝 ○阿部 正太郎 ○嶋川 哲一	サクラのトンネル付近の土壌について サクラの樹木診断 中・大径木の診断とカルチの作成 レジストグラフによる診断 簡易腐朽測定器による診断 各種機器による樹高測定 巨木の保全について(産交交換)	正会員59名 参加者22名 正会員24名 その他30名
2017(29)	29/9/8～9	新ひだか町 二十間道路	新ひだか町職員	公園樹木の診断とカルチの作成	○真田 勝 ○阿部 正太郎	公園樹木の診断とカルチの作成	正会員59名 参加者22名
2018(30)	30/9/28～29	平岡樹芸センター 八級学園実生石壁	○阿部 正太郎	公園樹木の診断とカルチの作成	○阿部 正太郎	公園樹木の診断とカルチの作成	正会員24名 その他30名
2019(元)	1/9/19～14	苫東・和みの森 厚真町立中央小学校学校林	○金田 正弘	樹木の修繕法について	○阿部 正太郎 ○嶋川 哲一	樹木の維持管理と活用方法の検討	正会員27名 他支部1名
2020(2)	新型コロナウイルス感染症拡大防止のため中止						

※○の講師は支部委員

講演会記録

年度	月日	会場	講師	演題	参加状況	参加率(%)
1996(8)	8.4.1	KKR札幌	齋藤 晶 (支部会員)	「アメリカにおける緑化事業」	正会員7名 賛助会員5名	88
1997(9)	9.4.17	KKR札幌	山口 岳広 (森林総合研究所)	「北海道の森林における樹木の腐朽菌」	正会員9名 賛助会員3名	90
1998(10)	10.4.16	KKR札幌	小口 健夫 (元専修大学短大教授)	「サクラを主とする樹木の胴・枝枯病」	正会員10名 賛助会員11名	83
1999(11)	11.4.16	KKR札幌	北海道大会(H11.5.21～22)があり、講演会なし			
2000(12)	12.4.14	KKR札幌	黒田 慶子 (森林総合研究所)	「樹木の組織構造と機能」 ～樹木医の基礎知識～	正会員15名 賛助会員6名	88
2001(13)	13.4.13	KKR札幌	高橋 郁雄 (元東京大学大演習林講師)	「北海道における樹木主要病害菌とその生態・防除」	正・賛助会員30名	-
2002(14)	不 実 施					
2003(15)	15.4.11	KKR札幌	小池 孝良 (北海道大学教授)	「森林における被食防衛の現状」	総会員24名 賛助会員3名	84
2004(16)	16.4.9	KKR札幌	丸山 温 (森林総合研究所)	「少雪がもたらす生理的ストレス」 ートドマツの冬季の被害ー	総会員21名 賛助会員4名	75
2005(17)	17.4.8	KKR札幌	小口 健夫 (元専修大学短大教授)	「北海道のサクラの病害と管理」	正会員24名 賛助会員4名	86
2006(18)	18.4.7	KKR札幌	山口 岳広 (森林総合研究所)	「腐朽病害と台風被害木の特長」	総会員24名 賛助会員2名	80
2007(19)	19.4.6	KKR札幌	五十嵐 恒夫 (北海道大学名誉教授)	「北海道の森とキノコのかかわり」	総会員31名 賛助会員2名	89
2008(20)	20.4.4	KKR札幌	秋本 正信 (道立林業試験場)	「北海道の樹木病害診断のポイント」	総会員28名 賛助会員1名	74
2009(21)	21.4.3	KKR札幌	尾崎 研一 (森林総合研究所)	「北海道の生物多様性を守る」	総会員34名 賛助会員3名	79
2010(22)	22.4.9	KKR札幌	河原 孝行 (森林総合研究所)	「希少植物の保全」 ～こんなところに注目しよう～	正会員28名 賛助会員1名	64
2011(23)	23.4.8	KKR札幌	佐藤 孝夫 (道総研林業試験場)	「樹木の根系と維持管理」 ～樹木の根の話・チシマザクラの話～	正会員38名 賛助会員1名	79
2012(24)	24.4.13	KKR札幌	石原 誠 (森林総合研究所)	「樹木細菌病の現状と診断について」	正会員31名 賛助会員1名	62
2013(25)	25.4.12	KKR札幌	笠 康三郎 (緑花計画)	「都市緑化の現状と課題」	正会員39名 賛助会員他2名	75
2014(26)	26.4.11	KKR札幌	小野寺 弘道 (元山形大学教授)	「雪の環境と樹木」	正会員36名	72
2015(27)	27.4.10	KKR札幌	鮫島 惇一郎 (自然環境研究室主宰)	「エンレイソウ探究の旅」	正会員37名	69
2016(28)	28.4.15	KKR札幌	椎名 豊勝 (樹木医会会長)	「樹木医と社会」	正会員44名	76
			佐藤 謙 (北海学園大学教授)	「樹木から見た北海道の自然保護」		
2017(29)	29.4.14	かでの2・7	鶴田 誠 (兵庫県支部)	鶴さんの桜の育て方 ～太陽の子・英才教育・不撓不屈の三大モットーによる桜の植栽育成～	正会員38名 賛助会員他9名	64
			鈴木 順策 (支部会員)	北の大地に根ざした樹木医活動 ～悠久の木々に魅せられて～		
2018(30)	30.4.13	かでの2・7	浅川 昭一郎 (北海道大学名誉教授)	都市の公園緑地と課題 ～北のランドスケープを考える	正会員37名 賛助会員ほか10名	62
			真田 勝 (支部会員)	樹木の生育と土壌肥料 ～私の林業試験研究から～		
2019(31)	31.4.12	かでの2・7	中田 圭亮 (道総研フェロー)	樹木の獣害 ～野ネズミを中心にして～	正会員39名 賛助会員ほか32名	66
			秋本 正信 (支部会員)	樹木の病害 ～診断と防除～		
2020(2)	新型コロナウイルス感染症拡大防止のため中止					

冬期事例発表会 記録

回	開催年月日 会場	発表者	発表題名	参加者数
1	2017(29)3.17 かでの2.7	吉田 憲一	市民会館前のハルニレについて ・樹勢診断結果について	会員35名
		真田 勝	・土壌および根系調査について	
		阿部 正太郎	街路樹樹木診断パラソルアカシアの腐朽について	
		金田 正弘	サクラの縮伐とその効果について	
2	2018(30)2.9 かでの2.7	崎川 哲一	石狩市浜松区の巨木イチイの調査診断について	会員28名
		清水 一	腐朽木の実態について	
		今田 秀樹	剣淵町文化財指定「開拓記念樹・ヤチダモ」の樹木診断について	他4名
		池ノ谷 重男	最近話題となっている樹木害虫について	
		秋本 正信	サクラの病害診断と防除について	
		豊田 栄	樹勢回復処置の一例について	
3	2019(31)2.15 かでの2.7	今田 秀樹	本別開拓記念保護樹木「ハルニレ」の診断について	会員29名
		真田 勝	JR篠路駅前のヨーロッパクロマツの移植に伴う樹勢診断と土壌調査について	
		熊谷 恒希	台風21号による平岡公園の風倒被害	
		清水 一	①石炭露天掘り跡地における樹木の育て方 ②海に見える街に適した緑化樹	
		吉田 憲一	「奇跡の1本松」は何故残ったか？	
		金田 正弘	直近の桜事情	
4	2020(2)2.14 かでの2.7	池ノ谷 重男	札幌市中央区の路傍樹診断	会員32名
		今田 秀樹	令和元年度「記念保護樹木」診断(野坂の黒松)	
		細 椋 聡子	札幌・街の木つれづれ	
		崎川 哲一	子供の居場所として活用される厚真町学校林の調査・活用の検討	
		真田 勝	樹木の干害と日焼け～2019年の少雨高温による異常乾燥～	
		清水 一	樹木の萌芽特性と活用事例	
5	2021(3)2.26 かでの2.7		新型コロナウイルス感染症拡大防止のため、令和3年度に延期	

「樹守」総目次

号・ページ数・発行年月日 (発行人/編集人)

創刊号 14 頁 1993. 5. 12 (中内 武五郎/館 和夫)

- 中内武五郎：創刊のこぼし
- 中内武五郎：植物とつきあって50年
- 小田島 恍：厚岸町国泰寺境内の老桜樹の診断
- 齊藤 晶：風倒木発生の予知技術
- 館 和夫：巨樹名木の現況と対策
- 館 和夫：江別市付近の緑化樹・林木苗畑の害虫

2号 16 頁 1993. 7. 30 (中内 武五郎/館 和夫)

- 中内武五郎：思い出すま
- 齊藤 晶：アカマツ並木損傷木の補修
- 館 和夫：桂ゴルフ倶楽部のカツラの保全
- 館 和夫：端野町指定保存樹木等の樹勢診断と保護対策
- 小田島 恍：雪国の街路樹診断

3号 12 頁 1994. 1. 20 (中内 武五郎/館 和夫)

- 館 和夫：[随想] ふるさとの原風景
- 鈴木 順策：思いつくままに
- 橋場 一行：野幌千古園の名木の補修
- 齊藤 晶：アカマツ外科手術の一例
- 館 和夫：幌南小学校のシンボルツリー、シンジュの補修
- 新会員紹介：3期生2名(鈴木 順策・橋場 一行)

4号 12 頁 1994. 8. 25 (中内 武五郎/橋場 一行)

- 中内武五郎：樹木医制度発展のために
- 鈴木 順策：「双子の桜」保全対策
- 齊藤 晶：名木の修復治療作業計画
-道南農試のユリノキ-
- 橋場 一行：樹木の診断事例から-西舎のサクラ
並木・温根湯のツツジ公園-
- トピックス：北海道神宮の林苑調査について

5号 16 頁 1995. 4. 28 (中内 武五郎/小田島 恍)

- 館 和夫：[随想] 樹木医の悩みいろいろ
- 新会員紹介：4期1名(窪田信作)
- 鈴木 順策：ハルニレの診断概要について
- 中内武五郎：樹医の診察室・・樹木医5名による連載
(朝日新聞)
- 小田島 恍：静内町二十間道路桜並木の診断
- 齊藤 晶：樹木の診断と治療
-巨樹に対する外科手術の一例-
- 館 和夫：道南地方の樹木病害虫に関する林業相談
-道立林試道南支場の診断事例から-
- 橋場 一行：記念保護樹木の診断と治療
- 小鳥たちとつきあって見ませんか?
-バードテーブルと巣箱の設置-

6号 28 頁 1996. 4. 18 (小田島 恍/館 和夫)

- 小田島 恍：巻頭言
- 事務局：日本樹木医会・および道支部の動静
- 新会員紹介：5期2名(佐々木雅人、山上勝治)
- 齊藤 晶：栃木連理木治療 -診断調査等報告書-
- 佐々木雅人：「豊後梅」の診断治療事例について
- 山上 勝治：函館市松倉川サクラ並木樹勢調査及び対策

7号 16 頁 1997. 4. 17 (小田島 恍/館 和夫)

- 館 和夫：[随想] しっぺいがえし
- 新会員紹介：6期2名(福士正明、前田義彦)
- 小田島 恍：「樹木医学研究会」から
-樹木診断に用いられる最新の機器-
- 齊藤 晶：中山峠のミズナラの保全治療工程
- 館 和夫：資料 道南地方の樹木病害虫紳士録
- 事務局：平成8年度 北海道支部の活動

8号 26 頁 1998. 3. 31 (小田島 恍/橋場 一行)

- 小田島 恍：巻頭言
- 事務局：北海道支部の活動
- 新会員紹介：7期1名(吉田憲一)
- 小田島 恍：北海道神宮境内のサクラ
- 小田島 恍：札幌市民会館前庭ヤチダモ倒木事故
- 館 和夫：クロマツとサクラの幹の外科手術
- 佐々木雅人：「石狩街道」ポプラ並木の被害調査結果の概要
- 橋場 一行：芽室公園のカシワ
- 橋場 一行：平成9年度日本樹木医会鹿児島大会から
-クスノキ保全技術研修会-

9号 26 頁 2000. 3. 31 (小田島 恍/橋場 一行)

- 小田島 恍：ご挨拶
- 新会員紹介：8期2名(真田勝、高倉康造)
9期2名(大塚宏二、佐藤敬夫)
転入3期(伊藤務)
- 小田島 恍：資料 札幌市内の高齢並木等と大通公園の樹木
- 真田 勝：樹木の植栽と土壌
-造成地における植栽-
- 齊藤 晶：北海道の巨樹・名木に関わる診断方法
- 館 和夫：青函樹木医技術交流会開催される
- 佐々木雅人：わが敬愛する水
- 佐々木雅人：緑化樹木の育成・保護に関わる参考図書
- 橋場 一行：小樽市の「恵美須神社の桑」の治療
- 事務局：平成11年度 北海道総支部の活動

10号 22 頁 2001. 3. 31 (齊藤 晶/橋場 一行)

- 齊藤 晶：ご挨拶
- 新会員紹介：10期2名(齊藤満、戸田道弘)
- 小田島 恍：ジャイアントセコイアの赤枯病
- 館 和夫：函館にアメリカシロヒトリ発生
- 福士 正明：ツバキ(椿)
- 佐々木雅人：緑化樹木の育成・保護に関わる参考図書
- 真田 勝：高屋敷平作氏入植記念イチイの衰退について
- 真田 勝：除・排雪による街路樹の被害
- 高倉 康造：林地の土壌改良事例
- 橋場 一行：「森の巨人たち百選」の樹木を診断して
- 事務局：平成12年度 北海道総支部の活動

11号 36 頁 2002. 3. 31 (齊藤 晶/真田 勝)

- 齊藤 晶：ご挨拶
- 新会員紹介：11期3名(石川忠雄、小倉五郎、金田正弘) 転入3期(有田勝彦)
- 長坂 晶子：北海道の主な河畔林の種類と造成法
(講演要旨)
- 長坂 晶子：川底にたまる有機物-出水時にどう動くのか- (寄稿)
- 清水 一：荒廃地への樹木導入方法 (講演要旨)
- 寺沢 和彦：ウダイカンバ山火再生林の樹冠枯損の現状について (講演要旨)
- 吉田 憲一：四国土佐街道を行く -照葉(暖帯) 樹林帯を歩いて

- 橋場 一行：樹木の健康は、環境に適応した保全と管理で
- 福士 正明：緑の相談利用状況について
- 真田 勝：札幌市 豊平公園の現状と問題点
- 斉藤 晶：大野町市渡小学校の前庭に生育するクリ 樹木診断調査結果
- 伊藤 務：サハリン(旧樺太)に植えた桜
- 真田 勝：サハリン再訪
- 佐々木雅人：緑化樹木の育成・保護に関わる参考図書
- 事務局：平成13年度 北海道総支部の活動
- 表紙写真：シダレヤギ(撮影：真田勝)

12号 32頁 2003.3.31 (斉藤 晶/真田 勝)

- 斉藤 晶：ご挨拶一地域に親しまれる樹木医をめざして
- 新会員紹介：12期3名(阿部正太郎、井口和信、中村哲世)
- 鈴木 順策：外科治療技術をめざして
- 佐々木雅人：緑化樹木の育成・保護に関わる参考図書
- 柳原 昊：東北人の気質(3期生寄稿)
- 伊藤 務：世界遺産を訪ねて(屋久島)
- 金田 正弘：サクラ類の天狗巢病の見分け方と防除方法について(苫小牧地区)
- 金田 正弘：苫小牧周辺におけるサクラ類の穿孔性害虫ーコスカシバの加害ー
- 福士 正明：この木 なんの木 気になる木
- 真田 勝：樹木と土壌ー根は呼吸しているー
- 事務局：平成14年度 北海道総支部の活動、樹守の編集と投稿方法
- 表紙写真：シダレヤギの公開治療(撮影：真田勝)

13号 32頁 2004.3.31 (斉藤 晶/真田 勝)

- 斉藤 晶：ご挨拶ー自己研鑽に励む樹木医としてー
- 新会員紹介：13期2名(薄井美樹、熊谷恒希) 転入：12期(矢黒悦生)
- 小池孝良他：変動環境下での樹木の成長特性と被食防衛機構ー食害性昆虫の活動に注目して(講演要旨)
- 宇都木玄：森林の光合成生産力に対する林冠構造の影響ー特に森林の垂直的变化に注目して(講演要旨)
- 佐山 勝彦：スズメバチの生態と刺傷被害(講演要旨)
- 山口 岳広：非破壊的手法で生立木の腐朽を探す(講演要旨)
- 伊藤 務：鯨(くじら)森よ いつまでも
- 福士 正明：街路樹の診断について
- 斉藤 晶：森づくり体験学習ー親子で学ぶ森づくりー
- 金田 正弘：道々洞爺湖登別線(通称桜坂)桜並木の調査、診断、治療
- 佐々木雅人：緑化樹木の育成・保護に関わる参考図書
- 斉藤 晶：樹木の紹介ー大野小学校の大樺
- 矢黒 悦生：柿の木の公開治療
- 新会員紹介：12期(矢黒悦生)
- 事務局：平成15年度 北海道支部の活動、樹木の病虫獣害発生情報の提供を
- 表紙写真：大通公園(撮影：伊藤務)

14号 36頁 2005.3.31 (橋場 一行/真田 勝)

- 橋場 一行：[巻頭言] 災害を糧として
- 新会員紹介：14期2名(泉征三郎、志鎌純一)
- 高橋 郁雄：菌類と樹木の関わりー樹木の個体管理と菌害について(講演要旨)
- 金田 正弘：苫小牧周辺エゾヤマザクラコブ病(細菌

- 性病害)
- 薄井 美樹：台風18号 被害木調査
- 伊藤 務：台風18号 シダレヤナギの大木倒れる
- 小倉 五郎・金田 正弘：亀田記念公園 エゾヤマザクラ 登別市開花標準木の腐朽治療
- 金田 正弘：樹木医学会第9回大会に参加して
- 阿部正太郎：佐藤敬雄氏(9期)を偲んで
- 事務局：平成16年度 北海道支部の活動
- 表紙写真：豊平公園風倒木(撮影：真田勝)

15号 36頁 2006.3.31 (橋場 一行/真田 勝)

- 橋場 一行：[巻頭言] これからの樹木医の役割
- 新会員紹介：15期3名(佐々木一良、菅野信治、涌島美也子) 転入：11期(豊田栄)
- 原田 輝治：みどりをつくる(講演要旨)
- 吉田 憲一：街路樹診断調査から見えてくる「危険木集団」の特徴
- 橋場 一行：中内武五郎さんを偲んで
- 伊藤 務：木彫りの熊の樹種について 陣屋の赤松
- 金田 正弘：苫小牧周辺の異種寄生菌
- 橋場 一行：「森林技術者団体ネットワーク」の活動に向けて
- 小倉 五郎：樹木医 仕事論議
- 事務局：平成17年度 北海道支部の活動
- 表紙写真：北大仔ヨウ並木(撮影：戸田道弘)

16号 40頁 2007.3.31 (橋場 一行/真田 勝)

- 橋場 一行：巻頭言 樹木保全のプロフェッショナルとして
- 新会員紹介：16期4名(池ノ谷重雄、北浦みか、鮫島宗俊、堀東恭弘)
- 福士 正明：環境カウンセラーの役割
- 橋場 一行：「アニメティ」のある街路樹
- 井口 和信：樹木医学会第11回大会に参加して
- 山上 勝治：函館周辺街路樹(クロマツ)現況調査
- 金田 正弘：グリーン・エージ 2006年10月号を読んで
- 伊藤 務：円山公園の桜
- 吉田 憲一：「ちじむ街路樹」ーミニ調査からの一考察
- 金田 正弘・小倉 五郎：室蘭市常盤公園イチイの幹傷回復策
- 戸田 道弘：モエレ沼公園 樹木管理体験
- 小倉 五郎：樹木医 仕事論議その2ーもっと、もっとと樹木治療をー
- 小倉 五郎・勝部 武志：室蘭市港北幼稚園「セイヨウミザクラ」治療
- 荒川 克郎：2006年6月プラタナス新梢枯死について(寄稿)
- 真田 勝：樹木医ことはじめ
- 事務局：平成18年度 北海道支部の活動
- 表紙写真：雪吊り(撮影：真田勝)

17号 44頁 2008.3.31 (橋場 一行/真田 勝)

- 橋場 一行：[巻頭言] 地域に根ざした樹木医をめざして
- 新会員紹介：17期3名(糸川忠志、清水一、日月伸)
- 丸山 温：樹木の環境ストレス(講演要旨)
- 上田 明良：ヤツバキクイムシ類による樹木の枯損(講演要旨)
- 小坂 肇：北海道への侵入を警戒すべき樹木病害2種ーマツ線虫病と輪紋葉枯病ー(講演要旨)
- 金田 正弘：苫小牧市役所庁舎横のサトザクラ外科的処置について

- 熊谷 恒希：より正確な樹木診断をめざして
- 中村 哲世：札幌市あいの里地区街路樹の対風性評価試験
- 伊藤 務：中国山西省 第二次黄河中流域保全林造成事業に参加して
- 真田 勝：黄河中流域保全林造成計画地の土壌概観
- 山上 勝治：笹流貯水池前庭既存林内樹木内部腐朽調査
- 有田 勝彦：白老町竹浦神社のエゾヤマザクラ幹空洞の治療と経過
- 吉田 憲一：街路樹診断データ分析からの一考察
- 金田 正弘：桜の名所におけるウソの被害
- 事務局：平成19年度 北海道支部の活動
- 表紙写真：平岡樹芸イチイ（撮影：真田勝）

18号 40頁 2009.3.31 (橋場 一行/真田 勝)

- 橋場 一行：[巻頭言] 日本樹木医会の法人化と支部活動について
- 新会員紹介：18期4名（石谷成規、岩瀬聡、高橋照夫、藤野敏秀）
- 原 秀穂：樹木の害虫—外来種・マイマイガなど—
- 橋場 一行：「北海道社会貢献賞」を受賞して—森を守り緑に親しむ功労者—
- 高倉 康造：せたな町「巢籠もりの松」（イチイ）の保全について
- 有田 勝彦：ケヤマハンノキのハンノキハムシによる食葉被害
- 金田 正弘：樽前小学校校舎横のエゾヤマザクラ診断
- 薄井 美樹・伊藤 務：ハルニレ老木の大木の治療
- 橋場 一行：中学生の樹木医に対する質問から—中富良野町立中富良野中学校生徒からの質問への回答—
- 真田 勝・
浦島美也子：見えない支柱（地下支柱）にご注意
- 吉田 憲一：高木化した街路樹管理の一考察
- 真田 勝：「これなんじゃ」マツの多芽病（球果てんぐ巣症状）
- 小倉 五郎：ポリエチレン・フィルム利用による癒合促進
- 金田 正弘：牧場の大ハルニレ
- 福士 正明：樹木に関する訴訟に関わって
- 「みどりの環境改善活動支援事業」
平成19年度グリーンコーディネーター派遣状況
- 事務局：平成20年度 北海道支部の活動
- 表紙写真：サップ・ローム芝生（撮影：真田勝）

19号 36頁 2010.3.31 (橋場 一行/真田 勝)

- 橋場 一行：[巻頭言] 樹木医の活動と倫理感の高揚
- 新会員紹介：19期3名（石山隆、高谷俊和、渡邊温）
- 那須 仁弥：北海道育種場の育種成果（講演要旨）
- 田村 明：高炭素固定能力林木育種品種の開発（講演要旨）
- 生方 政俊：北海道育種場における種間交雑（講演要旨）
- 高倉 康造：遺伝資源管理課の業務（講演要旨）
- 金田 正弘：桜の大径木移植—環状剥皮を主体とした林試移植法の応用—
- 山上 勝治：幹・枝の外科治療とその後の経過・・・
充填剤使用の一例
- 阿部正太郎：砂川神社の水松
- 伊藤 務・
金田正弘：由仁町を日本一の桜の町に
- 志鎌 純一：札幌市立山の手南小学校「サクマロ君」の治療
- 豊田 栄：移植困難といわれるモンタナマツの移植事例

- 真田 勝：「これなんじゃ」エゴノネコアシアブラムシ
- 吉田 憲一：連続的強剪定による樹勢衰弱の一例
- 金田 正弘：中標津町 上原牧場のミズナラ
- 福士 正明：外来バチを駆除し生態系を守りたい
- 「みどりの環境改善活動支援事業」
平成21年度グリーンコーディネーター派遣状況
- 事務局：平成21年度 北海道支部の活動
- 表紙写真：前田一歩園カツラ（撮影：阿部正太郎）

20号 記念号

68頁 2011.3.31 (橋場 一行/真田 勝)

- 橋場 一行：「巻頭言」
「樹守」No.20の発刊にあたって
- 中村 澄夫：「樹守」特集号発刊を祝して
- 小田島 恍：近況(老境)
- 新会員紹介：20期4名
内田 則彦：北の樹木医になって
川口 治彦：樹木との係わりを持ち続けたい
鈴木 淳己：樹木医のわたし
鈴木 隆：探究心を深め、若さを持ち続けること
- 入山 義久：芝生と緑化について（講演要旨）
- 篠田 英史：土壌の基礎知識（講演要旨）
- 鈴木 順策：地域社会における緑の活動
- 金田 正弘：専業樹木医を目指して
- 館 和夫：台風被害を受けたケヤキの補修とツバキの樹勢回復
- 高橋 照夫：アカマツ・クロマツの赤斑葉枯病
- 池ノ谷重男：マイマイガの発生状況
- 志鎌 純一：ウチジロマイマイのニオイヒバ食害
- 阿部正太郎：私の守護霊
- 福士 正明：自然環境功労者環境大臣表彰を受けて
- 吉田 憲一：外観診断と精密診断、そして空洞の検証—ポプラの大往生—
- 豊田 栄：開口部の閉塞処置と腐朽の進行について
- 高谷 俊和：緑化樹見本園の案内体験
- 岩瀬 聡：樹木医補制度と学生教育について
- 北浦 みか：雨水浸透型花壇のご紹介
- 桜田 通雄：地方の樹木医として思うこと
- 橋場 一行：佐々木雅人さんを偲んで
- 中村 哲世：手宮公園（小樽市）桜再生プロジェクト
- 伊藤 務：青葉の松
- 小倉 五郎：生活空間に森づくり
- 高倉 康造：カルチャースクールの講師を担当して
- 日月 伸：木登りのススメ
- 渡邊 温：生物多様性時代の樹木医
- 阿部正太郎：樹木への恩返し
- 清水 一：時期別にポット苗を植栽した事例
- 山上 勝治：街中の気になる樹
- 浦島美也子：平成22年10月末の雪害について
- 真田 勝：コラム 雪の重さ
- 志鎌 純一：札幌市立山の手南小学校「サクマロ君」の治療（Ⅱ）
- 石谷 成規：視野を広げる、視線を集める
- 事務局：平成22年度北海道支部の活動
22年度グリーンコーディネーター派遣状況
- 樹守総目次（1～20号）
- 表紙写真：道民の森ミズナラ（撮影：阿部正太郎）

21号 54頁 2012.3.31 (橋場 一行/真田 勝)

- 橋場 一行：[巻頭言] 樹木医制度創設 20 年を振り返って
- 新会員紹介：笠倉 信暁(21期)、村木 達男(21期)
- 館 和夫：「縁桂」に施した補修と今後の保護対策について
- 山上 勝治：元町排水場百年桜樹木点検
- 金田 正弘：宏楽園のソメイヨシノ外科的処置
- 福士 正明：最近の森林・林業の現状について
- 伊藤 務：桜が咲いたよ・梅はまだかいな
- 高谷 俊和：道北の森林地帯の今昔
- 豊田 栄：エゾシカの被害
- 阿部正太郎：真駒内の古木くまなく調査によせて
- 吉田 憲一：樹木医の仕事
- 事務局：鈴木順策氏北海道社会貢献賞受賞
- 岩瀬 聡：卒業式を終えて
- 涌島美也子：札幌市円山公園における台風の影響による被害報告と考察
- 真田 勝：北海道に自生する常緑広葉樹
- 桜田 通雄：スリランカの植物を見て
- 金田 正弘：幌萌のエゾヤマザクラ巨木の辿った道
- 阿部正太郎：道民の森の大ナラさん喜んでくれるかな
- 橋場 一行：館 和夫さんの名作紹介
- 事務局：平成23年度活動報告
- 表紙写真：「樹木医と歩く知床の森林(もり)」(撮影：鈴木順策)

22号 54頁 2013.3.31 (真田 勝/涌島 美也子)

- 真田 勝：[巻頭言] 新たなビジョンに向けて
- 新会員紹介：成田 裕樹(22期)、小倉 誠二郎(19期)、明島 直之(9期)
- 高倉 康造：ご神木立ち枯れ事件について
- 桜田 通雄：樹木管理と公物の管理
- 涌島美也子：海外樹木 ご紹介
- 吉田 憲一：都市公園の危険木
- 伊藤 務：生きていたケヤキ
- 笠倉 信暁：樹木医になって…その後
- 村木 達男：18年ぶりの再会
- 志鎌 純一：福島での1年を思う
- 阿部正太郎：イチイ治療にあたって
- 金田 正弘：偶然遭遇した桜並木の樹病激害と樹木医必要性の有無
- 川口 治彦：プラタナス炭疽病の発生から6年余、その後を思うこと
- 金田 正弘：博物館友の会『文化公園で紅葉狩り』
- 阿部正太郎：スズメバチの世界
- 福士 正明：こんなことをしています
- 豊田 栄：平成24年度第1回日本樹木医会「樹木医実践技術講座」報告
- 涌島美也子：平成24年度「北海道支部技術研修会」報告
- 事務局：平成24年度北海道支部 活動報告
- 阿部正太郎：これからの「樹守」に望むこと
- 編集人：樹守の編集と投稿方法
- 表紙写真：札幌市円山公園のカツラの巨木(撮影：涌島美也子)

23号 54頁 2014.3.31 (真田 勝/涌島美也子)

- 真田 勝：[巻頭言] さらなる技術・知識・資質の向上をめざして
- 新会員紹介：廣田 善己(23期)、近 大輔(23期)
- 熊谷 恒希：エアースコップを使った土壌改良
- 戸田 道広：モエレ沼公園のエゾヤマザクラ
- 館 和夫：乙部の縁桂・その後
- 秋元 正信：カエデ類の変形胴枯病について
- 阿部正太郎：天神山の紹介
- 日月 伸：帯広の森と十勝の樹木医など
- 吉田 憲一：生長するマンション樹林地の問題
- 福士 正明：近況と雑感
- 笠倉 信暁：樹木の形の不思議展を見学して
- 金田 正弘：エゾヤマザクラの不定根誘導処置の効果
- 豊田 栄：北海道の街路樹について思うこと
- 井口 和信：富良野市の街路樹
- 金田 正弘：強風で主幹が折れ、掛り枝になったエゾヤマザクラの処置
- 真田 勝：日本樹木医会 栃木大会に参加して
- 阿部正太郎：平成25年度「ミニ研修会」報告
- 阿部正太郎：平成25年度「北海道支部技術研修会」報告
- 事務局：平成25年度北海道支部の活動報告
- 編集人：樹守の編集と投稿方法
- 表紙写真：血脈桜(ケチミヤクザクラ)(松前町光善寺)

24号 64頁 2015.3.31 (真田 勝/熊谷 恒希)

- 牧野 俊一：特別寄稿「巨樹と時間」
- 真田 勝：[巻頭言] 記録こそ宝なり
- 新会員紹介：加藤 真樹(24期)、後藤 暁子(24期)
- 鈴木 順策：知床の悠久の森を歩く
- 山上 勝治：函館五稜郭公園のサクラ・五稜郭築城150周年を迎えて
- 金田 正弘：道内で触れた一本桜の光景
- 村木 達男：樹木医になって3年・樹木診断の現場
- 鮫島 宗俊：北海道の街路樹について思うことNo.2
- 渡邊 温：東京都の街路樹診断マニュアルを通読する
- 金田 正弘：様似町役場前のサトザクラ関山の移植
- 笠倉 信暁：林業の現場から
- 吉田 憲一：『自己治癒力と抗がん剤』
- 真田 勝：[北海道外来樹種物語]メタセコイア
- 橋場 一行：樹木医と倫理について
- 阿部正太郎：エゾモモンガが宿る校庭の巨木
- 桜田 通雄：北海道の樹木医を増やそう
- 福士 正明：樹木医の歳月を振り返る
- 細縦 聡子：札幌で一年間暮らしてみても
- 真田 勝：松根油
- 熊谷 恒希：北海道の巨樹・巨木・名木
- 豊田 栄：平成26年度「北海道支部技術研修会」報告
- 事務局：平成26年度北海道支部の活動報告
- 編集人：樹守の編集と投稿方法
- 表紙写真：幌萌の大桜(室蘭市)(提供：金田 正弘、撮影：牧 造園)

25号 64頁 2016.3.31 (真田 勝/熊谷 恒希)

- 及川 弘二：[特別寄稿]「木育」をご存じですか
- 真田 勝：[巻頭言] 愛林施業と樹木医
- 新会員紹介：朝野 英昭(25期)、今田 秀樹(25期)、山下 雄志(25期)、吉村史明(25期)、木村 恒太(21期)、濱田 拓(21期)
- 山上 勝治：函館公園のサクラ・道内最高齢のソメイヨシノ
- 金田 正弘：浦河町の名木を訪ねて
- 桜田 通雄：サクラ切るバカ、梅切らぬバカーサクラの樹形について思う
- 真田 勝：有田勝彦氏を偲んで
- 村木 達男：樹齢350年の北海道記念保護樹木「イチイ」の土壌改良
- 阿部正太郎：白石小学校のハルニレの治療
- 池ノ谷重男：雪虫
- 真田 勝：[北海道外来樹種物語]シンジュ
- 金田 正弘：極めて早い里桜の成長と大きく育った桜の行く末
- 笠倉 信暁：市民による里山の森林調査に携わって
- 鈴木 順策：学び舎の桜と私
- 後藤 暁子：「恵庭市公園樹、街路樹シンポジウム2015」に参加して
- 佐々木一郎：札幌市における保存樹木の現状と安全対策
- 真田・阿部・村木・今田：誰が守るか保存樹木
- 吉田 憲一：「哲学の木」伐採事件で思うこと
- 真田 勝：日本樹木医会埼玉大会に参加して
- 豊田 栄：平成27年度「北海道支部技術研修会」報告
- 事務局：平成27年度北海道支部の活動報告
- 編集 人：樹守の編集と投稿方法
- 表紙写真：黄金山のイチイ(石狩市浜益区実田)(撮影：菅野 信治)

26号 60頁 2017.3.31 (豊田 栄/熊谷 恒希)

- 濱田 修弘：[特別寄稿] 街路樹の過剪定について
- 豊田 栄：[巻頭言] 冬期事例発表会について
- 新会員紹介：坂本 俊隆(26期)、崎川 哲一(26期)、多田 光義(19期)、前田 敬(25期)
- 山上 勝治：松前公園のサクラ…『夫婦桜』三大名木
- 金田 正弘：別海町野付小学校の千島桜樹勢回復の歩み
- 真田・阿部：札幌市民ホール前 街路樹(ハルニレ)の土壌と根系
- 金田 正弘：樽前山神社に納まった里桜
- 桜田 通雄：記念保護樹木の保護強化を
- 北浦 みか：札幌市の中小河川に関連した啓発事業について
- 池ノ谷重男：イチイに寄生するカイガラムシ類
- 井口 和信：クスサンによる連年被害を受けたウダイカンバの衰退状況
- 日月 伸：十勝地方～台風一過の森と樹々
- 阿部正太郎：老三樹に台湾林業省の人をむかえて
- 鈴木 隆：森林樹木と都市樹木と樹木医
- 真田 勝：[北海道外来樹種物語]ユリノキ
- 真田 勝：日本樹木医会神戸大会に参加して
- 阿部正太郎：平成28年度「北海道支部技術研修会」報告
- 事務局：平成28年度北海道支部の活動報告
- 金田 正弘：新聞報道にみる街路樹ニュース
- 事務局：北海道農薬指導士の研修について

○編集 人：樹守の編集と投稿方法

○表紙写真：真鍋庭園(帯広市)のセイヨウシロヤナギ

27号 58頁 2018.3.31 (豊田 栄/熊谷 恒希)

- 河原 孝行：[特別寄稿] 植物の名前と付け方
- 豊田 栄：[巻頭言] 公園樹木の点検・診断について
- 新会員紹介：木戸口 和裕(27期)
- 山上 勝治：松前公園のサクラその二…『血脈桜』
- 金田 正弘：松浦武四郎の故郷に蝦夷山桜が育つ
- 伊藤 務：開道150年に思いを馳せる
- 鮫島 宗俊：巨木を語ろう 全国フォーラム石川・金沢大会
- 吉田 憲一：「奇跡の一本松」—もしも賢治が樹木医だったら
- 池ノ谷重男：北海道におけるマツ材線虫病の発生に備えて
- 金田 正弘：古木蝦夷山桜の強風による折損倒壊木の発生と処置
- 多田 光義：樹木とカラスの関係を考える
- 高谷 俊和：きのこ売り場で、ふと思ったこと
- 阿部正太郎：私の本棚
- 真田 勝：[北海道外来樹種物語]アカナラ
- 阿部正太郎：橋場一行：福士 正明氏を偲んで
- 阿部正太郎：第2回事例発表会に参加して
- 豊田 栄：日本樹木医会群馬大会に参加して
- 真田 勝：日本樹木医会群馬大会エクスカーションに参加して
- 阿部正太郎：平成29年度「北海道支部技術研修会」報告
- 事務局：平成29年度北海道支部の活動報告
- 編集 人：樹守の編集と投稿方法
- 表紙写真：神森の赤松(新ひだか町静内神森)

28号 48頁 2019.3.31 (豊田 栄/熊谷 恒希)

- 掘 達也：[特別寄稿] ボランティアと技術者の協働による森林整備
- 豊田 栄：[巻頭言] 「北海道支部今後の取り組み事項」の進捗状況
- 新会員紹介：久野 航(28期)
- 金田 正弘：道東の桜めぐり(厚岸-根室-別海-弟子屈)
- 川口 治彦：弘前公園のサクラはなぜ100年以上生きているのか
- 山上 勝治：松前公園のサクラその三『蝦夷霞桜』
- 真田 勝：[北海道外来樹種物語]ニセアカシア
- 金田 正弘：珍しい樹木の話題
- 木戸口和裕：樹木医一年生の活動報告2018
- 今田 秀樹：「2018北海道の巨樹・名木150選」
- 阿部正太郎：第3回事例発表会報告
- 豊田 栄：日本樹木医会静岡大会に参加して
- 阿部正太郎：平成30年度「北海道支部技術研修会」報告
- 事務局：平成30年度北海道支部の活動報告
- 豊田 栄：石川 忠雄氏を偲んで
- 編集 人：樹守の編集と投稿方法
- 表紙写真：栗林石庭のオンコの巨木(札幌市豊平区月寒東の八紘学園内)

29号 50頁 2020.3.31 (豊田 栄/熊谷 恒希)

- 吉田 和正：**特別寄稿** 樹木の遺伝子情報とその利用
- 豊田 栄：[巻頭言] 登録更新制度の導入にあたって
- 新会員紹介：齋藤 保次(29期)、白鳥 桂子(29期)、豊島 幸信(29期)、吉田 一雄(29期)、百海 琢司(9期)
- 金田 正弘：地域の桜を利活用(浦河町の取組)
- 山上 勝治：樹皮異常の樹木断面—外観から予測する内部の異常
- 金田 正弘：珍しい桜の話—三題
- 真田 勝：[北海道外来樹種物語] スズカケノキ
- 鮫島 宗俊：我が故郷に想いをはせて
- 加藤 真樹：落葉松をめぐる考察ならびに篠路開基からの物語
- 阿部正太郎：第4回事例発表会に参加して
- 阿部正太郎：令和元年度「北海道支部技術研修会」報告
- 事務局：令和元年度北海道支部の活動報告
- 編集人：樹守の編集と投稿方法
- 表紙写真：浦河町西舎のオバケザクラ
(撮影・提供：浦河町観光課)

- 吉田 一雄：菌齋松(かんさいまつ) 一函館・亀尾町の名木—
- 細樫 聡子：北海道支部会員紹介
- 事務局：令和2年度北海道支部活動報告
- 事務局：資料[北海道支部役員一覧・会員動向・技術研修会・講演会・冬期事例発表会記録]
- 真田 勝：樹守(きもり) 総目次 No.1～No.30
- 編集人：樹守(きもり)の編集と投稿方法
- 表紙写真：縁桂(えんかつら) 撮影：館和夫

30号記念号 100頁 2021.3.31

(金田 正弘/真田 勝・細樫 聡子)

- 金田 正弘：北海道支部の会報「樹守」No.30(記念号)を発行して
- 鈴木 直道：**特別寄稿** 設立30周年を祝して
- 松本 竹吾：**特別寄稿** 「樹守」創刊30周年に寄せて
- 館 和夫：一樹木医の回想
- 鈴木 順策：支部の礎を築いた先達
- 阿部正太郎：「樹守」第一号の紹介
- 真田 勝：「樹守」編集11年の思い出
- 桜田 通雄：歴史を重ね、これからを想う—「樹守」30周年記念号に寄せて
- 高谷 俊和：全国植樹祭の成功を願って
- 阿部正太郎：橋場一行氏を偲んで
- 山上 勝治：五稜郭のサクラ
- 豊田 栄：森のシンボルツリー・サクラの樹勢回復
- 金田 正弘：桜の樹勢回復に終始した活動
- 百海 琢二：厚岸町子野日公園のサクラ保護育成
- 白鳥 桂子：新人樹木医活動記
- 伊藤 務：林業一筋のなつかしい思い出
- 吉田 憲一：「コロナ禍雑感」—感染拡大防止策の徹底という嘘と思考停止
- 菅野 信治：樹木医として思うこと
- 熊谷 恒希：「小川内の杉」—軌跡を振り返る
- 鮫島 宗俊：枝抜き雑感
- 池ノ谷重男：樹木の害虫図鑑と所有する害虫写真
- 真田 勝：「コラム」シャクナゲは天然の温度計
- 北浦 みか：「緑のカーテン」新たな提案
- 日月 伸：森の輪(わっこ)プロジェクトのご紹介
- 多田 光義：石狩市はまなすの丘公園砂嘴の地形と植生の関係
- 加藤 真樹：グイマツをめぐる考察と本別海の物語 [前編]
- 今田 秀樹：ヤドリギが北海道の巨樹・名木に仲間入りをした日?
- 木戸口和裕：2020 樹木医活動の報告
- 豊島 幸信：私の仕事

1. 編集の目的

近年、貴重な樹木の樹勢回復と永く保存するため、樹木医の役割と活動は重要になっている。これに携わる樹木医相互の技術や情報の交換と、これらを事業としている人達との技術、情報の交換を行うことを目的に、定期的に情報誌を発行する。

2. 執筆者

一般社団法人日本樹木医会北海道支部の正会員、賛助会員、その他の関係者。

3. 発行回数

おおむね年1回とする。

4. 規格・体裁

表紙・裏表紙はカラー、本文は原則として白黒でA4版とし、50ページ前後で適宜調整する。

5. 原稿の書き方

①原稿は原則として電子版とする。ワード原稿でメール添付またはCDなどで提出する。

②原稿の文字と規格

原稿の文字は常用漢字を用い、現代仮名づかいとする。

原則として以下のようにする。

題字：フォントはMSゴシック・大きさは16pt、副題は14pt

名前：フォントはMSゴシック・大きさは12pt

本文：フォントはMS明朝・大きさは10pt、見出しはMSゴシック・大きさは10.5pt

特別な字体を希望する場合は、画像として貼り付ける。

③字数・行数・図などおよびページ数

1ページの基本体裁は、原則として以下のようにする。

文字数：一行43字

頁行数：一頁38行

余白：上下左右25mm

題名はセンターに、執筆者名は次行の右端に揃える。

図表、イラスト、写真などを入れる場合は、MSゴシック(8pt)でキャプションをつける。

1課題4ページ以内を原則とし、4ページを超える場合は、事前に編集人と協議すること。

ページ番号は付けない。

④1文字あける場合

句読点、ハイフン、文の書き出し、改行のときは1文字あける。

⑤用語、数字の使い方

学名や学術用語などは各学会の例によることとし、動植物や菌類の名称、外国の地名、氏名などはカタカナ、病名はひらがなを用いる。数字はアラビア数字を用い、学名は斜体文字とする。

⑥数値の単位

数値などの単位はC・G・S単位とする。(例 長さcm、重さg、広さm²、ha、時間s)

⑦本文を見やすくするため、大、中、小見出しを用い、見出しはMSゴシック体。

6. 原稿は編集者に電子版で送付する。随時受け付けし、毎年1月末日締切(厳守)とする。

7. 機関誌としての体裁等を整えるため、編集人から原稿の修正を依頼することがある。



(天神山緑地の天神フジ)